

刊行にあたって

岩手県立博物館は、昭和55年の開館から30余年が経過しました。この間、県内外に散在する貴重な資料の収集、保存、および有効な活用に努め、岩手県における学術文化の拠点のひとつとして活動してまいりました。

当館では、そうした活動の一端をご報告するために『岩手県立博物館調査研究報告書』を逐次刊行しております。

その第28冊を数える今年度は、岩手県内の文化財保護と普及活動に尽力した森口多里氏の御遺族が当館へ寄贈してくださったコレクションの主体となる写真群の一部を報告いたします。

森口多里氏は、大正時代初期から戦前にかけて美術評論家として活躍され、戦後は民俗学、特に民俗芸能分野で多くの業績を残されました。

近年、この森口多里氏の業績を再評価しようとする活動が各地でおこり、当館が所蔵するコレクションへの関心も高まりつつあります。そうした潮流に後押しされる形で資料の整理作業を進めてまいりましたが、その中間報告のひとつとして本書の刊行にいたしました。

氏が遺した膨大な記録は、岩手の文化史研究に欠くことのできない資料として、末永く活用されていくものと思われれます。当館は、その貴重なコレクションを蔵する施設として、広く皆さまにご活用いただくための調査を今後も続けていく所存でおります。

最後になりましたが、資料調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げ、発刊の辞といたします。

平成24年3月

岩手県立博物館
館長 菊池 慧

目 次

刊行にあたって

目次

はじめに……………4

森口多里年譜

館蔵森口多里コレクションのあらまし

トピック 郡司直衛さんと森口多里

掲載写真一覧と凡例……………9

写真記録Ⅰ 昭和20年代……………17

昭和23年 [1948] 飯豊村[北上市]／衣川村瀬原[奥州市衣川区]／立花村[北上市]

昭和24年 [1949] 黒沢尻町川岸[北上市]／二子村鳥喰[北上市]／相去村上家[北上市]／御明神村岩持[雫石町]／稲瀬村下門岡
[北上市]／二子村鳥喰[北上市]／水沢町[奥州市水沢区]／稲瀬村下門岡・立花村[北上市]／飯豊村[北上市]
／御明神村[雫石町]／赤石村[紫波町]／水沢町福原[奥州市水沢区]／若柳村下嵐江[奥州市胆沢区]／黒沢尻
町・鬼柳村[北上市]／稲瀬村下門岡[北上市]／飯豊村[北上市]／稲瀬村下門岡・稲瀬[北上市]・奥州市江刺
区]／御明神村[雫石町]／不動村[紫波町]／水沢町[奥州市水沢区]／黒沢尻町本町[北上市]／黒沢尻町川岸
[北上市]／黒沢尻町上川岸[北上市]

昭和25年 [1950] 飯豊村[北上市]／相去村山根[北上市]／二子村鳥喰[北上市]／金ヶ崎町／相去村上家[北上市]／岩崎村煤孫
[北上市]／内川目村・大迫町[花巻市大迫町]／水沢町[奥州市水沢区]／立花村黒岩[北上市]／立花村壘山[北
上市]／黒沢尻町[北上市]／立花村[北上市]／軽米町／玉里村和田[奥州市江刺区]／水沢町[奥州市水沢区]

昭和26年 [1951] 新堀村[花巻市石鳥谷町]／谷内村倉沢[花巻市東和町]／伊手村新谷・久田[奥州市江刺区]／江釣子村[北上市]

昭和27年 [1952] 稲瀬村照沢[奥州市江刺区]／立花村・飯豊村藤巻[北上市]／立花村沢野[北上市]／自宅にて／夏油[北上市]
／盛岡市カ／盛岡市／水沢町[奥州市水沢区]／沢内村新町[西和賀町]／遠野町周辺[遠野市]／立花村沢野
[北上市]

昭和28年 [1953] 爾薩体村[二戸市]／内川目村[花巻市大迫町]／吉浜村[大船渡市]／大船渡市立根／立花村[北上市]／太田村
上鹿妻[盛岡市]／御明神村[雫石町]／盛岡市土淵／赤石村[紫波町]／田野畑村／内川目村大償[花巻市大迫
町]／鱒沢村[遠野市宮守町]

昭和29年 [1954] 盛岡市上米内／郡司家にて／爾薩体村尻子内[二戸市]／滝沢村・盛岡市／内川目村岳・大迫町[花巻市大迫
町]

写真記録Ⅱ 昭和30年代……………51

昭和30年 [1955] 滝沢村・盛岡市／釜石市

昭和31年 [1956] 遠野市／遠野市カ

昭和32年 [1957] 遠野市土淵

昭和33年 [1958] 大船渡市／釜石市唐丹町／盛岡市／水沢市福原小路[奥州市水沢区]

昭和34年 [1959] 室根村下折壁[一関市室根町]／陸前高田市矢作町／大東町曾慶[一関市大東町]／東山町長坂[一関市東山町]

昭和35年 [1960] 沢内村新町・貝沢[西和賀町]／田野畑村菅窪

昭和36年 [1961] 宮古市津軽石／宮古市／雫石町柘沢／雫石町柘沢／水沢市羽田[奥州市水沢区]／胆沢村馬留[奥州市胆沢区]
／田老町[宮古市田老町]

昭和37年 [1962] 岩泉町岩泉・釜津田／水沢市[奥州市水沢区]／沢内村・湯田村[西和賀町]／盛岡市上田／陸前高田市矢作町
／軽米町・二戸市／二戸市尻子内／野田村／久慈市久喜浜／遠野市／北上市立花

主な参考文献一覧……………94

おわりに……………96

はじめに

本書は館蔵森口多里コレクションを構成する資料のうち、その大半を占める写真資料の内容を整理し報告するものである。ここでは、コレクションの概要と、その旧蔵者である森口多里を紹介することとしたい。

■森口多里〔1892-1984〕年譜

森口多里（本名・多利）は、金物商の近江屋を営む父 伊三郎、岩井屋という老舗旅館から嫁した母 カネヨの次男として、明治25年（1892）水沢のマチ場である大町（現奥州市水沢区大町）に生まれ幼少期を過ごした。その後、一関中学を経て早稲田大学やフランスで西洋美術を学び、戦前を代表する美術評論家として活躍した人物である。

昭和20年、北上へ疎開したことを機に活動の地を岩手に移し、芸術活動の励行につとめるとともに、民俗芸能を主体とした地域研究の第一人者としても活躍した。

略歴は次のとおりである。

- 明治25年（1892）水沢市（現奥州市）大町の金物商の次男として誕生。
- 明治38年（1905）一関中学へ入学。
- 明治43年（1910）美術学校への進学を志すが家族の反対にあい断念。早稲田大学文学部に入学し英文科に在籍する。
- 大正3年（1914）早稲田大学文学部英文科卒業。以後、美術を中心とした活動で活躍する。ロマン・ロランの『ミレー』を翻訳。
- 大正5年（1916）雑誌『建築評論』『新住宅』の編集にあたる。
- 大正9年（1920）論文「恐怖のムンク」（『早稲田文学』、大正4年）などを収録した美術論集『異端の画家』出版。
- 大正11年（1922）早稲田大学理工学部建築科講師。
- 大正12年（1923）美術史・工芸史研究のためパリのソルボンヌ大学へ留学し昭和3年帰国。
- 大正15年（1926）『農民童話集 黄金の馬』出版。
- 昭和3年（1928）和賀郡黒沢尻町（現北上市）の齋藤家次女ヤエと結婚。
- 昭和17年（1942）『民俗と芸術』（二見書房）出版。
- 昭和19年（1944）『町の民俗』（三國書房）出版。
- 昭和20年（1945）5月に空襲で東京都世田谷区の自宅が全焼し家財道具や研究資料を失う。黒沢尻町に疎開し、以後、郷里の岩手に留まることとなる。
- 昭和21年（1946）岩手郷土芸能会副会長として第1回岩手郷土芸能祭を開催。
- 昭和22年（1947）深沢省三・紅子、舟越保武らと岩手美術研究所を創立。
- 昭和23年（1948）岩手美術研究所を母体として岩手県立美術工芸学校が設立され、初代校長に就任する。26年には県立盛岡短期大学美術工芸科として再出発、その教授に就任する。
- 昭和27年（1952）岩手県文化財専門委員（現文化財保護審議会委員）として昭和51年まで民俗芸能・民俗資料を担当。
- 昭和28年（1953）3月、民俗学研究所宛て写真を提供。写真は柳田國男監修『日本民俗図録』（朝日新聞社、昭和30年）に掲載される。

.....

※森口宛て書簡は昭和26年10月消印のものが黒沢尻町宛て、昭和28年9月消印のものが盛岡市帷子小路宛てとなっている。北上から盛岡へ転居した時期はこの頃か。なお、帷子小路は仮寓で、昭和31年3月頃岩手大学付近に一戸建てを新築し越している。

.....

- 昭和30年（1955）昭和55年度末まで盛岡市文化財調査委員（後に文化財保護審議会委員と改称）となる。同年4月から昭和38年3月末まで三島学園短期大学非常勤講師（服飾学）。
- 昭和31年（1956）岩手大学学芸学部（現教育学部）教授に就任。昭和33年の退官後も昭和56年まで非常勤講師として「東西工芸史」を講ずる。
- 昭和37年（1962）『岩手の民俗芸能～山伏神楽篇』（県教委）発行。日本民族学協会（宮本馨太郎）の年度総合研究「日本在来民具の民族学的研究」に参加する。
- 昭和38年（1963）『民俗の四季』（熊谷印刷出版部）出版。「民俗資料緊急調査」に参加、その成果は昭和41年度発行の報告書『岩手の民俗資料』（県教委）に反映される。
- 昭和39年（1964）岩手県教育表彰を受ける。
- 昭和40年（1965）『岩手の民俗芸能～念仏踊篇（附・山伏神楽補遺）』（県教委）発行。
- 昭和42年（1967）勲四等瑞宝章叙勲。
- 昭和44年（1969）『岩手の民俗芸能～獅子（鹿）踊篇 上巻』（県教委）発行。
- 昭和45年（1970）『岩手の民俗芸能～獅子（鹿）踊篇 下巻』（県教委）発行。
- 昭和46年（1971）『日本の民俗 岩手』（第一法規出版）、『岩手県民俗芸能誌』（錦正社）出版。
- 昭和59年（1984）永眠。享年91歳。従五位叙位。



昭和32年8月24日 盛岡市愛宕神社にて。10数年ぶりに復活した上鹿妻念仏剣舞を調査中の森口。

■館蔵森口多里コレクションのあらまし

森口が戦前に集積した研究資料等は、昭和20年5月の空襲で家財もろとも焼失したという。よって、当館が蔵する資料は戦後に収集したものが大半を占める。

それらの資料は森口の死後、ご遺族のご厚意により、蔵書は岩手県立図書館、美術関係資料は岩手大学、民俗関係資料は岩手県立博物館にご寄贈いただいた（後に、書簡等一部資料は盛岡市先人記念館で受贈）。

岩手県立博物館が蔵するコレクションは、主として昭和20年代から昭和40年代の調査データ、写真、スクラップで構成される。このうち、整理が完了した分の目録は『岩手県立博物館収蔵資料目録』21（2009）に掲出済みのため割愛し、概要のみを記しておく。なお、文中のNo. はコレクションの通し番号を表す。

（1）スクラップブック



「郷土芸能記録」（No. 132）・「岩手郷土芸能祭」（No. 162-164）・「郷土芸能」（No. 135-141）・「民俗芸能」（No. 143-146）・「芸能」（No. 168-170）・「民俗一般」（No. 147-155）、「現代美術」（No. 373）、「芸術考古」（No. 374-381）とカテゴライズされたもののほか、「柳田先生」（柳田國男関連記事、朝日新聞連載「柳翁閑談」No. 161）、「新風土記」（朝日新聞連載 No. 133-134）、雑（昭和35年からの切抜 No. 156-159）等からなり、その大半は自筆で新聞名と日付が記入されている。

民俗芸能関係のスクラップブックは、新聞記事とパンフレット・書類・書簡等を貼付している。貼付の構成は年次ごとと限らず、同一団体や大会ごとに頁をまとめている例も多く見られる。

パンフレットについては、自身が加筆したものと未記入のものとの2種を貼付している場合が多い。内容は昭和21年8月15日に開催された第1回岩手郷土芸能祭関係の記事・書類等から始まる。

新聞切抜は、岩手新報（昭和21年4月26日創刊、昭和27年より岩手新聞）、新岩手日報（昭和26年9月8日より岩手日報）、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞が主体であり、これに岩手タイムス等の地方紙や市町村広報紙が若干認められる。地方紙や市町村広報紙は、調査に訪れた先で収集したもののほか、在住者から提供を受けたものと考えられる。



その他、調査の折り採集してきた一紙物を貼付したスクラップブック（No. 165）がある。昭和31年7月に遠野で採集したマッコツナギの刷りもの、かつて北上市黒岩の白山神社で配った蘇民将来の紙札、大迫町で製作されたウンスンカルタや花札の版木からおこした一紙物、同じく大迫で製造した煙草の包み紙やレットル、醤油（森口の妻・ヤエの実家である陸中黒沢尻町川岸 齋惣商店）と砂糖のレットル、昭和26年に谷内村倉沢で採集したマジナイ紙、明治20年代の郵便切手代請求書（森口の親戚筋の商家宛て）などを付している。

（2）綴り類



森口は岩手郷土芸能祭を企画運営する岩手郷土芸能会のメンバーとして、さらには県文化財専門委員の民俗部門担当として、各地に伝承される民俗芸能の保持団体や市町村教育委員会等からの情報収集を積極的に行っている。綴り類の大半は、その折りに提供された資料と提供者の添書等からなり、「かぐら」（No. 127）・「しし踊」（No. 126）・「けんばい」（No. 128）・「田植踊」（No. 129）に分類し綴っている。

その他、県文化財専門委員と盛岡市文化財調査委員委嘱時の会議資料、日本民謡協会やまつり同好会、宮本常一が関わっていた日本観光文化研究所の会報等が綴られている。

(3) ノート・メモ



メモは訪れた先で見聞しながら筆記・スケッチしたものであろうか。鉛筆で無秩序に情報が書き込まれている。中には旅費支給の領収書等へ走り書きしたものもある。

対して、ノートは文章に乱れがなく、調査内容を改めて整理し、書き直したものと考えられる。調査日時は明記されていない場合もあるが、昭和21年11月4日の花巻市・幸田神楽調査時（No. 364）の情報が最も古く、昭和48年7月27日の盛岡市・千手院調査時（No. 206）が新しい。なお、ノートに記された情報の多くは、『岩手民俗芸能誌』（錦正社、1971）や『民俗の四季』（熊谷印刷出版部、1963）等の著作に反映されている。森口の主要著作は本書巻末を参照されたい。

(4) ネガフィルムアルバム、ポジフィルムケース

(5) 紙焼きアルバム

本書で取り上げる画像の種類は下記の4種からなる。

(1) 乾板（洋書の挿絵を撮影したもの）

(2) ブローニーフィルム（初期は645判モノクロ、主として30年代以降は66判モノクロ）

地域別・撮影日別・被写体の内容別と無秩序に収納しており、ごく一部に撮影場所などが書かれたインデックスシールが貼られている。特に晩年になって出版社等に提供したフィルムは、返却時の封筒に納入されたままとなっている。

(3) 35mmフィルム（①カラーネガ、②カラーポジ、③モノクロネガ [大半がハーフサイズ]）

カラーポジフィルム以外は、地域別・撮影日別・被写体の内容別と無秩序に収納されており、ごく一部に撮影場所などが書かれたインデックスシールが貼られている。カラーポジフィルムは森口光彦氏が撮影、自身の手でマウントに撮影場所・年月日の情報を書き加えている。

(4) プリント（多くは上記1～3と重複、新聞社や個人等から提供を受けたものもある）

フィルムは、親戚の郡司直衛・郡司忠治両氏から提供を受けたものが多分に含まれている。郡司直衛氏によれば、撮影スタッフとして調査に同行し成果品のフィルムやプリントを提供したほか、単独で撮影したものも森口へ送付し、それが利用されることもあったという。また、プリントのなかにはフィールドワークに同行した県教育委員会関係者（県教育長社会教育課・佐藤昭一氏、小形信夫氏、下閉伊教育事務所長・沢田貞一氏、県内各地の学校教諭など）、同時期に県文化財専門委員の職にあった人物（司東真雄氏、草間俊一氏、吉川保正氏など）、新聞各社（岩手新報社、岩手日報社、毎日新聞社など）から提供を受けたものもある。このうち、県教育委員会関係者以外の人物から提供を受けたもの、撮影者が判然としないもの、撮影者とコンタクトがとれないものについては著作権法に基づく縛りが存在している可能性もあり、現段階においては公開活用を控えている。

なお、画像については次の作業工程で整理をすすめている。

(1) 糊付アルバムに貼付されたプリントをはがし表裏両面をスキャン。アルバムの台紙に固着したプリントについては資料の状態を維持するため裏面の読み取りを控える。

(2) フィルムは35mmのみ直接スキャンし、ブローニー判については予算とPC環境の制約からプリントがないもののみを選択し、そのベタ焼きをスキャン。

※書を改めて報告する予定の芸能関係の一部はスキャン作業が終了していない。現段階でデジタル化が終了した画像はプリント・フィルムあわせて10,000カットを超えている。

(3) スキャンした画像を収納アルバム別・撮影年月日別・地域別に分類。分類した写真の内容が取り上げられている著作物や調査ノート、スクラップブックと照合し内容の重層化を図る。あわせて、撮影日・地域の情報が欠落している画像についても前掲資料と照合し可能な限り判別する。

(4) 森口宛て書簡の文面やスクラップブックの新聞記事等から提供を受けた写真を割り出し、その著作権者を明らかにする。

※前述のとおり著作権者が不明瞭なもの、保護期間にあると想定されるものは公開を控える。ただし、職務の一環として県教育委員会関係者が撮影提供した写真の著作権は組織に帰属するため公開の対象とする。

(5)写真裏面情報のテキスト化。

(6)撮影者と撮影対象にゆかりある方々へ写真の存在を通知し、利用許諾を得る。

単独で整理にあたっているため作業が長期化する可能性もあるが、資料取扱を担当する執筆者の展望としては、将来的にすべての情報を一元化するためデータベースと画像を添付した資料カードを作成したい。

このほか、整理中の品として書簡（提供を受けた写真が同封されていたもの、民俗慣行に関する照会への回答など）や名刺類、宿泊施設の領収書、観光絵葉書、昭和36年宮古市津軽石で採録したおしら祭文（オープンリール）等がある。

■トピック：郡司直衛さんと森口多里



郡司直衛さん 大正8年(1919)、北上市旧黒沢尻町の商家の家に長男として生まれる。森口の妻・八重さん方の甥にあたる。

昭和20年5月25日の空襲で世田谷の家を失った森口多里は、妻・八重さんの実家がある北上へ疎開し終戦を迎えた。

そのとき53の歳を数えていた森口は、東京に戻らず郷里の岩手にとどまることを選択。それから30余年、「書を読む代りに民俗を実地に読もうと」^(註1)各地を見聞して歩き様々な記録を残した。そのうち、主として昭和20年代に県内陸部を写した写真は、スタッフとして森口に同行する機会の多かった郡司直衛さんが撮影したものである。

人生半ばまで労力をそそいできた研究資料等を失い「都落ち」^(註2)した森口が、岩手で精力的にフィールドワークを行っていたのは、「よき理解者」であり「協力者」でもあった郡司直衛さんの存在が身近にあったことも多分に影響しているのではないだろうか。

当館では、ご遺族のご厚意により寄贈されたコレクションの大部分を占める写真群の整理を現在も続けている。そのなかで、撮影年月日や場所が特定できないカットについては郡司直衛さんの著書を参考にしたり、ご自宅を訪ね^(註3)直接ご教示いただいたりしてきた。

ここでは、郡司直衛さんご夫妻に写真を確認していただきつつ伺ったお話を軸とする内容を紹介することとしたい。

極めて断片的なものであり、学術的に「森口多里」の年譜を埋める材とならないことは重々承知している。しかし、多くの時間を共有した郡司直衛さんだからこそ垣間見ることのできた森口の一面としてとらえていただければと思う。

郡司直衛さんが初めてカメラを手にしたのは黒沢尻中学（岩手県立黒沢尻北高等学校の前身）時代のこと。最初の被写体は新築した家のお稲荷さんだったという。その後、カメラを手に森口と行動をとともにした最初の記憶は昭和16年（1941）の秋。この折りに立花（現北上市）のりんご園で森口自らポーズをきめ撮影した肖像写真は、空襲の被害にあうまで世田谷の森口の自宅に飾ってあったという。

その年の11月10日には、銃を携え猟犬を連れた鉄砲打ちの伯父（醤油醸造を生業とする商家を継いだ八重さんの兄）と森口、郡司さんの3人で成島へ毘沙門天立像を見に徒歩で出かけている。暗いお堂のなかで、光源は1本のろうソクのみ。毘沙門天立像を拝観した森口は「博物館の広場のセンターに置きたいね」と話したという^(註4)。

この日、乏しい光量の中で郡司さんが撮影した地天女の写真は、翌17年刊行の『民俗と芸術』の口絵に掲載された。郡司さんの写真を森口が採用した初めてのことであった。

ちなみに、森口や郡司さんと交流のあった高村光太郎(1883-1956)は、この写真を見て「土門拳もこんなふう撮りたがっていますよ」と話してくれたという。



昭和23年4月11日、北上市飯豊の高橋清松家にて撮影。向って左から森口多里、高橋清松氏。向って右は郡司直衛氏の奥さま。この高橋家で郡司さんは奥さまと知り合いご結婚なさったという。この不意の「お見合い」は、森口によりセッティングされたものという。（撮影郡司直衛氏）

終戦を迎え戦地から帰還した郡司さんは、岩手県に居を移した森口に誘われ、カメラを手に各地を歩くこととなる。初めのうちはバスや徒歩で移動できる北上周辺の地を中心に廻った。戦後間もなくはまともなフィルムが手に入らず写真を撮る環境が整わなかったが、少なくとも21年の秋には森口や吉川保正（1893-1984）夫妻とともに水沢から満員のバスに揺られて衣川の増沢へ出向き、秀衡塗の取材を行うなどしている。

「芸術写真じゃないよ」

郡司さんは、森口からかけられたこの一言を「資料として必要なものは写し込まれていなければならない」と理解し撮影にのぞんだという。

このことについて森口は、「写真はわたしのスタッフが撮ったもので、スタッフというのは、親戚の郡司直衛君（北上市）とセガレの光彦と、それからわたしとであるが、わたしが一番へただ。直衛君は民俗の意味をよく解ってくれて写真の上



昭和24年4月28日 中尊寺の枝垂れ桜の下で撮影。翌29日は毛越寺で延年舞を見学。大学の先輩であり同時期に母校で教壇に立っていた津田左右吉（1873-1961）と同席している。疎開先の平泉で戦後しばらく生活していた津田のもと（荒物屋の2階）へ挨拶に向いた森口。その場に立ち会った郡司さんは、津田に対する森口の懇篤な態度に触れ、改めて明治を生きた人の「威厳」と「礼節」を感じ取ったという。ちなみに、このとき郡司さんは持参したカメラで延年舞を撮影したが、光量の問題か何も写っていなかったという。

では最もよい協力者である」と自著『民俗の四季』序文に記している (註5)。

実際、森口が郡司さんと行動を共にするときは、カメラを手にするのはなかったという。よって、郡司さんが森口とともに出かけるときは必ずカメラと三脚を持参。その代わりに、旅費と食事は森口が出してくれた。また、フィルムを出してくれるときもあった。そして、森口が話を聞き、その間に郡司さんが撮影、計測などという役割分担でフィールドワークを行い、写真の成果品（フィルムまたはプリント、あるいはその両方）は森口へ渡していたという。

『盛岡市先人記念館だより』No. 43（2009.9.1発行）に、森口の御息女・陽子さんが寄せた「父の思い出」という手記が掲載されている。その中で、「父に甘えたり一緒に遊んだ記憶がない陽子さんが、「私の全く知らなかった父の一面」として「森口君はズーズー弁だから役者には向かないと同級生の秋田雨雀君に云われた」という記事の一節を紹介している。

郡司さんの記憶に残る森口の日常の姿もまた、明治の家長の威厳を守り続けた“おっかない”人であり、口を開くと早口で聞き取りにくい話し方をしたそうだが、フィールドに出ると一変、優しい語り口で問いかけ、合間にちょっとした世間話をはさみ、しばらくしてさり気なく同じことを聞き直し確認するという聞き取りかたをしていたという。

アポイントメントなしの相手にも警戒心を抱かせずに打ち解けていく森口。郡司さんが一緒にいた時、地元の方に不快感を示された例は水沢の在で茅葺き民家の家人に「なんでこんな古い家を写真に撮るんだ家の恥を撮らなくてもいい」といわれた1回限りであったという。



昭和23年9月7-8日 黒沢尻町 諏訪神社秋の祭礼の際の門付風景。郡司家の向いにあった造り酒屋（三保酒店）の前にて。諏訪神社の祭礼のときは、自家の屋根にあがって撮影することもあったという。

- ※1 森口多里「民俗芸術の再興」p. 21（アルス出版社 1946）
- ※2 森口多里『森口多里論集 民俗篇』（第一法規 1986）巻頭部分において、自身の帰郷を「都落ち」と記している。
- ※3 平成19年（2007）1月23日、平成20年（2008）12月3日、平成24年（2012）1月29日に郡司直衛さん宅を訪ねお話を伺った。
- ※4 郡司直衛「森口多里こぼれ話③ みちのくの仏たちを訪ねて」p. 54（小野公八編『森口多里と郡司直衛』所収、佐々木書店2011）においても紹介されるエピソードが含まれている。確かな経緯はわからないが、岩手県立博物館エントランスホールに兜跋毘沙門天立像のレプリカを配置した計画の裏には、この時の森口の着想が反映されている可能性が高い。
- ※5 森口多里『訂正増補民俗の四季』（歴史図書社 1980）

掲載写真一覧

本書 No.	標題	フィルム収納 アルバム	プリント収納 アルバム	裏面撮影者 情報ほか	撮影場所 ※撮影当時の区分	撮影年月日
1	草履づくり	民俗調査5		郡司直衛	和賀郡飯豊村	S23.4.11
2	草履づくり	民俗調査5		郡司直衛	和賀郡飯豊村	S23.4.11
3	ツマゴ	民俗調査5		郡司直衛	和賀郡飯豊村	S23.4.11
4	「金命丸」屋根看板	年中行事・祭礼1		×	衣川村福原	S23.5
5	「金命丸」屋根看板	年中行事・祭礼1		×	衣川村福原	S23.5
6	「金命丸」屋根看板	民俗調査2		×	衣川村福原	S23.5
* 参考						
7	疫神除のまじない	民俗の四季1		×	和賀郡飯豊村	2009.7.23
8	長閑寺のみだま	民俗の四季1		×	和賀郡飯豊村	S23.10.11.8
9	N家の門松	年中行事		○	郡司直衛	S24.1.6
10	N家の門松	年中行事		○	郡司直衛	S24.1.30
* 参考						
* 参考						
11	小正月の鳥追い	民俗の四季1		×	郡司直衛	2012.1.7
12	小正月の鳥追い	年中行事		○	郡司直衛	S24.2.12
13	餅つき	民俗の四季1		○	郡司直衛	S24.2.12
14	餅つき	年中行事・祭礼1		○	郡司直衛	S24.2.13
15	餅花	民俗の四季1		○	郡司直衛	S24.2.13
16	餅花	年中行事		×	郡司直衛	S24.2.13
17	餅花	年中行事		×	郡司直衛	S24.2.13
18	火踊	人形その他		○	郡司直衛	S24.2.13
19	火踊	人形その他		○	郡司直衛	S24.2.13
20	栗穂木	民俗の四季1		○	郡司直衛	S24.2.14
21	シビのまじない	オナラ民家ゴゼ		○	郡司直衛	S24.2.16
22	シビのまじない	オナラ民家ゴゼ		○	郡司直衛	S24.2.16
23	小正月のメグジ	民俗の四季2		○	郡司直衛	S24.2.16
24	小正月飾り	年中行事		○	郡司直衛	S24.2.16
25	小正月屋根書き	年中行事		○	郡司直衛	S24.2.16
26	小正月野菜づくり	オカザリ花地		○	郡司直衛	S24.2.16
27	小正月野菜づくり	年中行事		○	郡司直衛	S24.2.16
28	小正月田植	年中行事		○	郡司直衛	S24.2.16
29	まゆ玉	オカザリ花地		○	郡司直衛	S24.2.16
* 参考						
* 参考						
* 参考						
30	ドヒヨウウジン	年中行事		○	郡司直衛	S24.2.19
31	ドヒヨウウジン	年中行事		○	郡司直衛	S24.2.19
32	アブリ籠	民俗調査2		○	郡司直衛	S24.3.7
33	木屑と木台	民俗調査2		○	郡司直衛	S24.3.7
34	火神除のまじない	民俗の四季2		○	郡司直衛	S24.3.7
35	ことようか	民俗の四季2		○	郡司直衛	S24.3.7
36	ことようか	民俗の四季2		○	郡司直衛	S24.3.7
37	馬頭観音詩	年中行事		○	郡司直衛	S24.3.7
38	馬の餅	民俗の四季2		○	郡司直衛	S24.3.25
39	種壇飾り	民俗の四季1		○	郡司直衛	S24.3.25
40	種壇飾り	民俗の四季1		○	郡司直衛	S24.3.25
41	スケッチ	年中行事	No.06(36)	×	郡司直衛	S24.3.31
42	スケッチ	年中行事	No.06(36)	×	郡司直衛	S24.3.31
43	節句菓子	年中行事		×	郡司直衛	S24.3.31
44	節句菓子	民俗の四季2		×	郡司直衛	S24.3.31
45	節句菓子	民俗の四季2		×	郡司直衛	S24.3.31
46	節句菓子	年中行事		×	郡司直衛	S24.3.31
47	節句菓子	民俗調査5		○	郡司直衛	S24.3.31
48	三月節供など	オナラ民家ゴゼ		○	郡司直衛	S24.3.31

本書 No.	標題	フィルム収納 アルバム	プリント収納 アルバム	裏面撮影者 情報ほか	撮影場所 ※撮影当時の区分	撮影年月日
49	種壇飾り	バラ		×	郡司直衛	この頃か
* 参考						
50	糺	年中行事・祭礼1		○	郡司直衛	S24.4.30
51	糺ニヨとキジマ	年中行事		○	郡司直衛	S24.5.4
52	ウシモチ柱	No.06(4.5×6)		○	郡司直衛	S24.5.4
53	アブリ籠	年中行事		○	郡司直衛	S24.5.4
54	焼のモチ	No.06(4.5×6)		○	郡司直衛	S24.5.4
55	民家	No.06(4.5×6)		○	郡司直衛	S24.5.4
56	ウシモチ柱	No.06(4.5×6)		○	郡司直衛	S24.5.4
57	自然木の壁ゴメ	No.06(4.5×6)		○	郡司直衛	S24.5.4
58	民家	年中行事		○	郡司直衛	S24.5.4
59	カマガミ	年中行事		○	郡司直衛	S24.5.4
60	カマガミ	人形その他		○	郡司直衛	S24.5.4
61	カマガミ	人形その他		○	郡司直衛	S24.5.4
62	おさごぼし	民俗の四季1		×	郡司直衛	S24.5.4
63	猿若	No.06(4.5×6)		×	郡司直衛	S24.5.19
64	於呂閉志神社祭日	人形寄附地		○	郡司直衛	S24.5.19
65	於呂閉志神社祭日	人形寄附地		○	郡司直衛	S24.5.19
66	於呂閉志神社祭日	人形寄附地		×	郡司直衛	S24.5.19
67	於呂閉志神社祭日	人形寄附地		×	郡司直衛	S24.5.19
68	田の水口	人形寄附地		×	郡司直衛	S24.5.19
69	母子2組	No.16(4.5×6)		×	郡司直衛	S24.5.19
70	田の水口	人形寄附地		×	郡司直衛	S24.5.19
71	田の水口	人形寄附地		○	郡司直衛	S24.5.19
72	民家	美術民家湯立		○	郡司直衛	S24.5.19
73	民家	美術民家湯立		○	郡司直衛	S24.5.19
* 参考						
74	民家の戸袋	美術民家湯立		○	郡司直衛	S24.5.19
75	民家の戸袋	美術民家湯立		○	郡司直衛	S24.5.19
76	民家の透影	美術民家湯立		○	郡司直衛	S24.5.19
77	町家新の火桶	人形その他		○	郡司直衛	S24.6.2
78	火除のまじない	民俗調査2		○	郡司直衛	S24.6.2
79	植物(カニコ花)	民俗調査2		○	郡司直衛	S24.6.2
80	植物(サワオグルマ)	民俗調査2		○	郡司直衛	S24.6.2
81	森口肖像	No.16(4.5×6)	バラ	○	郡司直衛	S24.6.2
82	シヨイモッコ	民俗の四季1		×	郡司直衛	S24.6.2
83	田の神を休ませる	民俗の四季1		×	郡司直衛	S24.6.17
84	田の神を休ませる	民俗の四季1		×	郡司直衛	S24.6.17
85	ケアバで倉庫	民俗の四季1		×	郡司直衛	S24.6.17
86	越辺の細部	民俗調査3		○	郡司直衛	S24.6.17
87	藁馬	オカザリ花地		○	郡司直衛	S24.7.10
88	藁馬	年中行事・祭礼1		○	郡司直衛	S24.7.10
89	藁馬	オカザリ花地		○	郡司直衛	S24.7.10
90	ツマゴの籠き方	提供写真		○	郡司直衛	S24.7.10
91	ツマゴの籠き方	提供写真		○	郡司直衛	S24.7.10
92	コッコウ	民俗の四季2		○	郡司直衛	S24.7.10
93	コッコウ	年中行事・祭礼1		○	郡司直衛	S24.7.10
94	屋外のえじこ	民俗の四季1		○	郡司直衛	この頃か
95	土蔵	年中行事		○	郡司直衛	S24.7.17
96	土蔵	年中行事		○	郡司直衛	S24.7.17
97	コナシ小屋	バラ		○	郡司直衛	S24.7.17
98	マツキ台の尻	人形その他		○	郡司直衛	S24.7.17
99	マツキ台利用	民俗の四季2		○	郡司直衛	S24.7.17
100	丸籠	民俗の四季2		○	郡司直衛	S24.7.17
101	植物(カキツバタ)	民俗調査2		○	郡司直衛	S24.7.17

Table with columns for item number, title, date, and location. The table lists various items (e.g., 337 馬の彫りもの, 338 金鐘楼) and their corresponding dates and locations (e.g., 遠野市, 釜石市).

Table with columns for item number, title, date, and location. The table lists various items (e.g., 394 万歳祭, 395 万燈祭) and their corresponding dates and locations (e.g., 盛岡市, 東磐井郡).

803	「明からず」看板	○	遠野市一日市町・仲町	S37.11.22-24
804	菓子型	○	遠野市一日市町・仲町	S37.11.22-24
805	菓子型	○	遠野市一日市町・仲町	S37.11.22-24
806	菓子型	○	遠野市一日市町・仲町	S37.11.22-24
807	鏡箱	○	遠野市一日市町・仲町	S37.11.22-24
808	火桶	○	遠野市一日市町・仲町	S37.11.22-24
809	ツケケ籠	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
810	十能と炉かき	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
811	力バ葎	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
812	ナガシの左手	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
813	ナガシの右手	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
814	戸櫓	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
815	ハギリ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
816	クモテ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
817	水樽	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
818	ケド	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
819	キワリ台	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
820	イタヤの曲げ物	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
821	ヒツ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
822	膳	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
823	ハギ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
824	キスネピツ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
825	仏堂の前机	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
826	絵巻り箱	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
827	風箱	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
828	組面箱	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
829	タンス	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
830	箱かむり	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
831	箱かむり	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
832	かけすすり箱	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
833	ふんごみ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
834	ふんごみ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
835	サゴリツナ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
836	サゴリツナ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
837	裏の不動さま	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
838	裏を入れた籠	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
839	ツチ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
840	ワラシゴキ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
841	ワラシゴキ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
842	緯たぐり	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
843	コダシ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
844	ネコガラ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
845	クツツゴ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
846	ヒラツツゴ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
847	マオケ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
848	マオケをかけるカギ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
849	マノチザル	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
850	フネ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
851	エブリ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
852	小便樽と小便箱	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
853	小便樽と小便箱	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
854	小便をくぐも	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
855	シヨイモッコ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
856	藪の置き場所	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
857	妻の土入れ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
858	かけつち	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
859	蛸石	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
860	マドーリ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
861	蛇の餅	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2

862	コケシ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
863	二ホンバ	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
864	洗った大相	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
865	小正月の栗糰	○	郡司直衛 北上市立花	S37.12.1-2
巻頭	森口尚俊	○	郡司直衛 北上市立花	S32.8.24
巻頭	森口尚俊	○	郡司直衛 和賀郡飯沼村	S23.4.11
巻頭	森口尚俊	○	郡司直衛 和賀郡平泉町	S24.4.29
巻頭	歌書座臨の門付け	○	郡司直衛 和賀郡黒沢尻町	S23.9.7-8

凡例

- 本書で報告する資料は岩手県立博物館が蔵する森口多里コレクション写真のうち、昭和23年から37年の15年の間に撮影されたものである。掲載写真には通し番号を付した。なお、イベント等における民俗芸能とそれに特化した祭礼の写真は書を改めて報告するため、本書での掲載を見合わせた。
- コレクション写真のなには、森口の知人や報道機関・出版社等から提供を受けたものもまじっているが、プリント裏面に撮影者・提供者名のスタンプまたは記名がある場合は記名が判別できる。これらの画像については著作権者の所在を確認できないため掲載を控えた。ただし、職務の一環として県教育委員会関係者が撮影提供した写真の著作権は組織に帰属するため掲載することとした。
- 写真は撮影年月日に掲げた根拠はプリント裏面に記入された情報によるが、中には明らかな誤記もみられる。たとえば、同じ場所・行事を複数回訪ねた場合、誤った撮影年を記入したものがある。すべての写真は調査ノートやスクラップブック、フィルムアルバム、素簡等の他資料を見て、撮影年月日や撮影場所、撮影者、被写体の詳細を確認している。それらの資料で確認できなかったものは、素簡等において「推定」等と表記した。
- 内陸部で行なった調査の多くは、親戚の郡司直衛氏が同行し撮影などを担当しているが、その情報が明示されない写真がある。明示されたものは、郡司氏単独で調査撮影した画像の多くは、素簡等において「推定」等と表記した。
- その他、撮影者が明らかでない写真は、森口自身、またはご子息の光彦氏の手によるものである。
- 本文中の「裏面情報」/「ノート情報」で判読できない文字は■で表した。
- 同上情報のうち、公開が不適当と判断される個人情報等は*で表した。
- 本文中には、今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句や表現があるが、資料の時代背景などを考慮してそのままとした。

■本書は川向富貴子（学芸員）が編集執筆を担当した。

昭和23年[1948]

当館森口多里coll.の中で、撮影年が確認できる最も古い写真は昭和23年4月11日のものである。

この年の5月、森口は前年に設立した岩手美術研究所を母体とする岩手県立美術工芸学校の初代校長に就任している。その関係の仕事が多忙を極めたのであろうか。

(たとえば、この年の早春、稗貫郡太田村にある高村光太郎の「山小屋」を学校創立の挨拶で訪ねている [『論集 美術篇』p.197-201])

調査ノートや写真裏面の記述、スクラップブックに貼付された資料から、この年は主として盛岡以南で開催された芸能公演を見るにとどまっていることがわかる。

- 2. 15 飯豊剣舞 (飯豊村)
- 2. 25 正月行事 (二子村鳥喰の民家)
- 2. 26 神楽と雛子剣舞 (岩崎村)
- 3. 15 農民芸術祭 (盛岡・国民劇場)
- 3. 28 大乘神楽 (二子村鳥喰の民家)
- 7. 10 多賀神楽鑑賞会 (盛岡・秀清閣多賀)
- 8. 14 第3回岩手郷土芸能祭 (盛岡・県公会堂)
- 8. 20 県南郷土芸能祭 (一関 ※審査員)
- 9. 7-8 コンクール (北上・諏訪神社例祭)
- 9. 15 乙部村大菅生の高館剣舞 (盛岡八幡神社祭礼)
- 9. 20 カ 福原神楽 (水沢・駒形神社)
- 10. 13 鶴羽衣鹿踊供養碑除幕式 (郡司忠治氏写)
- 11. 28 大乘神楽 (飯豊村藤巻の民家)
- 12. 18 農民芸能大会 (盛岡・県公会堂)

■和賀郡飯豊村 藁細工 ※郡司直衛氏撮影 (昭和23年4月11日/現北上市)

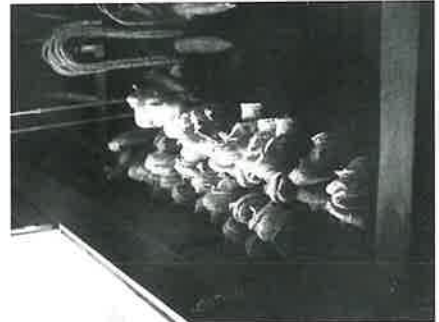
T家には飯豊村に伝わる大乘神楽の取材で訪れている。『民俗の四季』113話「かっこだら」に、「北上市飯豊のT家に、藁細工に巧みであるばかりでなく、新藁で何かをつくることをいつも楽しみにしておられた高齢の老人がいて、わたしはこの人を知ったことを仕合せだと思った」と書いている。

関連資料：森口coll.フィルムなし

※カメラマンとして同行し撮影した郡司直衛氏蔵カ。当日撮影したT家との集合写真のみフィルムありアルバムNo.16(4.5×6モノクロ)



001-002 裏面情報：飯豊村 T氏老人 草履づくり 昭和廿三年四月十一日



003 裏面情報：飯豊村 T氏宅 土間入口上のツマゴ 昭和廿三年四月十一日

■衣川村瀬原 「金命丸」屋根看板 (昭和23年5月/現奥州市)

菅江真澄「かすむこまがた」にも記録される家伝薬「金命丸」の屋根看板。初代高橋勘次郎作。「遺存する屋根看板」(『民芸手帖』122号、1968.7発行、後に『論集 民俗篇』再録)に、「昭和二十三年の五月に車で通りかかって見つけて驚いたのは、この金命丸本舗の屋根看板であった。…あの当時とった写真があり、また一閃に写真館を開いていた泉兵太郎君に特に頼んで撮ってもらった鮮明な写真もあって、この方はトリプレティックが三方に開いている。」と書いている。

森口が撮影した数年後、同店舗は看板とともに奥州市前沢へ移転した。看板は現在も薬局2階に据えられている。

関連資料：森口coll.フィルムなし

※民俗手帖等に使用されている泉氏撮影写真はなし。



004-005-006 いずれも裏面情報なし



【参考】2009.7.23撮影 現在も薬局2階に設置されている。

■和賀郡立花村 疫神除のまじない ※郡司直衛氏撮影 (昭和23年12月8日カ[旧11月8日]/現北上市)

『民俗の四季』62話「やくびょうよけ」に「紙のまんなか「疫神除」と書き、その下に鬼の顔と鉄棒、左に「旧十一月八日」とか

いたのはよい方であった。写真はもっとも正式なもので…紙の上にはサイカチの実、細竹の頂にはニンニクをさして屋敷の入り口に立ててあった。」と紹介される。
 関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。



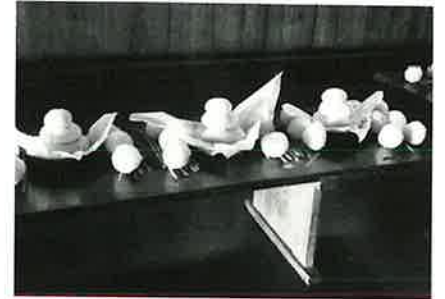
007 裏面情報なし

昭和24年[1949]

■黒沢尻町川岸 染黒寺のみだま ※郡司直衛氏撮影（昭和24年1月6日／現北上市）

森口の菩提寺である染黒寺で撮影した写真。『民俗の四季』70話「みたま」に「北上市染黒寺では多数のミタマを人みそかから正月七日まで本堂に供えるが、このミタマの飯は保存しておいて味噌をつくるときに用いる。またミタマの飯は腹薬になるといって在方からよくもらいにきたものであった」と記している。また、112話「馬の餅」に「北上市の染黒寺で和尚の祖霊にそなえたミダマを女がたべると不妊になるといわれている。」とも書いている。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。



008 裏面情報：黒沢尻町川岸 染黒寺舍利堂
みだま 重ね餅の左右にみだま飯三つ宛
24-1-6

■和賀郡二子村鳥喰 N家の門松 ※郡司直衛氏撮影（昭和24年1月30日[旧1月2日]／現北上市）

明治の終わり頃頃の創始とされる鳥喰太神楽の初代家元をつとめたN家の門松の写真。後ろに見えるのは屋根を葺くカヤを束ねたもの。『民俗の四季』72話「一本門松」、『日本の民俗 岩手』p. 235に写真とともに事例の詳細が記録される。なお、平成23年1月に鳥喰集落のN家関係者から伺ったところ、一本門松は伝え聞いているが、門松に弓矢をつけることは知らないとのこと。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。



009 裏面情報：和賀郡二子村鳥喰 N家
門松 ニワに一本だけ立てる 右上の円は薄雲の太陽 24-1-30 (旧正月2日)



010 裏面情報：和賀郡二子村鳥喰 N家 門松
三踏松・笹・栗の木の枝・弓矢 24 1 30 (旧正月2日)



【参考】2012. 1. 7撮影 鳥喰地区共有施設に立てられた門松。現在の飾りは松、笹、栗の木の枝。左右の門松に渡した注連縄の中央には、みかん、昆布、田作り(煮干)を下げる。昆布と田作りは松の葉とともにトシナ(年縄)へもつける。



■胆沢郡相去村上家 小正月 ※郡司直衛氏撮影（昭和24年2月12日[旧1月15日]／現北上市）

旧正月15日にあたる2月12日の撮影。『東北の歳時習俗』p. 96の写真解説に「鳥追い(年縄の紙シデを集め竹竿の先につけたものを振って鳥をおどす歌を唱える)(北上市相去町上家)」、同p. 104に「粟穂木(北上市相去町上家)」とある。向かって右側の写真、軒下に餅を吊るしているのが見える。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。



011



012

■岩手郡御明神村岩持 小正月行事ほか ※郡司直衛氏撮影（昭和24年2月13日[旧1月16日]／現雫石町）

相去村を訪ねた翌日、郡司直衛氏とともに御明神村(現雫石町)のY家とT家を訪ね、主として正月行事を取材している。交流のあった田中喜多美氏の紹介であろうか。この時に撮影した写真は「岩手風土記」(『講座日本風俗史』所収)、『民俗の四季』55話「千人づき」・83話「たわらにさく花」・104話「ひだな」、『日本の民俗 岩手』巻頭に掲載される。郡司さんによれば、Y家は「雫石あねこ」装束を伝える家として当時有名なお宅であったという。

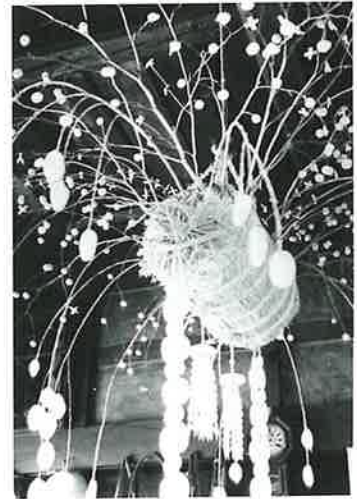
関連資料：森口coll.、フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。



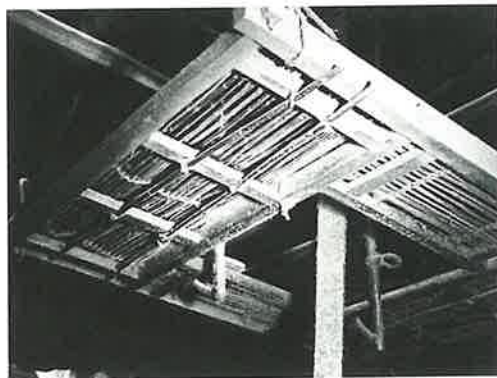
013 裏面情報：岩手郡御明神村岩持 Y家 くぶり臼・手きぎ 24-2-13



014 裏面情報：岩手郡御明神村岩持 Y家 櫃 前方二個朱塗 下のもの、長径1尺9寸5分 上のもの、長径1尺7寸6分 後方のもの 白木 24-2-13



上)015 裏面情報：岩手郡御明神村岩持 Y家 向って左) 016 裏面情報なし 向って右) 017 裏面情報：岩手郡御明神村岩持 Y家 ほんによ一対(菓十二本にアラレ) ぜに一対(大の餅五つ・小の餅五つ) 米穂(柳の枝の先に餅) 24-2-13



向って左) 018 裏面情報：岩手郡御明神村岩持 Y家 火棚・箱鍵 火棚に竹を用ゆ 24-2-13 ※『北海道・東北地方の火の民俗』p. 67に使用。

向って右) 019 裏面情報：雫石町宇アラ町 T宅 火棚・箱鍵・鍵餅(小正月) 穴あき石は火災除の咒法 シャクシは子供のヤケドの咒法 24-2-13 (旧正月十六日)



■稲瀬村下門岡 小正月行事 ※郡司直衛氏撮影

(昭和24年2月14日[旧1月17日]／現北上市)

『民俗の四季』76話「けずりかけの花」に写真が掲載され、「旧稲瀬村の一部であった下門岡や北上市立花ではカジノキを用い、小口に栗の枝の先をさし込む。枝はその重みで柳のようにたれる。下門岡では正月二十日に刈ってタキギにする」とある。また、75話「とりおい」に「江刺郡の旧稲瀬村下門岡では、このあわぼを「刈る」と称してもぎとる。そして同時に、鳥追いの棒を外庭に立てる。これは細い竹の先に年縄の幣を房のように取りつけ、あわぼのさがっていた栗の木に添えて立てたものである」と記している。

関連資料：森口coll.、フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。

020 裏面情報：稲瀬村下門岡 C家 栗穂木 鳥追棒24-2-14



■和賀郡二子村鳥喰 小正月行事 ※郡司直衛氏撮影（昭和24年2月16日[旧1月19日]／現北上市）

2週間前に門松を取材した鳥喰のN家などを再訪、主として小正月行事の痕跡を記録している。このときの写真は『東北の歳時習俗』p. 95, 97や『日本の民俗 岩手』p. 183にみえる。なお、前年の23年2月25日に鳥喰N家の正月・小正月飾り(コボトシナ)等を描いたスケッチも残っている。N家は23年夏の岩手郷土芸能祭へ出場した太神楽の庭元宅である。

関連資料：森口coll.、フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。



021-022 裏面情報：入口上部にシビの尾を取付ける 和賀郡二子村鳥喰 K家 24-2-16



023 裏面情報なし、『民俗の四季』106話「下女」に掲出される十三人鍋。この日の撮影か。



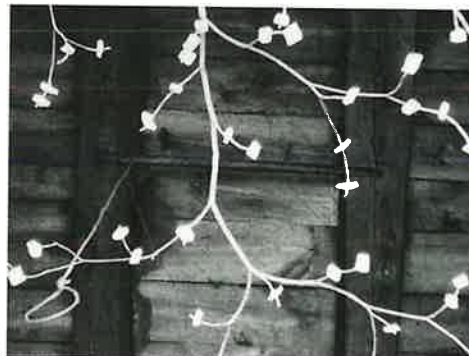
024 裏面情報：和賀郡二子村鳥喰 N家 小正月 鏡餅 ぎに 稲の穂(八重穂) 24-2-16 ※スケッチあり



025 裏面情報：二子鳥喰 熊野社 笹 べんべろ(猫柳) 24-2-16



両方) 026-027 裏面情報：二子鳥喰 野菜作り 24-2-16 旧1-19 ※スケッチあり



向って左) 028 裏面情報：和賀郡二子村鳥喰 小正月 田植 蕪 ヲガラ 豆ガラ 24-2-16

向って右) 029 裏面情報：和賀郡二子村鳥喰 N家 小正月 まゆ玉(水木) メアッコ 24-2-16



【参考】2012.1.7-8撮影 鳥喰自治会では昭和50年代半ばから「集落」単位で小正月行事をおこなっている。初日は長寿クラブの皆さんが指導する形で菓細工のナリモノなどを作る。2日目は朝早くに集合し、餅搗きと水木だんご作り、ナリモノやアワボ(粟穂)飾り、雪中田植えを行う。昭和23年に森口が記録したナリモノはキュウリ、カボチャ、ヒョウタン、デウリ(マクワウリ)に見立てた古ワラジ。



現在はキュウリ、カボチャ、ミダマのほか、二子の特産品となったサトイモも作る。平成23年は鏡餅、同24年はヒョウタンを復活させた。粟の穂に見立て黄色く着色した木片を吊るす。雪中田植えは11日のノウハダテの日に肥出した場所で行ったが、今は省略している。ホンニョの杭を立てる穴掘りに使ったアナアケと呼ばれる道具で地面を掘り、稲藁、豆ガラ、芋ガラの3種類を立てる。

■水沢 日高神社 ドヒョウジン ※郡司直衛氏撮影
(昭和24年2月19-20日/現奥州市)

2月19日は水沢の火防祭(南都田村の春駒や金ヶ崎町の田植踊の写真あり)、翌20日は水沢で行われた愛郷の日イベント(若柳村の田植踊、福原神楽、南都田村の鹿踊の写真あり)を見学。その合間に「道祖神」を撮影したと考えられる。『日本の民俗 岩手』p.167に「水沢の日高神社の杉林の中に明治時代にはまだたくさんの石の男根がならび、俗にドヒョウジンとよんでいた。…(中略)…水沢の日高神社のドヒョウジンも報賽物であったとおもわれる。」とある。同内容は『水沢市史』6の総論でも紹介している。
関連資料:森口coll, フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。



向って左) 030 裏面情報:水沢日高神社 道祖神 石・高1尺8寸 周2尺1寸5分 24-2-19
向って右) 031 裏面情報:水沢日高神社 道祖神 木製 朱塗 高4尺7寸 周約1尺1寸6分

■稲瀬村下門岡・立花村 コトヨウカ ※郡司直衛氏撮影(昭和24年3月7日[旧2月8日]/現北上市)

旧2月8日の習俗を調べるために北上市南東部の地域を歩いている。このときの写真は『民俗の四季』89話「旧二月八日」と98話「火除の大うちわ」、『日本の民俗 岩手』p.24に掲載される。「旧二月八日」には「正月の門松の心棒をそのままにしておき、旧二月八日には、屋敷の外から見て向かって右の心棒の先に刳通しの籠をのせる。左の心棒には小正月に結びつけた笹とエノコ柳(ねこやなぎ)とヤツカガシが残っているが、二月八日にはこれに杉の葉を加える。また桃の枝に一年の月の数だけの団子をつけて畑に立てる。家族の数と飼馬の数の合計だけ団子をつけるのだともいう。」とある。
関連資料:森口coll, フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。



032 裏面情報:アプリ籠 高2尺7寸7分 底辺2尺5寸3分 下門岡 C家 24-3-7



033 裏面情報:農家の木尻と木台 下門岡 C宅 24-3-7



034 裏面情報:台所の梁に毎年初庚の日に縄を巻く 火難除の呪術 下門岡上台 C宅 24-3-7



向って左) 035 裏面情報:旧2月8日 江刺郡下門岡 C家 桃の枝に団子をつけて畑に立てる 24-3-7

向って右) 036 裏面情報:旧2月8日 下門岡 正月の門松の■■■を利用 右の杭の上にモミ通し 左のそれは小正月の笹・エノコ柳(猫柳)、ヤツカガシをつけたところにこの日杉の葉を加える 24-3-7



037 裏面情報:旧2月8日 馬頭観音の石碑の前に小豆飯の握飯と幣束、握飯の下に新聞を敷く。立花村 24-3-7

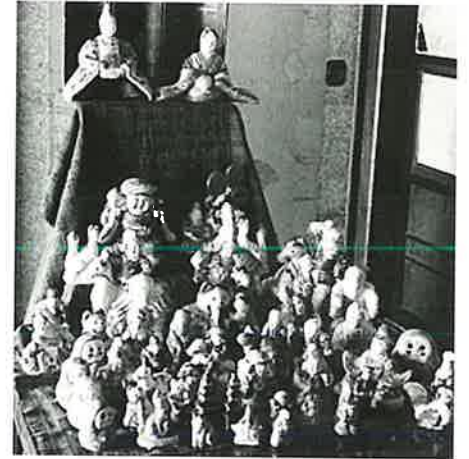
■和賀郡飯豊村 雛壇飾りと馬の餅 ※郡司直衛氏撮影(昭和24年3月25日/現北上市)

この日はT家にて大乘神楽舞い手(76歳)の隠退演楽を、翌日は剣舞を取材している。その折りに撮影したと考えられるT家の土人形は『民俗の四季』86話「ひなまつり」、『東北の歳時習俗』p.109、『日本の民俗 岩手』p.252、「節句まち」『民芸手帖』131号(※『論集 民俗篇』に再録)に掲載される。また、馬の餅は『民俗の四季』112話「馬の餅」、「岩手の厩と俗信」p.127(『北海道・東北地方の住い生活』)に詳細が記される。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ。No. 41-42のスケッチのみフィルムありアルバムNo. 8 (35mmネガモノクロ)



向って左) 038 裏面情報：馬餅 飯豊 24-2-25
中央) 039 裏面情報：雛祭の土人形(花巻人形) 飯豊村 T家 24-3-25
向って右) 040 裏面情報なし



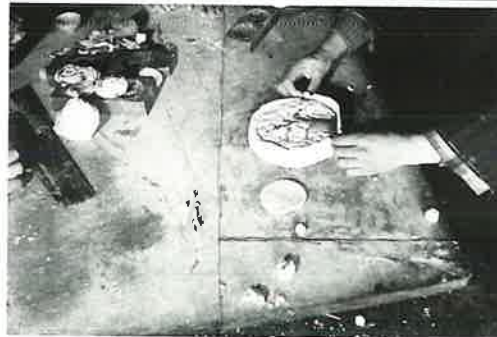
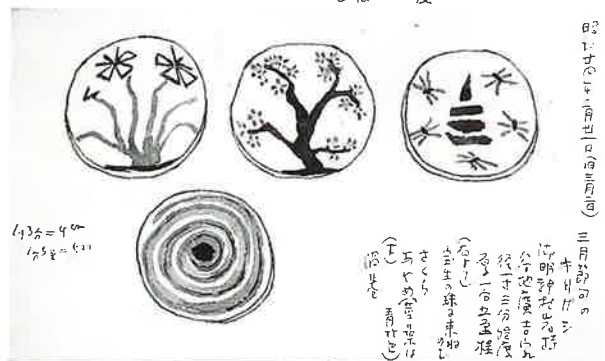
■御明神村 三月節供など ※郡司直衛氏撮影（昭和24年3月31日[旧3月2日]／現雫石町）

田中喜多美が案内し森口と郡司直衛氏の3名で個人宅を訪問（『森口多里と郡司直衛』p. 62-64）。郡司氏が撮影を担当し、森口はきれいな彩色で菓子（餅）のスケッチを残している。調査記録は『民俗の四季』87話「節句菓子」、『東北の歳時習俗』p. 109、『日本の民俗岩手』p. 252にまとめられている。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※カメラマンとして同行し撮影した郡司直衛氏蔵。

スケッチブック
三月節句の
又キマンジウ
中身は館
御明神村
岩持
谷地作次郎家
径約二寸八分
厚六分程
笹の葉に
のせる

スケッチブック
昭和廿四年三月廿日
(旧三月二日)
三月節句の
キリガシ
御明神村岩持
谷地廣吉家
径一寸三分程度
厚一分五厘程
(右より)
宝生の珠に束ね
のし
さくら
あやめ(茎葉は
青竹色)
渦巻
(下)



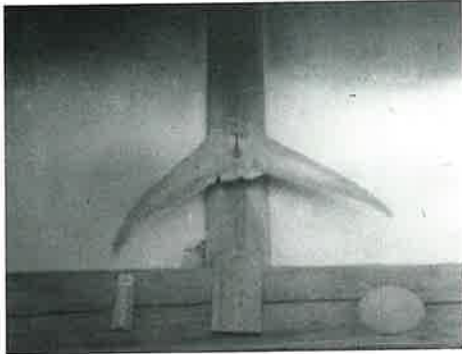
041-046 いずれも裏面情報なし
(041-042 スケッチブック撮影)



047 裏面情報：雑菓子 キリガシ(桜の木の模様)の製作
塗上



【参考】若干のひび割れはあるが、昭和24年当時の美しい色彩を残すキリガシ。森口の死後、遺品のなかから見つかった。(郡司直衛氏撮影・提供)



向って左) 048 裏面情報：農家入口の上部の束にシビの尾を逆さまに打ちつけてある。「魔よけ」と称している。岩手郡御明神村岩持 Y家 24-3-31

向って右) 049 裏面情報なし。『民俗の四季』86話「ひなまつり」に、「御明神村で内裏さまもない寂しい雑壇に心をこめて供えた手づくりの食べものをうつつた写真が手元にあるが…」とあり、その写真の可能性がある。



■紫波郡赤石村 飯櫃 (昭和24年4月30日/現紫波町)

4月28-29日は平泉町毛越寺にて延年(写真あり)、翌4月30日は赤石村志賀理和気神社春祭の田植踊(写真あり)を見学している。その時に撮影したであろう写真。延年は津田左右吉と同席し鑑賞した。
関連資料：森口coll. フィルムなし

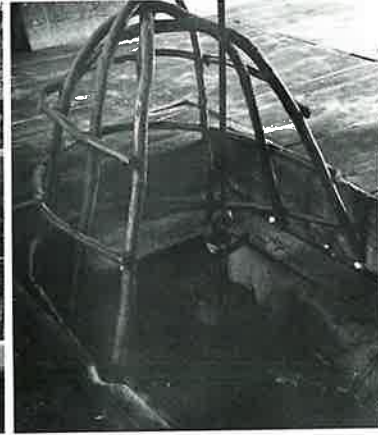
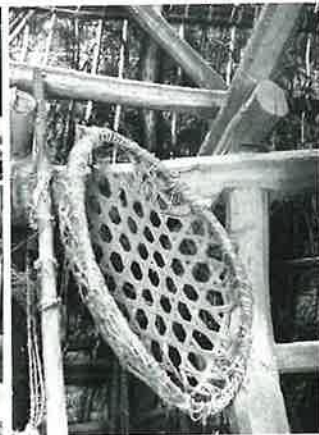
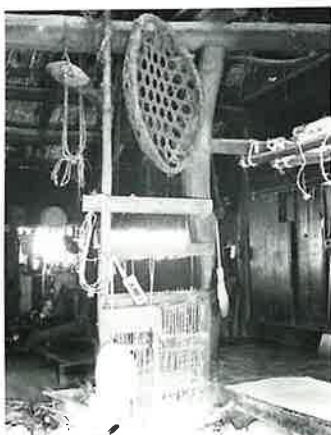


050 裏面情報：櫃 外面朱塗 笹黒塗
長径50センチ 短径34センチ 高22センチ 紫波郡赤石村 24-4-30

■水沢町福原 民家など ※郡司直衛氏撮影 (昭和24年5月4日/現奥州市)

この日は駒形神社春祭(若柳村前谷地の神楽写真あり)を見学したほか、福原にて住生活の調査を行っている。カマガミについては「岩手の厩と俗信」p. 130 (『北海道・東北地方の住い習俗』、『民俗の四季』105話「かまがみ」、『日本の民俗岩手』p. 183に、モッコは『日本の民俗 岩手』p. 62に写真とともに詳しい説明が付されている。民家については『論集 民俗篇』p. 35-6に「一文は『今和次郎先生古稀記念文集・民家』に寄せたが、写真は一枚も出せなかった」とある。なお、この頃から民家の図面を残すようになり、その一部を著書で使用している。
関連資料：森口coll. フィルム一部(52, 55, 56, 57)あり ※ほかは郡司直衛氏蔵カ。

051 裏面情報：農家の北側 藁二ヨとキジマ 水沢町福原 岩淵勲兵衛家 24-5-4

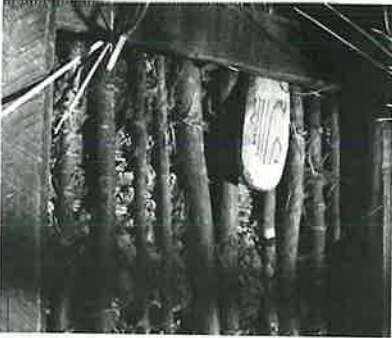


向って左) 052 裏面情報：曲線を描くウシモチ柱 左側に杭を立て、ウシモチ柱との間に障壁(その蔭が爐)を作ったのは最近の工作 水沢町福原 K家 24-5-4 右手板間に敷いたのは私共に敷いてくれたゴザ
中央) 053 裏面情報：アブリ籠 直径4尺 水沢町福原 K家 24-5-4
向って右) 054 爐のモッコ(楮で作る) 水沢町福原 K家 24-5-4



向って左) 055 裏面情報：縁側に雨戸を立てなかった形式の農家 東面 北側は道路 南側はもと厩への通り口なりし由、今は藁で蔽ふ、水沢町福原小路 K家 24-5-4

向って右) 056 裏面情報：ウシ持柱(上部)とウシ梁梁にかけてあるのはアプリ龍 水沢町福原 K家 梁の左端にさげたものは腰籠(苗入れ)次に縫 アプリカゴのそばのものはセメントのかたまり 24-5-4



向って左) 057 裏面情報：自然木の壁ゴメ 壁落ちて木舞の心とした壁ゴメのホゲ露出。さしてあるのは藁靴を作るときの木型 水沢町福原 K家土間内部壁面 24-5-4

向って右) 058 裏面情報：縁側に雨戸をたてなかった古式の農家 南面(道路に面す) 東に厩 水沢町福原小路 G家 24-5-4

※G家の図面あり。



向って左) 059 裏面情報：ウシ(梁)とカマ柱とカマ神 カマ柱は周廻2尺4寸 カマ神の下、向って右側につるされているのは鯉節削 水沢町福原字前谷地 S家 24-5-4

中央) 060 カマ神 水沢町福原 S家 24-5-4
向って右) 061 カマ神(土製)高約1尺1寸 幅約8寸 両耳に馬の藁靴をかけておく 水沢町福原 S家 24-5-4

■胆沢郡若柳村下嵐江 ※郡司直衛氏撮影(昭和24年5月19日/現奥州市)

於呂閉志神社の祭日(もとは旧暦4月19日)に猿岩を訪ねている。あわせて、下嵐江の民家調査を行い図面と写真を残し、一部は「いわての民家の屋根」(『建築界』9-3所収)、『民俗の四季』109話「台所の装飾美」で紹介している。なお、このときに取材した民家の中には石淵ダム建設のため間もなく消滅した家もある。

関連資料：森口coll. フィルム一部(63, 69)あり ※ほかは郡司直衛氏蔵カ。

062 裏面情報なし。『民俗の四季』9話「作神さまの椿」46話「おさごばし」、『日本祭礼風土記』p. 330に詳しく紹介される椿。昭和24年5月19日に郡司さんが森口とともに訪れた際にはなくなっていたという。ちなみに、『水沢市史』6に、前の年(昭和23年)下嵐江で水害があり家屋流出の被害があったことがかかっている。



向って左) 063 裏面情報：於呂閉志神社の鎮座する猿岩 胆沢郡若柳村下嵐江 24-5-19

中央) 064 裏面情報：於呂閉志神社祭典(旧4月19日、今年は1月遅れの新5月19日)に猿岩に自生の椿と笹とを折って持ち帰り、椿はお札と共に神棚に供え、笹は馬に喰はせる 24-5-19

向って右) 065 裏面情報：於呂閉志神社の祭日 椿と笹とを折って山を降りる 24-5-19



066 裏面情報：於呂閉志神社(作神様)の祭日 椿と笹とを折って山を降りる 24-5-19



067 裏面情報なし



068 裏面情報なし



069 裏面情報：母子2組 胆沢郡若柳村下嵐江 T家 24-5-19



070 裏面情報なし



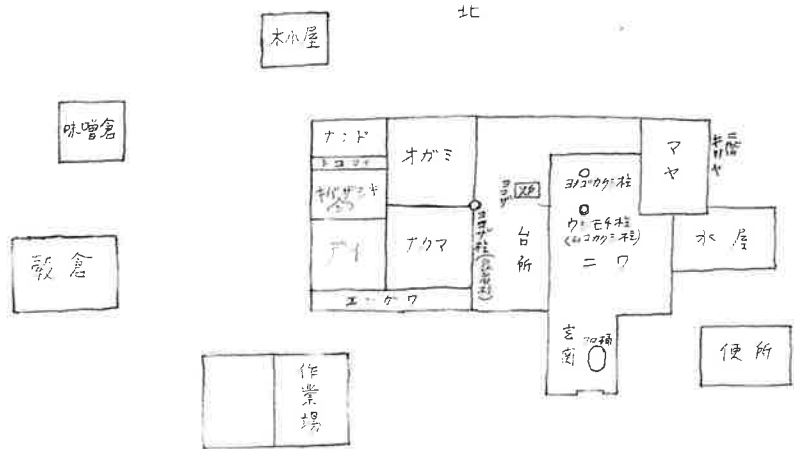
071 裏面情報：田植の後に神棚の椿と於呂閉志神社護符とを田の一水口に立てる。虫除けと称す。これは祭日の日に擬似的に立てたので、実際には神棚にあげておいて田植直後に立てるので椿は葉が枯れて赤くなっている。24-5-19



072 裏面情報：切家の玄関二階(藁などを置く)の窓は元は下部欄間と同じくサマコ(堅格子) 胆沢郡若柳村下嵐江 T家 24-5-19



073 裏面情報：母家東面の切家 張出ている部分は水屋(井戸より)。その左は厩。母家の南に張出ているのは玄関(同じく切家なり) 胆沢郡若柳村下嵐江 T家 24-5-19

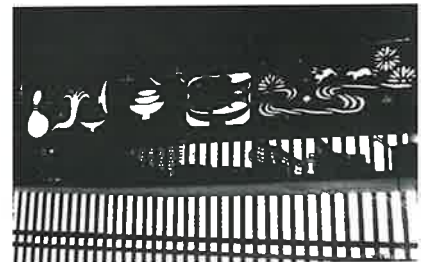


図面付裏面情報：胆沢郡若柳村オロシエ 横座の斜め後ろにヨコザ柱(または長者柱)、ニワの柱のうち木尻に向って右手のものはヨメゴカクシ柱、左手のものはウシモチ柱(ムコカクシ柱)。ウシモチ柱とヨコザ柱とで小屋組の中軸となるウシ(梁)を承けている。この家では二重のウシで、下のウシをシタウシとよぶ。室の仕切りは元は板戸または壁。デイに仏壇があって老夫婦の寝間。若夫婦は納戸に寝たが、子供が少し大きくなれば他の室に移った。ゲンカンは二階があって藁などを置いた。この家ダム建設のため消滅した。



向って左) 074 裏面情報：戸袋 胆沢郡若柳村下嵐江 T家 24-5-19

向って右) 075 裏面情報：戸袋(移築) 銀泥と墨とで描く 胆沢郡若柳村矢子沢 24-5-19



076 裏面情報：台所の流しの窓の透彫 盃の上の文字は大入叶 罌の目や紅葉(右端)には赤い紙を貼っている 胆沢郡若柳村下嵐江 T家 24-5-19

■黒沢尻町の商家と鬼柳村の風景など ※郡司直衛氏撮影（昭和24年6月2日／現北上市）

『民俗の四季』98話「火除の大うちわ」に「北上市本町の沢九さんの家のロウジ(店から裏に至る屋内通路)の裏出口の上に黒い大ウチワが数本さし立ててあった。」と話題にあげている黒沢尻の商家などを撮影。

関連資料：森口coll. フィルム81のみあり ※ほかは郡司直衛氏蔵カ



向って左) 077 裏面情報：町家の台所の火棚 中央のV木から鑿を下げる。右方の後ろに防火用の大団扇が見える。下の爐は今は用いない 黒沢尻町本町 沢九商店 24-6-2
向って右) 078 裏面情報なし。おそらく、左写真と同じ時に撮影したものである。



079 裏面情報：未だ水を張らぬ田に臨んでカッコ花(ニコウキスゲ)咲く 和賀郡鬼柳村 24-6-2



080 裏面情報：田のクロにサワオグルマ咲く 遠景にシロカキの人物 和賀郡鬼柳村 24-6-2



082 裏面情報なし。『民俗の四季』4話「すたれた農耕用語」に、「シヨイモッコで苗を運ぶ 北上市鬼柳」と紹介される。田植えの時期であるこの頃の撮影カ。昭和29年に鬼柳村が北上市へ編入される以前の撮影という。



081 裏面情報：カッコ花の間でカッコウをきく 和賀郡鬼柳村 24-6-2

■稲瀬村下門岡 民家など ※郡司直衛氏撮影（昭和24年6月17日／現北上市）

下の炉端の写真以外は撮影年を示す情報が記載されていない。稲瀬村下門岡の田植の日の写真であることから、同じ日に撮影したと推測し掲出した。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



083-084-085 上段いずれも裏面情報なし。向って左と中央は『民俗の四季』12話「田の神を休ませる」に北上市稲瀬下門岡のC家での田植えのなかの日の事例として、右は13話「ケアバで食べる」に「稲田のそばでケアバで食べる」姉と弟の田植の食事風景として紹介されている。



086 裏面情報：爐辺の細部(全景参照) 木尻につづく揚げぶた(これを木尻ノ台と呼ぶ)上の板の間の側面に小さな摘出しが設けられている。マッチや附木を入れておく。稲瀬村下門岡 C家 24-6-17

■和賀郡飯豊村 藁細工と民具 ※郡司直衛氏撮影（昭和24年7月10日〔旧6月15日〕／現北上市）

6月27日は江刺郡稲瀬村の如意輪寺と藤里村の毘沙門堂、翌28日は黒石村の黒石寺にて仏像の撮影を行っている（いずれも写真あり）。これについて、『森口多里と郡司直衛』p. 60に「昭和二十四年六月、文部省国宝調査官小林剛氏をリーダーに、県の文化財調査委員森口ほかの方々と同行」とある。7月10日はかねてから藁細工等の調査で訪問していた飯豊村のT家にて藁馬行事の記録をとっている。「旧六月十五日の藁馬」（『民間伝承』25-2、後に『論集 民俗篇』再録）や『東北の歳時習俗』p. 113、『民俗の四季』21話「藁の馬を立てる」に詳しい。また、同時に撮影したゴカゴは「北国のゴカゴ」（『民芸手帖』35-5、後に『論集 民俗篇』再録）や『日本の民俗 岩手』p. 47、依は『民俗の四季』113話「かっこだら」にて紹介している。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



087 裏面情報：旧6月15日の藁馬を作る。飯豊村 T家 家前の土間で 24-7-10(旧6月15日)



088 裏面情報：旧6月15日の藁馬を作る。刃物で藁の余剰部分を切る。飯豊村 T家 家前の土間で 24-7-10(旧6月15日)



089 裏面情報：お田の神さまを送る馬。女馬(後方)にツトに入れた餅をつける 飯豊村 T家 24-7-10(旧6月15日)



向って左) 090 裏面情報：藁製履物 脛にアグドカケ、足にシ(ツ)カケツマゴ 足の前の一足はタテワラツマゴ 飯豊村 T家 24-7-10

中央) 091 裏面情報：藁製履物 脛にハバキ、足にウソヅキ(底にワラジがついている) 人物の着ているのはノノハダコにノノモモ引。ノノはヌノの訛。飯豊村 T家 24-7-10

向って右) 092 裏面情報：藁製容器 右二つ、カッコダラ(タワラの訛ならん) 弁当などを入れて運ぶもの 正面巾1尺3寸8分、側面巾8寸、高8寸5分。左はサケコタン 腰にさげる。巾6寸、高5寸8分。飯豊村 T家 24-7-10



向って左) 093 裏面情報：ゴカゴ 飯豊村 T家 24-7-10

向って右) 094 裏面情報なし、この頃の撮影か。この写真は『民俗の四季』14話「田のそばに寝せる」に掲載される。「北上市飯豊の村崎野での所見」とある。

■江刺郡稲瀬村 藁細工と民具 ※郡司直衛氏撮影（昭和24年7月17日／現北上市・奥州市江刺区）

主目的は不明であるが、稲瀬村で藁馬や民具の調査を行っている。このときのデータは『民俗の四季』97話「原始灯火」・101話「丸ぜん」に詳しい。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



向って左) 095 裏面情報：クラ(土蔵)クラの鉢巻きと草葺屋根とのアキが大きい。稲瀬村大字稲瀬宇山岸 KT家 母家の南に在り、其入口は母家の入口と相対している。24-7-17

中央) 096 クラ 草葺屋根を土蔵の鉢巻きから高くひきはなしている。稲瀬村大字稲瀬宇山岸 KS家

向って右) 097 裏面情報：コナシ小屋 母家の方に背を向け、径に面している。米、麦、豆等の脱穀をすることをコナスと云ふ 但しコナシ小屋は色々な作業をする小屋のこと也 稲瀬村 24-7-17



098 裏面情報：マツキ台の尻(石製) 稲瀬村 CS家 24-7-17



099 裏面情報：マツキを燃やす 膳は横座に於ける主人の食事席を示す マツキ台の次は汁鍋、飯鍋の順、爐には火箸と火吹竹 稲瀬村 CS家 24-7-17



100 裏面情報：丸膳 栗材の割物、台は中空、円面朱、ふちと外面は黒 径1尺2寸 高3寸9分 稲瀬村大字稲瀬 K家 24-7-17



101 裏面情報：田のクロにカキツバタ咲く サワラグルマの花過ぎてからはカキツバタ全盛 次いでヤブクワン草やノクワン草。稲瀬村下門岡 24-7-17



102 裏面情報なし



103 裏面情報：お田の神さまを休ませる日 前景右端に白点となって見えるのが旧6月15日の藁馬に添へた幣束。この辺に「お田の神さまを休ませる田」あり。馬も女も入れない。林の下が庄屋敷ツツミ。道路より撮る。水田はツツミの方に向けて傾斜し、従ってその水はツツミに注ぐ。稲瀬村 CT家(昔の庄屋の由)



104 裏面情報：お田の神さまを送る馬(藁製)水口に近いクロに立てる お神馬(前方)は口を輪に作り手綱を桃の枝に結へる。荷駄(後方)は口を嘴を開いた形に作り、背にシトギを葛の葉で包みツツコに入れたものを付ける。身長約7寸5分(頭部共)尾長約7寸高約6寸4分 稲瀬村 CS家 24-7-17



105 裏面情報：お田の神さまを送る馬(藁製)水口に近いクロに立てる 手綱は葉つきの栗の枝に結へる。そばに幣束を立てる。稲瀬村 CT家(CS家の本家) 24-7-17



106 裏面情報：お田の神さまを送る馬(藁製)水口に近いクロに立てる 二匹共口を開嘴形に作り、シトギを含ませる。手綱は葉つきの栗の枝に結へる 大きさはCS家に略同じ 稲瀬村CK家 24-7-17

■岩手郡御明神村 野良着 ※郡司直衛氏撮影(昭和24年7月31日/現栗石町)

栗石の野良着は『民俗の四季』42話「はぎませみじか」・16話「田の草とり姿」、「岩手の田植民俗」(『逋信協会新誌』41 6 ※『論集民俗篇』に再録)、『日本の民俗 岩手』などに掲出される。6月中旬頃までに田植えを済ませていたと考えられるため、田の草取りなどの機会に田植えの装束をつけてもらったのではなかろうか。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵



107 裏面情報：田植姿 編笠、シハン、ハギマゼミジカ、前ブリ、ケアアテベ、手甲、モモヒキ 御明神村岩持 Y方 24-7-31



108 裏面情報なし；『日本の民俗 岩手』巻頭に「ハギマゼミジカの田植姿(栗石地方)紺無地の木綿と麻の染めがすり(地織)とをはぎ合わせたミジカ(短衣)。腰から下はかすりの木綿」とある。



109 裏面情報なし；『日本の民俗 岩手』p.35に「袴のハンナガ下にミジカを着てモモヒキをはき前にミジカメアアテをあてる(栗石地方)」とある。



110 裏面情報なし

■紫波郡不動村の燈籠木（昭和24年8月10日／現矢巾町）

8月1日は紫波郡赤石村にて田植踊を見学している(写真あり)。同10日は『民俗の四季』28話「とらうろぎ」に「昭和二十四年の旧暦の盆の十六日に、わたしは一人で矢巾駅から南昌山のふもとの和味部落(不動村)までの長い道を、日に照らされて歩いていた。山本家の念仏けんばいを見るためであった。歩いている間に、晴れわたった空を背にして高く立つとらうろ木をそちこちに見た。」と書いている(剣舞写真あり)。

このほか、『東北の歳時習俗』や「盆の花と燈籠」(『民芸手帖』35-7)などでも取り上げている。

関連資料：森口coll.、フィルムなし

向って左) 111 裏面情報：燈籠柱(単に燈籠とも呼ぶ) 紫波郡不動村 24-8-10 旧7月16日
向って右) 【参考】2009.8.2撮影 矢巾町内の共同墓地にて。燈籠の先端に杉の葉が見える。先端から伸びる3本の線には色とりどりの豆電球がとりつけられている。



■水沢町大安寺の提灯（昭和24年8月14日／現奥州市）

『民俗の四季』30話「盆のともしび」に、「いまあるものを大切に扱って保存するようにしなければ、特色ある盆風景の美しさは消えてなくなるだろう」と書かれたお盆の提灯。現在も変わらずお盆の時期になると客殿の縁側に吊るされている。この提灯については「盆の花と燈籠」(『民芸手帖』35-7※『論集 民俗篇』再録)、『北海道・東北地方の火の民俗』p.71にも取り上げられている。

関連資料：森口coll.、フィルムなし

112 裏面情報：お盆の時の寺の客殿 東側の縁側の方を見る 風あって提灯ゆらぐ 水沢町大安寺 24-8-14



■黒沢尻町の商家の台所 ※郡司直衛氏撮影（昭和24年12月18日／現北上市）

晩夏から秋にかけては、8月28日に岩手郷土芸能祭(大萱生高館剣舞、青笹しし踊、藤根雛子剣舞の写真あり)、8月29日と11月30日に飯豊雛子剣舞(写真あり)、9月5日に志賀理和気神社秋祭(赤石村のさんさ踊と奴踊の写真あり)、9月9日に諏訪神社例祭・岩崎村民芸大会を見学している。さらに、10月19-20日は黒石村正法寺(宝物と建造物の写真あり)を訪ねている。

関連資料：森口coll.、フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ

113 裏面情報：町家の台所の爐 今は正月の餅を焼く時にのみ用いる 手前は通路 黒沢尻町本町 沢九商店 24-12-18



■黒沢尻町川岸染黒寺の晦日 ※郡司直衛氏撮影（昭和24年12月30日／現北上市）

1月6日に染黒寺のみだまを見学しており、今回はその準備段階を記録におさめている。本来は28日に餅搗きを行うという。

関連資料：森口coll.、フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ

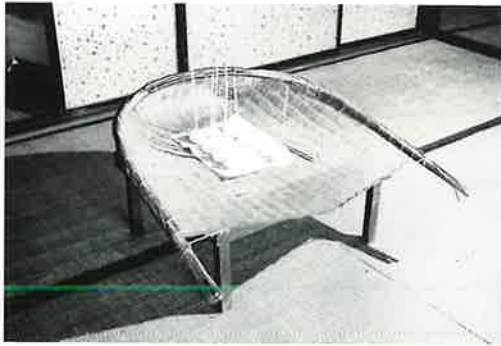
向って左) 114 裏面情報なし
向って右) 115 裏面情報：爐のカギ 黒沢尻町川岸 染黒寺の台所 24-12-30



■黒沢尻町上川岸のミダマ ※郡司直衛氏撮影（昭和24年12月31日／現北上市）

『民俗の四季』70話「みだま」に紹介される妻・ヤエの実家の事例を撮影したもの。「年とりの晩、家族が順次に進み出て箕の中に四つずつ三行にならべたミダマにひとり一本ずつ箸をさし立てるしきたりになっている」とある。

関連資料：森口coll.、フィルムなし



向って左) 116 裏面情報なし



中央) 117 裏面情報：ミダマに箸をさす 黒沢尻町上川岸 ミダマの並べ方 これがこの家では本式也 24-12-18
向って右) 118 裏面情報：お年神さま 障子は神棚のもの これの木にミダマを供える 黒沢尻町上川岸



昭和25年[1950]

■和賀郡飯豊村 S家の徳利（昭和25年1月23日／現北上市）

他に写真がなく訪問目的はわからないが、この徳利の写真のみが残る。

関連資料：森口coll. フィルムなし



119 裏面情報：五升入の徳利(白釉) 和賀郡飯豊村 S家 25-1-23

■胆沢郡相去村山根 T家のカマガミ ※郡司直衛氏撮影

(昭和25年2月20日／現北上市)

この家のカマガミは『民俗の四季』105話「かまがみ」、「かまがみ隠退」(『民芸手帖』38-3、※『論集 民俗篇』再録)で紹介している。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



向って左) 120 裏面情報：カマガミサン 相去村山根 T家 ヨメゴカクシ柱に縄をまき、カマドを築いた余りの土を塗って作る。その家で使っていた若い者が作った由 25-2-20
向かって右) 121 裏面情報：カマガミサン 相去村山根 T家 タテ40センチ、ヨコ35センチ、目はイシガタ貝。ときせつには何か上げる。線香も立てる。25-2-20

■和賀郡二子村鳥喰 N家の正月行事 ※郡司直衛氏撮影

(昭和25年2月22日[旧1月6日]／現北上市)

前年に続き鳥喰のN家を訪ね、一本門松などを記録している。N家のみだまは『日本の民俗 岩手』p. 233で紹介される。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



向かって左) 122 裏面情報：一本門松 二子鳥喰 25-2-22 旧1-6

向って右) 123 裏面情報：みだま 和賀郡二子村鳥喰 N家 歳徳神の掛軸は彩色版画で「明治廿五年宇治山田町高田巳之助」刊行のもの 25-2-22 旧正月六日



■胆沢郡金ヶ崎町 民家（昭和25年2月25日[旧1月9日]／現金ヶ崎町）

他に写真がなく金ヶ崎へ出向いた目的はわからない。

関連資料：森口coll. フィルムなし



124 裏面情報：正月の餅をツトに入れて乾す 胆沢郡金ヶ崎町 25-2-25 餅でなくみだまかもしれない

■胆沢郡相去村上家の小正月行事 ※郡司直衛氏撮影（昭和25年3月2日[旧1月14日]／現北上市）

昨年は旧正月15日に訪れているが、この年は前日の小正月行事の準備段階に立ち会っている。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



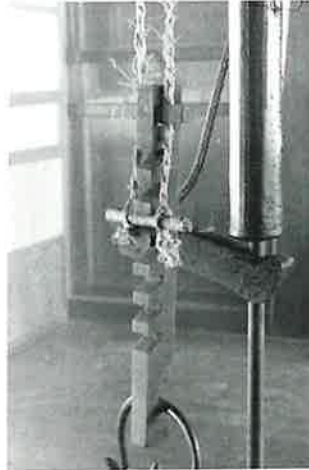
向って左) 125 裏面情報：粟穂木と烏追棒 胆沢郡相去村上家 粟穂木の根元に小正月屋根葺材料(笹、芽柳)がさしてある。十四日午前中にさしておき、屋から軒にさす。25-3-2 旧正月14日
向って右) 126 裏面情報：小正月餅花(旧正月十四日にここでは作る)相去村上家 アワボ又は八重穂(水木に大型の粟餅四つをつけ、ほかに枝のマタの所に□形に餅をのせる。これをタバツラと呼ぶ。稲のタバのツラネの意か)上につるしたツト 長い方、弓矢の餅(切餅九キレをツトに入れる。二月の卯の日に食べる)短い方、馬の餅(切餅十二キレをツトに入れる。馬に喰はせると称して月に一つづつ食べる。他家では二月の午の日に食べる)八重穂の陰にあるもの、イナボ 25-3-2 旧正月14日



向って左) 127 裏面情報：小正月 餅花の用意 胆沢郡相去村上家 鼠の形に作れる餅二つ見ゆ、これは小正月にキスネビツに入れる。25-3-2 旧正月14日
向って右) 128 裏面情報：小正月屋根葺 相去村上家 笹と芽(メモコ)柳(写真には去年の五月節句の菖蒲も垂れている)この二種を十四日午前中に粟穂木の下に地上にさしておき、お屋から屋根にさす。朝から垂れているのはツトに入れたミダマ。

■和賀郡岩崎村煤孫 小正月行事 ※郡司直衛氏撮影（昭和25年3月3日[旧1月15日]／現北上市）

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



向って左) 129 裏面情報：小正月の餅花 和賀郡岩崎村煤孫 K家 男の子の持つもの ヤエボ(ワラ八本に餅五つ宛つけ 上に笠)左手のものは紅餅 主婦の持つもの ゼニ(大は白、小は紅) 25-3-3 旧正月15日
中央) 130 裏面情報なし。『民俗の四季』76話「音声の力」に、「昭和二十五年の旧正月に、岩崎村煤孫で偶然に一少年が雪の上に出て吹き鳴らしているのを見つけてカメラにおさめることができた」とある。
向って右) 131 裏面情報：古風のカギ現用のカギと呼ぶのに対し、これを自在鍵と呼ぶ 木製 長1尺4寸4分 岩崎村煤孫 K家 25-3-3



132 裏面情報：野菜作り 下に田植 立てた棒と立木との間に年縄を張る。下に田植。
 煤孫 25- 旧1-15
 133 裏面情報：和賀町煤孫 肥出しの左右両端に大き目の松飾りの松を立てる 25-3-3 旧1-15

■稗貫郡内川目村の小正月行事 ※郡司直衛氏撮影（昭和25年3月4-5日[旧1月16-17日]／現花巻市）

『森口多里と郡司直衛』p.65によれば、この年「旧正月十六日、内川目中学校で「岳」と「大償」の神楽の戦後はじめてという公演」があり、郡司氏は森口とともに取材に出かけたという（写真あり）。4日は大償神楽の庭元宅にて夜中2時まで神楽を鑑賞し、翌5日は「一軒一軒のもち花をみて廻りました。…もち花の饗宴に酔いながら、岳部落から内川目、そして大迫へと一日じゅう白い大地を歩きまわりました。…最後に見た大迫のM家の餅花。それは瑞麗優雅な物でした」とある。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



134 裏面情報：曲家の外ニワのタテギ 内川目金沢 SS家 25-3-5 旧1-17



135 裏面情報：タテ木 棒の元を薪(もとはマツキ)で囲み松を立てる。他の笹や芽柳は小正月に付け加へたもの。前庭に門松の代にこれ一つ装置す。旧十二月廿七日頃立て、二月九日に倒す 稗貫郡内川目村金沢 SS家 25-3-4 旧正月十六日



136 裏面情報：タテ木 稗貫郡内川目金沢 SM家 この家では門松とも呼ぶ 結び目のある所が前(正面)の 竹は小正月に付け加へたもの 25-3-5 旧正月十七日



向って左) 137 裏面情報なし 『民俗の四季』81話「もちばな」に「大償のハセ」とある。SN家の事例とある。

向って右) 138 裏面情報：小正月の餅を入れた櫃 長径2尺三分 短径1尺4寸 高8寸 稗貫郡内川目村大償 SN家 25-3-5



139 裏面情報：小正月餅花 稗貫郡内川目村字金沢(カネザワ)ダンゴサシと呼んでいる。茶の間に装置 マユダマ(水木にダンゴ)(マユダンゴと呼んでいる)アハボ(竹に餅と幣)(ワラ五本づつ一対にして下げる)下部に俵 25-3-4 旧正月十六日



140 裏面情報：小正月餅花 稗貫郡内川目村字金沢 S家 ツトに切餅(ほんとうは丸く作った餅)を入れ、松と共に鴨居の上に飾る。松の枝につるした丸いのは、白紙に餅を包んだものと穴あき錢の一つつけたサシ二本 25-3-5 旧正月十七日



141 裏面情報なし。『民俗の四季』71話「あらたま」に「重ね餅の上においた三階松 大迫町内川目」、本文に金沢のS家とある。



142 裏面情報：コマヤの粟穂 稗貫郡内川目村大償 SN家 25-3-5 旧正月十七日



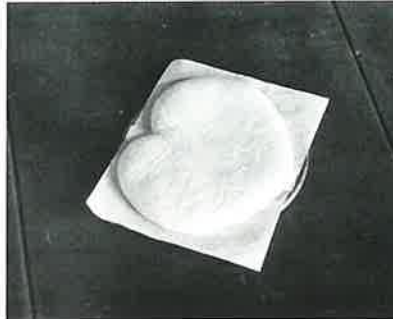
143 裏面情報：内川目金沢 S家 25-旧1-17



144 裏面情報：コマヤのマユ玉と粟穂 稗貫郡内川目村字金沢 水木につけたのをマユダンゴと呼んでいる 25-3-4 旧正月十六日



145 裏面情報：お年神様への供物 常居は一隅 稗貫郡内川目村金沢 SM家 25-3-5 後列左、ハシギで作った箸五把 カラガ(サンショウの皮)三把 右 セツノオボコ←鼠の餅と呼び鼠にあげた。前列左より若水 お供餅 米(若水をくむとき、この米を持って行って少しあげてから汲む) 机の前に餅 カラガは味噌を作るときオケの底に敷く かくすれば味噌くさらぬといふ。SM家 25-3-5 旧正月十七日



148 裏面情報：小正月にオガノ神にあげると称してこの心臓の餅を米櫃の中に入れる 稗貫郡大迫町 M家 25-3-4 旧正月十六日

146-147 いずれも裏面情報なし。向って左と中央は『民俗の四季』81話「もちばな」に「M家の餅花 大迫町大迫」とある。

■水沢町内にて（昭和25年3月9-10日[旧1月19-20日]／現奥州市）

9日は水沢愛郷の日のイベントで福原神楽と南都田剣舞（いずれも写真あり）。剣舞については詳細な情報なし、奥州市胆沢区 南下幅念仏剣舞保存会長 高橋孝氏によれば新里剣舞でないかとのこと。その翌日に撮影した写真である。
関連資料：森口coll. フィルムなし



149 裏面情報：ホケア(朱塗)胆沢水沢町 火防祭囃屋台の人々の午食の握飯をこれにて運ぶ 袋町囃屋台休憩の場所で 25-3-10 旧正月廿日

■和賀郡立花村のこと八日 ※郡司直衛氏撮影（昭和25年3月26日[旧2月8日]／現北上市）

『民俗の四季』89話「旧二月八日」に「南ニワの駒よけの笠木の端に初通しをかけていた。Oさんは南画家なので、二月八日に立てる正式のものを作ってみせてくださった。半紙を二枚に折り、墨筆をふるってそのひとつの面に「厄病除」と書き…」とある。
関連資料：森口coll. フィルムなし
※郡司直衛氏蔵カ



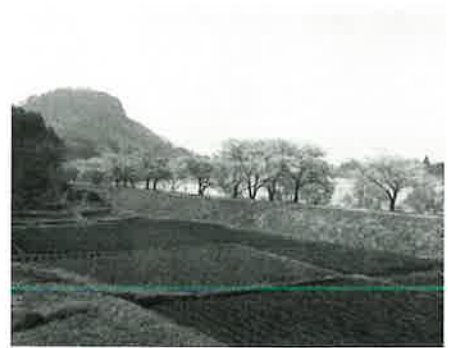
150-151 ともに裏面情報：旧二月八日 駒よけにモミ通しをかける 和賀郡立花村黒岩 O家 25-3-26(旧二月八日)

■陣ヶ岡と畳山からの眺望 ※郡司直衛氏撮影（昭和25年4月23日／北上市）

北上市の展勝地の眺望。左の女兒は郡司直衛氏の妹。フクレングサ(黒沢尻ではフクログサ)を吹いてフクラませている姿を撮影。手に持つのはフクレングサの茎。
関連資料：森口coll. フィルム一部(153, 154)あり (4.5×6E/加) ※ほかは郡司直衛氏蔵カ



153 裏面情報：畳山の裏側より見る 25-4-23 朝



154 裏面情報：陣ヶ岡の下より見る 25-4-23 朝

左) 152 裏面情報：黒沢尻町 25-4-23

■黒沢尻町 オキナグサ ※郡司直衛氏撮影
(昭和25年5月11日/現北上市)

『民俗の四季』11話「カッコバナとザンギリカブ」にて取り上げている。

関連資料：森口coll.、フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



155 裏面情報：ザンギリカブ(黒沢尻でザンギリコ)の花 花後の毛で「髪コ結ッテケル」(桃割とお下げ)此毛一本ぼつんとそとへ出ればシラミ出たなどと言う 黒沢尻町 25-5-11

■和賀郡立花村 クロヌリ ※郡司直衛氏撮影
(昭和25年6月9日/現北上市)

この日、黒岩(現北上市)の白山神社や八幡神社の宝物を撮影している。撮影年の情報はないが、郡司氏によればその折りに見かけた老人という。『民俗の四季』1話「腰ミノの話」に「昭和二十五年に、後に北上市に編入された立花村で、そのころすでに人々から忘れさられていた腰ミノをつけてクロヌリをしている老人を見かけたのである。」とある。

関連資料：森口coll.、フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



156 裏面情報なし

■軽米町 絵馬など(昭和25年7月23日/現軽米町)

翌年夏の第6回岩手郷土芸能祭に軽米町晴山のえんぶりを招待していることから、その事前調査を目的として訪ねたと考えられる。このときに立ち寄った徳楽寺で目にしたタコ絵馬に強い関心があったことが著作より解される。『民俗の四季』107話「タコの絵馬」や「小絵馬雑記」(『民間伝承』35-5 ※『論集 民俗篇』)に詳しい。徳楽寺では現在も萩薬師への信仰の証であるタコ絵馬を大切に管理している。高砂たんすは、その後町立歴史民俗資料館へ寄贈された。

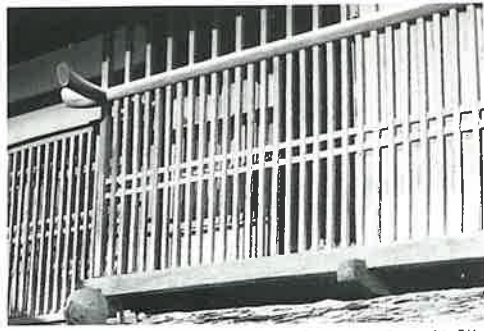
関連資料：森口coll.、ノートNo.215 フィルム一部(157, 158, 159)あり



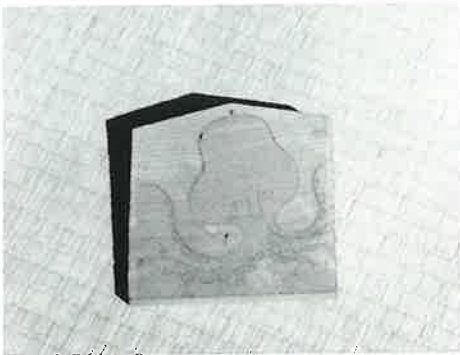
157 裏面情報：軽米町 民家 戸袋 廻屋は土製、麻の葉は木製 25-7-23



向って左) 158 裏面情報：軽米町山田のシシ踊(女ジシ) 於八幡神社境内 カシラ カシラの顎下についている綱の部分が踊子の顔を蔽ひ、その下に色染のキレが◇形に垂れる。
向って右) 159 裏面情報：軽米町山田のシシ踊 八幡神社にて カシラ 木製 紙を貼って黒く塗る。鼻、齒は金紙。眼は銀と金(金は瞳)。鼻の上の髻は刻んだ白紙。眉は刻んだ金紙。頭髪は刻んだ白紙。タテガミは麻。角は黒と金。25-7-23



160-161-162 三枚とも裏面情報なし。『民俗の四季』61話「格子の美」に軽米町の宿屋とあり、「ことしの夏(※昭和37年)何年ぶりがかで行って見たら、すっかり改造されていて…」と書いてあるため、この年の撮影と推測した。



163 裏面情報：軽米町 薬師堂の絵馬 蛸を描いた絵馬幾つかある。寺の住職もその理由を知らず タテ4寸2分 ヨコ4寸1分 墨で線描し朱で彩る 25-7-23



164 裏面情報なし



165 裏面情報なし。『民俗の四季』73話「たかさごたんす」で、「写したのは昭和二十五年の夏であったが、その年軽米町のT旅館のおばあさんは74歳であった。この長寿のおばあさんが二十二、三のときというから、明治三十一、二年であったろう。当時若嫁であったおばあさんの旦那さんが金具を八戸で十五円で買ってきたのをみて家の人々はたいへん高価なものだと思ったそうである。箱は軽米でつくり、代金は二十二円ぐらいだったとおばあさんはいついた。」とある。

■江刺郡玉里村和田 藁馬（昭和25年 7月30日[旧6月16日]／現奥州市）

この日は江刺の梁川小学校で開催された芸能公演で長京神楽などを鑑賞している。その途中で見かけたのか。「旧六月十五日の藁馬」（『民間伝承』36-12※『論集 民俗篇』再録）に詳しい。

関連資料：森口coll. フィルムなし

166 裏面情報：旧六月十五日の藁馬 前夜の雨で馬は地上に倒れている。手綱は庭のスグリにつなぐ。手綱は柳の皮。乗馬の背にはネコ柳の枝で作った弓と草の葉で作った矢をつける。藁馬には葛の葉と葉つきの柳の枝とイト(ナマ麻)とをつける。江刺郡玉里村和田 SU家 25-7-30 旧六月十六日



■水沢町 お盆の風景（昭和25年 8月13日／奥州市）

『民俗の四季』30話「盆のともしび」に「盆花売り 水沢町大町」と掲出される写真。大町は森口の生家があった町域である。

お盆の後は、9月2日に煤孫の田植踊（写真あり）、10月3日に中尊寺大長寿院のカマガミ（写真あり）、12月16-17日に広瀬村の中学校にて人形芝居常楽座（写真あり）を鑑賞している。

関連資料：森口coll. フィルムなし

167 裏面情報：盆花(桔梗、コガネバナ)を売りに歩く 水沢町 岩井屋にて 25-8-13



昭和26年[1951]

当該年度は岩手県立美術工芸学校の組織改編があり本業に追われたのであろうか、24～25年度に比してフィールドワー

クが極端に少ない。

■稗貫郡新堀村 小正月行事（昭和26年2月21日[旧1月16日]／現花巻市）

『日本の民俗 岩手』p.245に掲載される写真。「小正月のお作立て これをこの地では「夕顔をつくる」といっている（石鳥谷町新堀）」とある。

関連資料：森口coll.、フィルム一部なし



向って左) 168 裏面情報:夕顔をつくる 新堀 26 旧1-16

向って右) 169 裏面情報:オサクダテ 小正月 行事 稗貫郡新堀村 石鳥谷町東部 26-2-21 旧正月十六日

■和賀郡谷内村 咒物 ※郡司直衛氏撮影（昭和26年4月15日／現花巻市）

前日14日は谷内村にて倉沢人形芝居の調査を行っており（写真あり）、その翌日に撮影した写真である。『民俗の四季』89話「旧二月八日」に詳しい。

なお、このときに採集したまじないの紙（顔と一枚札）はスクラップブックに貼付している。

関連資料：森口coll.、フィルム一部なし ※郡司直衛氏蔵カ



170 裏面情報:二月八日の咒物 和賀郡谷内村倉沢 農家屋敷の入口 表面 顔 裏面 昭和二十六年旧二月八日 一、当春疫病退散祭之事 以上一枚の紙に墨書 竹の先にはさみ、顔を書いた面は表に 文字墨書の面は裏になる 26-4-15



■江刺郡伊手村 民家（昭和26年11月4日／現奥州市）

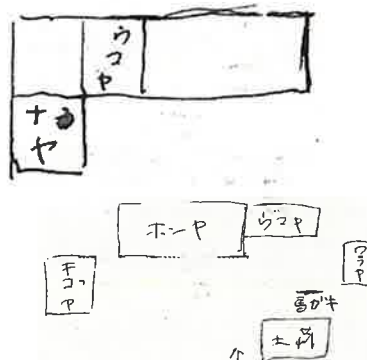
26年は岩手郷土芸能祭を年2回開催しており、いずれの回（初回は7月17-18日に釜石市にて尾崎神社夏祭り協賛行事として、2回目は8月19日に県公会堂にて実施）にも立ち会っている（写真あり）。

そして、8月31日は昭和25年に36年ぶりで復活したという江釣子村の台笠（写真あり）、10月19日は同江釣子村の春田打の調査に出かけている。また、11月15日は口内村万蔵寺の仏像調査、11月9日は江刺郡振興祭（写真あり）に出かけている。

関連資料：森口coll.、フィルムなし



171 裏面情報:曲家風の農家 江刺郡伊手村新谷 S家 26-11-4



172 裏面情報:ワラゴヤ 左手のは厩 右手には馬垣 江刺郡伊手村久田 C家

■和賀郡江釣子村 民家（昭和26年11月21日／現北上市）

訪問目的は不明。春田打の調査であろうか。

関連資料：森口coll.、フィルムなし



向って左) 173 裏面情報:カンテラを入れるアンドン 蓋を失い、代りに張った紙の部だけ残る 高9寸5分 和賀郡江釣子村 I家 26-11-21 向って右) 174 裏面情報:ジザイカギとスマコノカギ 和賀郡江釣子村 I家 26-11-21

昭和27年[1952]

この年の7月、森口は県の文化財専門委員に委嘱され、以来51年4月まで務めた。

■江刺郡稲瀬村 正月行事 ※郡司直衛氏撮影（昭和27年2月4日／現奥州市江刺区）

撮影日は不明だが同年2月に稲瀬で臼の年取りなどを撮影した司東真雄氏(岩手県文化財専門委員などを歴任)からの提供写真があり(著作権の問題により未掲出)、共に歩いた可能性が高い。なお、昭和27年以降の江刺郡域の写真は、司東氏から提供されたものが多い。

関連資料：森口coll. フィルム一部(176, 177)あり ※ほかは郡司直衛氏蔵カ



向って左) 175 裏面情報:歳飾り 臼の上のお供えをイタダキとよぶ。イタダキのほかにおボコモチニケ乗せる 稲瀬照沢** O家 柱はウシバシラ 桶はアタタメオケ(灰溜桶) 27-2-4

中央) 176 裏面情報:門松 戸口の方からみる 江刺郡稲瀬村照沢** O家

向って右) 177 裏面情報:ミダマに入れたツト 戸外で寒気にさらす 江刺郡稲瀬村照沢** O家 27-2-4

■立花村 小正月行事 ※郡司直衛氏撮影（昭和27年2月10日カ[旧1月15日]／現北上市）

日中は立花村、夜は飯豊村の小正月行事を撮影している。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ

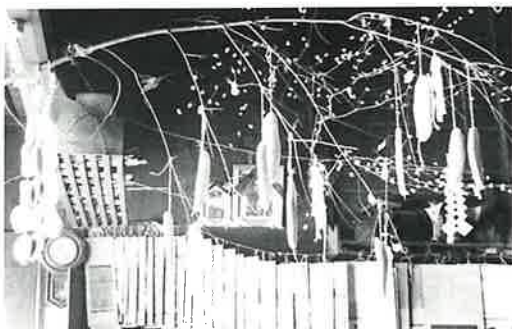


向って左) 178 裏面情報:オガノカミサマ オガノカミサマ(鼠の形に作った餅)をキスネビツの上に置いたところ (キスネビツの中に入れてあるのを写真をとるため持ち蓋の上におく) 板壁には貯金箱 その下にカンテラ用のアンドン 黒沢尻町立花 27-101-15

向って右) 179 北上市立花 オガノカミサマ 鼠の形に作った餅。オガノカミサマとよぶ。小正月にキスネビツの中に入れる

向って左) 180 裏面情報:正月、臼の餅 小正月にはこの飾りや若水用の桶を取去って、オボコ餅を供へる。写真は、正月のものをそのままにしておいて(撮影者のために)、小正月のオボコ餅を供へたのである。 黒沢尻町立花 27-101-15

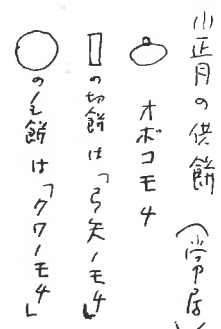
向って右) 181 裏面情報:小正月のウマノモチ 写真餅花のある常居から台所に出る出口の上部に吊す 黒沢尻町立花 27-101-14



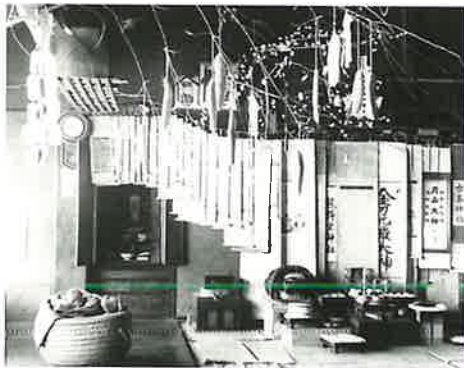
182 裏面情報:小正月餅花 細かなのはハナ(水木を用ゆ)細長い餅はアワボ(本来は粟餅と米ノ餅とを吊すのだが この年は米の餅だけ。穴あき銭をも吊す)(木は栗の木)左端の餅はゼニ 黒沢尻町立花 常居に飾る 27-101-15



183 裏面情報:小正月の供餅(常居) オボコモチ 口の切餅は「弓矢ノモチ」 ○のノシ餅は「クワノモチ」



小正月の供餅 (常居)
○のノシ餅は「クワノモチ」
口の切餅は「弓矢ノモチ」
オボコモチ



向って左) 184 裏面情報: 小正月餅花
27-旧1-15 十五日の室内 黒沢尻町立
花村

向って右) 185 裏面情報: 小正月行事
アラグロスリ 旧正月十五日夜(本来は
夕方)先歌の者 ホッ貝(木製)を吹く
二番の者 歌う 三番の者 豆カヲを撒
く そのあとに家族が従ひ屋敷を一回
まわる 和賀郡飯豊村藤巻 S家 27-
旧1-15

■立花村 こと八日 ※郡司直衛氏撮影(昭和27年3月3日[旧2月8日]/現北上市)

『民俗の四季』89話「旧二月八日」に紹介される藁人形。「昭和二十七年を限りとして以後は作られない」とある。この後しばらく写真はなく、次は4月27日に和賀郡江釣子村の新渡戸寺で撮影した仏像写真がある。

関連資料: 森口coll.、フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



186-187-188 裏面情報: 黒沢尻町立花沢野A家 旧二月八日の藁人形27-3-3 このA家のK老は手細工の器用な人なり。他家にてはこのやうな人形を今では作ることなし。27-3-3(旧二月八日)

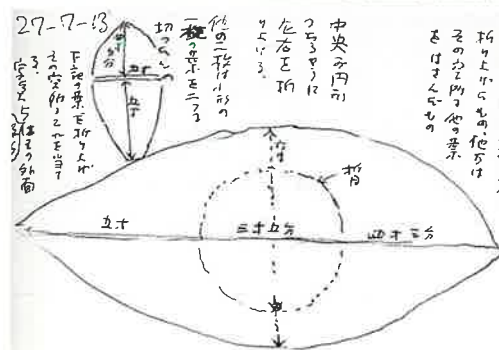
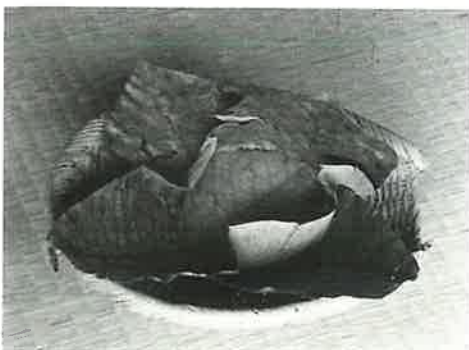
■福岡村からの贈答品の包装 ※郡司直衛氏撮影(昭和27年7月13日?/現北上市)

『自然材の包装』(『民芸手帖』43-11※『論集 民俗篇』再録)に、「昭和二十七年の三月のある日、家に帰ってみるとケアバで茶筒形に包んで藁で結わえたものが置いてあった。直径三寸五分(一〇.五センチ)の円筒のなか身は思いがけない白いせんべいであった。…いま北上市に編入されている福岡村の人が持ってきたのだそうだ」とある。「いわての郷土の菓子」(『論集 民俗篇』)や『日本の民俗 岩手』でも取り上げている。後者には「産婦見舞いの白せんべい 朴の葉と藁とで包装されていた」とある。なお、写真裏面は7月13日とあるが、著作物には3月と書かれている。

関連資料: 森口coll.、フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



189-190-191-192 裏面情報: 写真6の一方は一枚の葉を折り上げたもの、他方はその空所に他の葉をはさんだもの。中央が円形になるように左右を折り上げる。他の二枚は小形の一枚の葉を二つに切ったもの。下記の葉を折り上げその空所にこれを当てる。写真5はその外面



■夏油温泉の石油ランプ ※郡司直衛氏撮影（昭和27年7月20日／現北上市）

森口は同行していない。夏油温泉自炊部の貸出用ランプを撮影したもの。
7月17日に石巻市内でサフランの看板、9月18日に沢内村新町でおせり風景（後掲）
をおさめた写真も、郡司直衛氏の撮影である。
関連資料：森口coll.フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



193 裏面情報：石油ランプ 夏油温泉の宿にて 直衛君写 27-7-20

■ミョウガノコ(花茎)の包装

(昭和27年8月5日／盛岡市カ)

撮影場所は盛岡市内か。見開いた状態は「自然材の包装」
に掲出される。

関連資料：森口coll.フィルムなし



194 裏面情報：朴の葉にメヨウガを包んでワラで結へて売りにくる 表面 27-8-5

■ミョウガの包装（昭和27年8月10日／盛岡市）

8月5日と被写体は同じか。
関連資料：森口coll.フィルムなし



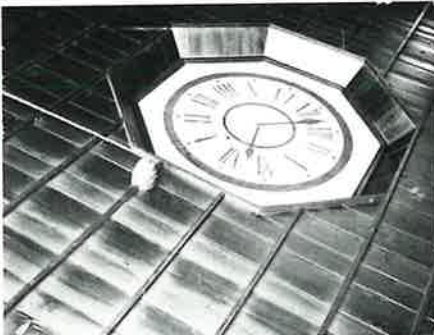
195 裏面情報：メヨウガを包んだ朴の葉 於盛岡市 かたわらのものは盆祭用のコモ 27-8-10

■水沢町 天井の八角時計 ※郡司直衛氏撮影

(昭和27年8月15日／現奥州市水沢区)

「天井の八角時計」(『民芸手帖』37-5 ※『論集 民俗篇』再録)でとりあげている。

関連資料：森口coll.フィルムNo.6 (4.5×6mm/コマ)



196 裏面情報：茶ノ間の天井に作りつけられた時計装飾 白く塗り、ガワと文字は黒く塗る 安政年間 水沢町吉小路1店 27-8-15

■和賀郡沢内村新町 おせり ※郡司直衛氏撮影

(昭和27年9月18日／現西和賀町)

郡司氏は家業の関係でオート三輪に瀬戸物を積んで沢内へ行き、おせりで販売していたという。

関連資料：森口coll.フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



197 裏面情報：おせり 和賀郡沢内村新町 郡司直衛君写 27-9-18

■和野のセリはなし ※郡司直衛氏撮影（昭和27年9月10日／現北上市）

『民俗の四季』40話「せりはなし」に用いられた写真。向って右は同じ頃の冬に撮影したものか。
関連資料：森口coll.フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ

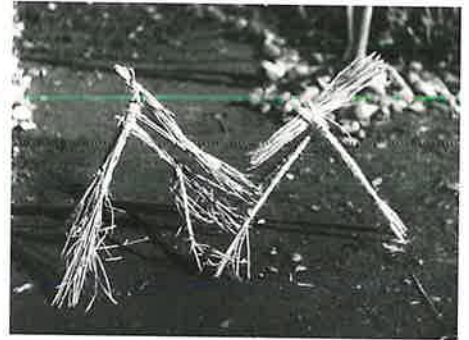


198-199 裏面情報なし

■遠野町内、土淵村ほか 民具調査（昭和27年10月10-11日／現遠野市）

晩夏から秋にかけては8月28日に第7回岩手郷土芸能祭（県公会堂、写真あり）、11月5日に九戸郡郷土芸能祭（久慈、写真あり）、11月11～12日に第4回江刺郡振興祭（岩谷堂・岩手県郷土芸能祭を兼ねる、写真あり）を見学している。10月は目的不明だが2日間遠野に滞在、常堅寺の祖師像の撮影などを行っている。このとき撮影したナラスキモタツの梱包写真は、「自然材の包装」（『民芸手帖』43 11※『論集 民俗篇』再録）に掲載される。

関連資料：森口coll. フィルム一部(205, 209～212, 214, 215)あり



向って右) 200 裏面情報：ウマコツナギ(旧六月十五日)の薬馬 上閉伊郡土淵村 A老人作 昭和廿七年十月十一日貰ふ 27-11-30

中央) 201 裏面情報：ツトにナラスキモタツを入れ、膳に乗せて店に出してある。ツト一本十五円 遠野市新町 27-10-10

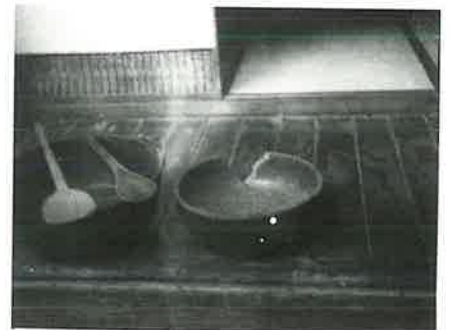
向って左) 202 裏面情報：手燭 高(足共)6寸4分 遠野町新町 M家 27-10



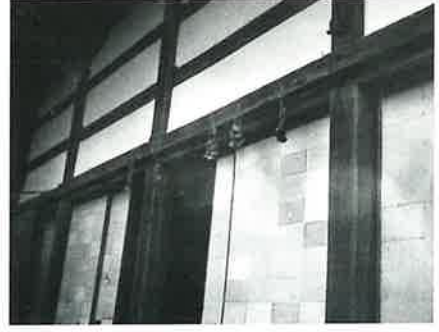
203-204-205-206 裏面情報なし。この時の撮影か。向って右は、『日本の民俗 岩手』p. 206に「乳神様に上げた小枕 小祠の内から取り出して写す。小枕は赤や白のきれの姿に糠を詰めたもので乳房をかたどったものであろう(遠野市土淵)」とある。また、左側は『日本の民俗 岩手』p. 26に「キゴザ ヨグサ(いぐさ)で編む(遠野市土淵)」、次のケラもp. 28に「マダカワのケラ(遠野市土淵)」と紹介されている。



207-208-209 裏面情報なし。この時の撮影か。中央の風景は、『日本の民俗 岩手』p. 71に「ヒエシマ(稗ボツ)(遠野地方)」と掲載される。



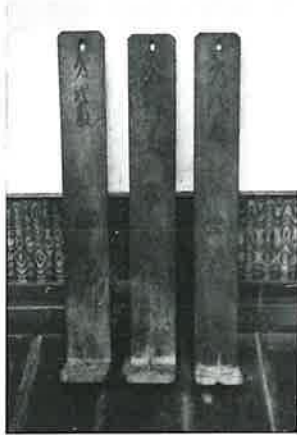
210-211-212 裏面情報なし。この時の撮影か。向って左は小型の引き出し、中央は燗台、向って右は練り鉢と木杓子・木籠か。



213-214-215 裏面情報なし。この時の撮影か。向って左は木摺臼と胴臼、中央は鉄鍋、右は不明。



216-217-218-219 いずれも裏面情報なし。この時の撮影か。下段向って右は壁に掛ける燭台。部屋の番号らしき墨書がある。その他は、『民俗の四季』61話「格子の美」に、「表通りに面して美しい格子をたてている家は、思いがけない村街道で見いだすことがある。…そういう家は上閉伊郡宮守村には二軒もある。…しかし、わたしの見たのは昭和二十六年であつたから今もそのままになっているかわからない。」と書かれる家の写真か。いずれの家も2階に格子戸が見える。



■和賀郡立花村沢野 こと八日 ※郡司直衛氏撮影（昭和27年12月6日／現北上市）

3月3日(旧2月8日)に薬人形を撮影したA家を再び訪ねている。

関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ

向って左) 220 裏面情報：十一月八日のオマジナイ タケの頭にニンニクをさす 下に倒れているワラ人形は二月八日のもの 黒沢尻町立花、沢野 A家 27-旧11-8(新12-6)
向って右) 221 裏面情報：十一月八日のオマジナイ 左方に立つ杭につきすアツキダンゴにワラを通してつないで吊す 黒沢尻町立花、沢野 A家 27-旧11-8(新12-6)



昭和28年[1953]

森口は、60歳を迎えたこの年の4月から昭和31年3月までの3年間岩手大学学芸学部の非常勤講師を務め、その後教授に就任した。教授の職はわずか2年で退官するが、その後も昭和56年まで非常勤講師として教壇に立ち続け、後進の教育に尽力した。

■二戸郡爾薩体村 民具調査（昭和28年1月29日-31日／現二戸市）

森口は日本民族学協会（宮本馨太郎理事）の昭和37年度総合研究「日本在来民具の民族学的研究」に参加し、調査地のひとつとして尻子内を訪ねている。その約10年前のこの年も民具を中心とする調査に入ったことが、現存する写真や当時の毎日新聞記事(S28.2.3付)に記述される。当時の新聞記事「県北は民俗史料の宝庫 貴重な『自在鉤』『唐うす』盛岡短大森口氏が爾薩体村へ」には、

「柳田国男氏主宰の“民俗学研究所”と連絡今後さらに伝説、年中行事も調査し昔の歴史を明らかにしたいといっている」と書かれている。同研究所は、昭和30年に『日本民俗図録』を発行しており、その中に写真提供者として森口の名がみえる。文書等は残っていないが、何らかの形で依頼があったと推測できる。

なお、この時の写真は毎日新聞社通信部記者から提供を受けたものも含まれ、該当する紙焼きの裏面に撮影者名が記されている（※著作権の都合上、未掲載とする）。

関連資料：フィルムなし



向って左) 222 裏面情報：二戸郡爾薩体村尻子内 T家「座敷」と呼ばれる室の爐とカギ 爐の手前左端にコニョバ 爐辺にあるのは竹細丁の材料 28-1-29

中央) 223 裏面情報：二戸郡爾薩体村尻子内 T家「座敷」と呼ばれる室 正面の板戸は物置への入口 28-1-29

向って右) 224 裏面情報：二戸郡爾薩体村尻子内 T家「座敷」と呼ばれてある室の爐のカギ 28-1-29



225 裏面情報：二戸郡爾薩体村尻子内 T家「座敷」と呼ばれてある室の爐と老婆 28-1-29



226 裏面情報：二戸郡爾薩体村尻子内 T家 火櫓 28-1-29



227 裏面情報：二戸郡爾薩体村尻子内 T家「座敷」と呼ばれてある室 28-1-31



向って左) 228 裏面情報：二戸郡爾薩体村尻子内 T家「座敷」と呼ばれる室の爐とカギ カギにかかってある丸釜はフタを失ってあるが実によい形のものである 28-1-31

向って右) 229 裏面情報：二戸郡爾薩体村尻子内 T家 柏の葉 南面の壁につるしてある 物を包むのに用いる由 二戸郡で柏をカシラギと呼ぶ 28-1-31



向って左)230 裏面情報なし。自宅で撮影カ。「編笠・榊箕・はばき・花ござ」(『民芸手帖』35-2)に、「昭和28年に二戸市福岡の荒物屋で四十円で買ったケアバミ(榊箕)はいまはもうどこにもない。…リーチ氏にこれを見せたら「立派だ」と感心しておられた」とある。※リーチ氏とはバーナード・リーチのこと。

向って右)231 裏面情報なし。『民俗の四季』68話「こしき」に「福岡町の冬の九日市にソリにのせられたまま…昭和二十八年に一個二百五十円であった」と記載される。

■稗貫郡内川目村 正月行事 ※郡司直衛氏撮影（昭和28年2月14日／現花巻市）

昭和25年の3月（小正月）に早池峰神楽鑑賞のため内川目村を訪ね、ついでに個人宅のオタテギなどを見学している。今回も同じ集落・家を訪ね写真におさめている。

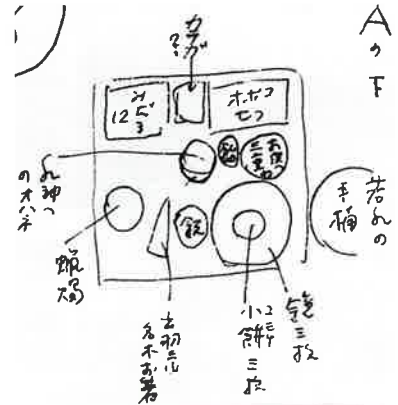
関連資料：森口coll. フィルムなし ※郡司直衛氏蔵カ



232 裏面情報：タテギ 東から見る 内川目 金沢 SS家 28 旧1-1



233 裏面情報：お歳神さまへの供物 稗貫郡内川目村金沢 SM家 常居 28-1-14 旧正月元日



234 裏面情報：稗貫郡内川目村大償 S家 常居 北側一間が一段高くなっている この部分を板畳と呼ぶ 低い板間には畳を敷くことがあるが板畳は常に板のまま。板畳の左端にヨメゴカクジバシラ その前に積み重ねてある畳は必要のとき、低い板間に敷く 28-2-15



235 裏面情報：タテギと門松とを共に立てている例 タテギはハセに立てかけている。タテギの薪は長さ3尺8寸程度 松と竹を立ててある 門松は松と竹とを杭につけている 稗貫郡内川目村大償 S家 28-2-15(旧正月二日)



236 裏面情報：タテギ 松と竹を立ててある 稗貫郡内川目村金沢 SS家 28-2-14 旧正月元日

■気仙郡吉浜村 旧正月行事（昭和28年2月28日- 3月1日／現大船渡市）

スネカについては『民俗の四季』2話「腰ミノの話」に、「わたしは三陸町の吉浜を小正月のスネカの調査のために二回訪ねた。その第一回目(昭和二十八年)に、スネカのベテランに特に昔どおりのものすごい扮装を復原してもらったが、これとは別に簡単に仮装した中学生のスネカも小正月に出た。翌日の朝この二人に宿にきてもらってスネカ姿の写真を撮った…」とある。また、79話「スネカ」に「写真は、若い時分にスネカをやったという人が、わたしのために特に昔どおりの形姿に仮装してくれたもので、いまはもう見られない」と記している。

なお、このときに撮影したスネカやミダマ等の写真を、同年春に民俗学研究所へ提供した旨の貸出控えが残っている。

関連資料：森口coll. フィルムなし

237 裏面情報なし



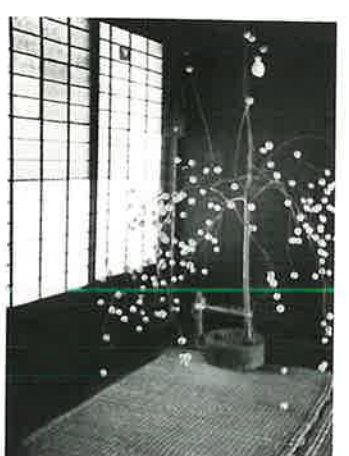
向って左) 238 裏面情報：スネカ 気仙郡吉浜村大野 K家大戸前で 28-2-28 旧正月十五日

※『日本民俗図録』提供写真

中央) 239 裏面情報：スネカ 依には女の子を逆さまに押し込めたつもりで赤いモモ引をはいた女の子の足が二本出ている 気仙郡吉浜村大野 KK家大戸前で 28-2-28 旧正月十五日

向って右) 240 裏面情報：吉浜大野 28 旧1-15

※238～240は前述の昔どおりの仮装



245 裏面情報なし。紙焼きアルバム付箋（記者者不明）に「吉浜のIK家 正月掛魚S30頃」とある。

上段向って左から

241 裏面情報：ナリギ 正月の門松は略されて小松を二本地にさしただけ。その間に小正月に杭を立て栗の木を結びつけ。この栗の木に年縶(正月屋内に飾ったもの)、胡瓜(クルミの木を筒形にしたもの)、花(クルミの木を削りかけにしたもの)、露型の南瓜をつるす。本来は門松の杭の一つに栗の木を結べるもの也。気仙郡吉浜村大野 KK家 28-2-28 旧正月十五日

242 裏面情報：小正月のナリギとヤネフキ 栗の木は苗取りの日(田植の前日)、爐にたき、お田の神さまに上げる小豆ご飯をたく。他のものはそのまま捨てる。ナリギは廿日まで立てておくヤネフキの材料は笹とコブノキ(ニワトコ) 28-2-28 旧正月十五日 気仙郡吉浜村大野 KK家

243 裏面情報：水木につけた団子 栗の木に大形の餅をつけたのは栗穂 水木をダンゴサシキとよぶ吉浜大野 KB家 28日1-15

244 裏面情報：ひき石の穴に水木を立てて団子をつけたもの 把手をヒキギと呼び水木とヒキギとを縄でつなく 気仙郡吉浜村大野 KB家 台所の東北隅 28日1-15

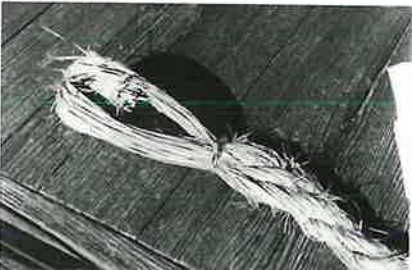
『民俗の四季』110話「気仙大工の技巧」に、「小正月の行事のスネカをしらべるために三陸村吉浜を初めて訪れたのは、昭和二十八年の旧正月の中旬であった。そのころ吉浜には宿屋がなかったので、見晴らしのよい丘の上のKFさんの家に泊めてもらって、夜は牛乳風呂のもてなしにあづかった。」とある。以下、そのKF家での記録写真を掲出する。

うち、ナマコヒキについては『民俗の四季』85話「ナマコヒキ」に詳しい。スネカの再調査で訪れた昭和33年3月(旧小正月)には、ヤラグロ→ナマコヒキ→ナリキゼメ→オオカミサマの餅という一連の小正月行事を記録におさめている(後掲)。



向って左) 246 裏面情報：台所の爐のゼンゼアカギ(自在鍵)と火棚 気仙郡吉浜村上野 KF家 28日旧正月十五日

向って右) 247 裏面情報：タテギ(タテギダテ)ワツツアキは旧十二月十五日に年男(若水もくむ)が山から切ってきて立てる。夕方、食事のとき、小豆餡にハットウを入れたものを小さな木皿にのせ、膳にのせ、これをタテギの上に乗せ、タテギのワツツアキを切ってきた男が拜む。残りの小豆ハットウはその晩家族が食べる。供えたものは翌朝までそのままにしておく。おろしたものは、女はたべない。タテギは春の嶽おろし(ヒエやアワを初めて蒔くとき)の時爐のタテギとし、それでたいたお飯を、嶽おろしに働く人々に食べさせる 気仙郡吉浜村上野 KF家 28-2-28 旧正月十五日



248 裏面情報：ナマコドノ 藁束の先を結び、それを裏返して頭部とす。中にナマコを入れる。図は頭部をひらいて、中のナマコを見たもの 気仙郡吉浜村上野 KF家 28 2 28 旧正月十五日



249 裏面情報：小正月のナマコヒキで引くもの 新しい藁でつくる「ナマコドノ」と呼ぶ 長さ約4尺4寸 引き終れば崖から投げる 人に拾はれないところに捨てることを意味する 気仙郡吉浜村上野 KF家 28-2-28 旧正月十五日



250 裏面情報：小正月のナマコヒキ(略式には紙にナマコと書いたものを引いて歩く)鳴へごと「ナマコドンのお通りだ。モンモラモツア ソゴさ行げ」気仙郡吉浜村上野 K家の前の麦畑 斜面(ヒラ)の右畑にて、大石多く露出している 28-2-28 旧正月十五日



251 裏面情報：ダンゴサン 水木に団子をつける 台所の長押にさしならべている 気仙郡吉浜村上野 KF家 ミズキをダンゴサシキと呼ぶ 28-2-28 旧正月十五日



252 裏面情報：センガイツクリ その下にサマコ(連子格子)気仙郡吉浜村上野 KF家南面 センガイハナの上を連ねてハナゲタ横たえ、その上に垂木が乗る。小天井を張る。センガイハナの下にガンギョウ。28-3-1



253 裏面情報なし。『民俗の四季』70話「みたま」に三陸町吉浜KF家の事例として掲出される。当家はミタマを3回供えるといい、その2回目に撮影したものであろう。※『日本民俗図録』提供写真。

沿岸南部滞在の最終日は大船渡市立根の小正月行事を見学している。



254 裏面情報：キンコ 正月十五日の晩方立てる アキの方から(日は不定)用材を切ってくる 栗の木を立てそれに花(クルミの木の皮の削りかけ)作物の実(クルミの木の皮をむき筒形にする。長さ1尺5寸程度)藁製のナリモノ 紙製■をつるすこれらを作るとき風呂に入り、女を近づけない。大船渡市立根町 K家

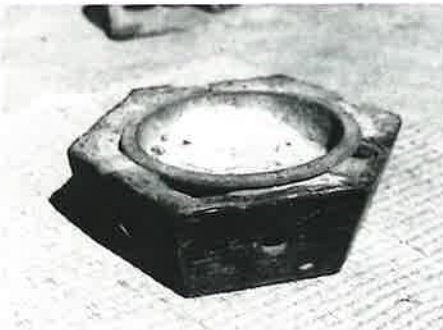


255 裏面情報：キンコ 作物の実(クルミの木の皮をむく)が、花は皮のついたまま、削りかけた部分の内側が白い肌をみせている 大船渡市立根町字中野 K家 28-3-1 旧正月十六日

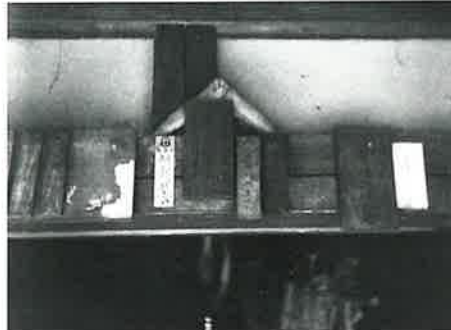
■立花村 民具 ※郡司直衛氏撮影(昭和28年3月22日/現北上市)

前年にこと八日の蕨人形などを取材したA家を再び訪ねている。旧暦の2月8日に該当する日であり、翌年の状況を確認するために訪ねたのであろう。爐端については『民俗の四季』104話「ひだな」に更に詳しい情報が書かれている。また、「岩手のうまや」(『民俗建築』35)ではA家の建造物全体を取り上げている。

関連資料：森口coll.、フィルムなし



256 裏面情報：マツ台(杉製) マツネをたくのに用いた。夕飯を食べるときこれを燈火とした。夕飯を食べるときマツネをたいたのである。六角形、一辺の長6寸5分、高4寸2分、六角面の稜角にブリキをはったあとがある。中に鑄物の鉢(径9寸1分)をはめてある 黒沢尻町立花 A家



257 裏面情報：魔除けのため入口の上にシビの尾をおく 黒沢尻町立花 A家 28-3-22



258 裏面情報：台所の爐と爐棚 黒沢尻町立花 A家 つられていたカゴにはタキツケのマツネッコがはいっている 黒沢尻町立花 A家 28-3-22

■岩手郡太田村上鹿妻 民家(昭和28年4月12日/現盛岡市)

来訪目的は不明。曲り家の民家を撮影している。『民俗の四季』26話「曲家のさまざま」に「右手にマヤのある曲家 盛岡市西郊」と紹介される。

関連資料：森口coll.、フィルムなし



259 裏面情報：曲家 岩手郡太田村上鹿妻 T家 28-4-12

■岩手郡御明神村 カギ（昭和28年4月16日／現雫石町）

来訪目的は不明。自在鉤を撮影、「炉の鉤」（『民俗手帖』37-2 ※『論集 民俗篇』再録）に、「鋳物の加わったジンゼアカギ 背面下部の切込みに横木を入れこれに鋳物の鎖と鉤をさげる 岩手郡雫石町」と掲載される。

関連資料：森口coll. フィルムなし



260 裏面情報：カギ 岩手郡御明神村下川原 S家 28-4-16

■盛岡市土洩 カギ（昭和28年5月3日／現盛岡市）

来訪目的は不明。

関連資料：森口coll. フィルムなし

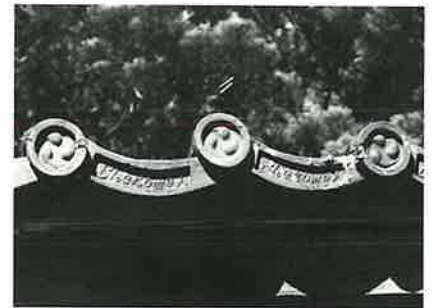


261 裏面情報：曲家 ジョイのカギの上部 盛岡市土洩字橋場 I家 28-5-3

■紫波郡赤石村 志賀理和気神社の瓦（昭和28年7月11日／現紫波町）

来訪目的は不明。

関連資料：森口coll. フィルムなし



262 裏面情報：紫波郡赤石村 志賀理和気神社社務所 明治前半期、英人のかんとくで製造した瓦 28-7-11

■田野畑村にて（昭和28年8月12-13日／現田野畑村）

昭和28年夏に撮影した写真は次のとおりである。8月12～13日：田野畑村、8月20日：盛岡市本宮の林崎さんさ踊り（写真あり）、8月30日：第8回岩手郷土芸能祭（於県公会堂）。その他、ノートの記録によれば8月28日に赤石村の志賀理和気神社で田植踊の調査をしている。田野畑村へは青木松太郎氏の案内で途中2泊しながら、菅ノ窪鹿踊を見に出かけている。この旅の思い出は『民俗の四季』33話「漁具のさまざま」・34話「ワカメを運ぶ女」・35話「芸能伝承の家」に詳しい。

関連資料：森口coll. フィルムなし



向って左) 263 裏面情報：下閉伊郡田野畑村北山 N家 廁 28-8-12
中央) 264 裏面情報：廁の棚にチュウギの束を乗せている 28-8-12
向って右) 265 裏面情報：廁のチュウギ N家 28-8-12



266 裏面情報：下閉伊郡田野畑村和野の路傍 向って右の石碑 牛馬童子 文政七年旧七月吉日 願主… 中央の石碑は倒れている 28-8-13



267 裏面情報なし ※『民俗の四季』に「つるされている漁具 田野畑海岸」と紹介される。おそらく昭和28年8月の撮影であろう。



268 裏面情報なし ※『民俗の四季』に「わかめを運ぶ女たち 田野畑海岸」と紹介される。おそらく昭和28年8月の撮影であろう。

■内川目村大償 膳椀（昭和28年10月2-3日／現花巻市）

昭和28年秋は10月25日に玉山の神楽（現盛岡市）、10月29日に二子の大乘神楽（写真あり）、10月31日に飯豊の成田神楽を鑑賞している。また、10月3～4日と11月12～13日に大償神楽の取材（写真あり）を行っている。写真の膳椀はその折りに撮影したもので、後に『民俗の四季』102話「箱ぜん」で紹介している。

関連資料：森口coll.、フィルムなし



向って左) 269 裏面情報：男膳 9寸8分四方 29.5センチ 高1寸 3センチ 縁幅3分 1センチ 足高1寸 2分 3.5センチ
平膳 1尺1分四方 30.3センチ 高7分 2センチ 縁幅5分 1.5センチ 28-10-3
杉製スバキ 土を塗って色をつけてからスバキ（柿渋をぬる）3つの塗物を重ねると縁が平らになる
裨貫郡内川目村大償
向って右) 270 裏面情報：男膳 足高1寸2分 裨貫郡内川目村大償 28-10-3

■上閉伊郡鱒沢村 鞍迫観音堂の小絵馬（昭和28年10月12日／現遠野市）

鞍迫観音堂の小絵馬と各地のマイリノホトケ等の仏画を撮影した写真があり、いずれも裏面に10月12日と書いてある。撮影対象の所蔵先が広範であり、実際に現地へ赴いたのではなく、どこかの会場に集めて実見した可能性が高い。

関連資料：森口coll.、フィルムなし



271 裏面情報：上閉伊郡鱒沢村鞍迫観音堂 高7寸 幅7寸5分 馬は黒 細部に白 手綱は朱 28-10-12 宮守村 小沢助次良 奉納御願円満 文字不明 元文辰元年九月廿九日

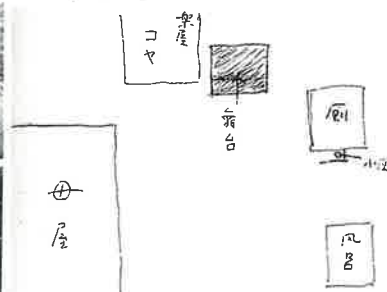
昭和29年[1954]

昭和29年は、2月11日[旧1.8]に庄ヶ畑田植踊（盛岡市上米内、写真あり）、2月20日に第1回紫波郡郷土芸能祭（日詰白梅館、写真あり）を鑑賞している。また、11月中旬に内川目村へ出向き、岳と大償の神楽を鑑賞、演目の詳細を記録している（写真あり）。この他、5月31日に小岩井農場、7月に夏油温泉で家族旅行らしき様子と風景を写した35mmカラーポジフィルムがある。この頃には長男・光彦氏がカメラマンを任されることもあったといい、35mmカラーポジフィルムの画像はすべて光彦氏が撮影したものである。

■盛岡市上米内 田植踊の舞台（昭和29年2月11日／現盛岡市）

庭元の外庭に設置した舞台上で上演した際の写真。

関連資料：森口coll.、ノートNo.217 フィルムアルバムNo.4（6×4.5E/カ0）



272 裏面情報：盛岡市上米内庄ヶ畑 K家で 田植踊 舞台 梯子は取去る 29-2-11



273 裏面情報：盛岡市上米内庄ヶ畑 田植踊 前口上 29-2-11

■鮭の寿司 ※郡司直衛氏撮影（昭和29年3月）



郡司家で毎年冬に作っていた鮭の寿司（鮭のほかに薄くスライスした大根や細かく切った生姜を入れる）を撮影したもの。

関連資料：森口coll.、フィルムアルバムNo.15（6×4.5E/カ03枚）



274 「鮭の寿司(1) スキッチに石の重しをのせたところ キッチは赤肌の杉 高一八cm、長径36cm、短径27cm、鮭一本を漬けるもの（二本漬用は大形也）昭和廿九年一月に漬けたもの 郡司直衛君写 29-3-1」
275 「鮭の寿司(2) 重しをはづし、蓋をとったところ 一番上にケイギ（昔はケアバ）を敷き、藁で粗く三ツ組に編んだものを周囲につめる 29-3-2」
276 「鮭の寿司(3) ケイギも編藁も取去ったところ 白いのは米飯 その間に見えるのは鮭 昭和廿九年三月に蓋をとって食べるところ 29-3-3」

■二戸郡爾薩体村尻子内 オシラサマ調査（昭和29年4月11日／現二戸市）

森口は前年1月29～31日に同地を訪れ民具の所在調査を行っている。『日本の民俗 岩手』の記述と掲載写真から、翌29年も尻子内にて正月16日のオシラサマの祭日に立ち会ったと考えられるが、フィルム紙焼きともに現存していない。

関連資料：森口coll.フィルムなし



277 裏面情報：二戸郡爾薩体村尻子内 下家 爐のコンヨボ この日旧十二月十六日、オシラサマのお年越なので鍋で小豆団子の小豆を煮てある この室をザシキと呼んである 29-1-20

■チャグチャグ馬コ（昭和29年6月25日／滝沢村・盛岡市）

旧5月5日の行事として行われていた頃のチャグチャグ馬コ。理由はわからないが、この年は旧5月25日に順延されたようである。『民俗の四季』8話「田かきをしてはならない日」で触れている。

関連資料：森口coll.フィルムなし



278 裏面情報：チャグチャグ馬コの日の絵馬露店 岩手郡滝沢村 蒼前神社境内 29-6-25 旧五月廿五日（五日の行事を延期）



279 裏面情報：チャグチャグ馬コの絵馬の露店 岩手郡滝沢村 蒼前神社境内 29-6-25 旧五月廿五日



280 裏面情報：チャグチャグ馬コの日の絵馬露店 岩手郡滝沢村 蒼前神社境内 29-6-25 旧五月廿五日（五日の行事を延期）



281 裏面情報：チャグチャグ馬コの絵馬の露店（紙に描く） 岩手郡滝沢村 蒼前神社境内 29-6-25 旧五月廿五日



282 裏面情報なし



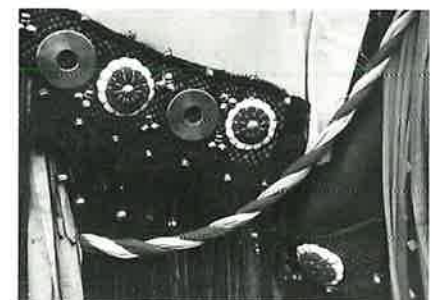
283 裏面情報：チャグチャグ馬コの装束



284 裏面情報：チャグチャグ馬コの装束「くびかけ」



285 裏面情報：チャグチャグ馬コの装束「頭かけ」結び上げ「腹かけ」真鍮の定紋をつけている 頭の下にさげた鈴は鳴がね、鳴輪、またはマダガネと称す。鳴る音は天馬を除けると云はれる



286 裏面情報：チャグチャグ馬コの装束「頭かけ」小鈴、マンジュウ(くくりものの花形)、定紋(今は装飾の金具)で飾る。



287 裏面情報：鞍の左右に垂れたのは「結び上げ(麻)」(鞍をつけてから結ぶ)菱つなぎ文様 下方に勇む馬 波に兜、其他の■様のものもある 「結び上げ」の外側に長く垂れたのは「たんじゃく」市販の色ギレで踊子の腰帯に同じ 大正時代から始まった飾りの由 鞍の下は「腹かけ」(わきあて)ふさをさげる 尻に「尻かけ」大ふさをさげる 尾■があり



向って左) 288 裏面情報：チャグチャグ馬コの装束「頭かけ」大ふさを垂れる 頭かけは首の方に延びて額を蔽う「おもがえ」となる 鼻には「はなかくし」耳には「耳かけ」(耳袋ともいう)
向って右) 289 裏面情報なし

■夏油温泉の景観 ※森口光彦氏撮影（昭和29年7月／現北上市）

35mmカラーポジフィルム。光彦氏によりマウントへ撮影年月・場所の情報が加えられている。

関連資料：森口coll. スライドアルバム



290

■稗貫郡内川目村 早池峯神社と岳集落の景観（昭和29年11月13-14日／現花巻市）

写真によれば、11月13日に大償神楽と岳神楽を鑑賞(写真あり)。13日は岳集落に宿泊し、翌14日に「うちわやき」をご馳走になっている。なお、ここに掲出した写真と岳神楽の写真は同神楽保存会 小国朋身氏、伊藤金人氏から御教示をえて同定作業を行った。

関連資料：森口coll. ノートNo. 217 フィルムアルバムNo. 9 (35mmE/カガ) 自筆原稿「東北の風俗 十一月 岳のうちわそば」



291-292-293 いずれも紙焼きなし。向って左) 早池峯神社拜殿、中央) 仁王門、向って右) 境内社



294 紙焼きなし。不動明王。

295-296 いずれも紙焼きなし。



297-298-299 いずれも紙焼きなし。



向って左) 300 紙焼きなし。厩。
向って右) 301 紙焼きなし。「ホグチキノココロバコ」(『民間伝承』39-4)に、「ホグチキノコは昭和二十九年十一月十四日に早池峯山麓の神貫郡内川目村岳(後大迫町に編入)に神楽を調査に行ったとき、一農家の厩の側面につるして乾していたのを写したのです。「ホグチキノコ」と、クを濁って呼んでいました。…内川目の岳部落や大償部落ではホグチキノコの粉を焚香によく使うそうです」とある。



向って左) 302 裏面情報なし
向って右) 303 紙焼きなし。厩のチュウギ。



いずれも紙焼きなし。
304 向って左は、『日本の民俗 岩手』p.117に「シヨイモッコ 堆肥が頭にふれないように上部に張り出させた部分をコヤシヨケとよぶ(大迫町岳)」とある。
305 中央は炭俵を背につけて運んでいるのだろうか。
306 向って右は、『北海道・東北地方の火の民俗』p.68に「草屋根の妻の三角部分を黒く塗って白く「水」の字を書いたもの…火の消極的な否定面に対する策略のひとつ」と紹介されるまじない。

内川目村岳集落で振る舞われたウチワヤキ(ウチワソバ)の印象が強かったのか、以来複数の著作で似た形状・レシピのたべものをとりあげている。以下自筆原稿から引用。「わたしが岳神楽の庭でウチワヤキをご馳走になったのは、まだ草葺き農家の時代であった。ウチワソバというそうで、シトネたソバ粉を、ハート形にかためて串にさして焼いて、砂糖を少し加えた味噌をぬったものであった。大きさは縦一三、五センチ程度、幅一二センチ程度、厚さは上の方で、五センチ程度。うすく作るほど上手だといわれるそうである。写真を見ても分かるように、炉の火を開くようにして細長い板を敷き、板には孔があいている。ウチワソバを焼くとき串をこの孔にさして火にあてるのである。その仕掛けを見てもウチワソバが日常よく作られたことが想像される。それから数年後に訪ねたとき、座を立ててこのなつかしい炉を見にいったら、炉そのものはあったが鉤はなく、灰の上にはストーブが据えられていた。串をさす孔をあけた板は影も形もない。ソバの生産も極端に減少したのではないかとおまわれる」。

307-308 裏面情報:ソバのウチワ焼 神貫郡内川目村岳 | 氏宅にて 29-11-14



309 紙焼きなし

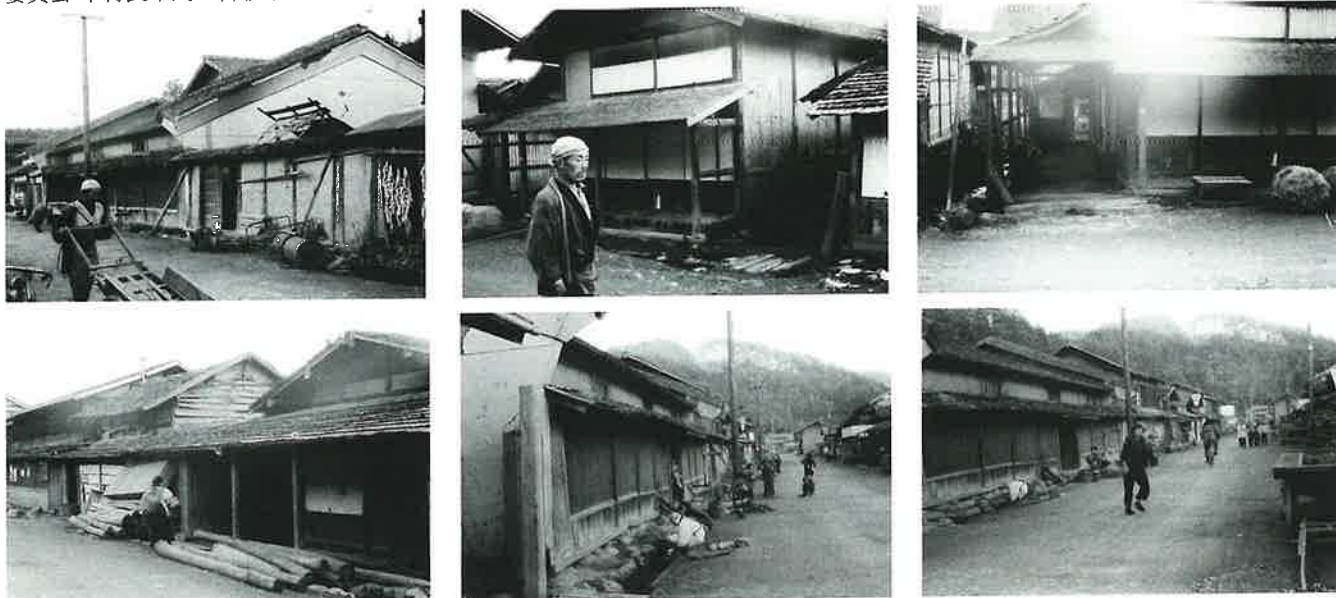


310 紙焼きなし



311 裏面情報:ソバのウチワ焼をたべる 神貫郡内川目村岳 | 氏宅にて 後方は内川目村の伊藤教育委員長 29-11-14

以下の写真はいずれも紙焼きがない。前掲岳集落を訪ねた折りの撮影フィルムと並びのものからおこした画像である。花巻市教育委員会 中村良幸氏の御教示により、大迫町中心部の様子であることがわかった。312-317



昭和30年[1955]

この年から盛岡市の文化財調査委員に委嘱される(～昭和53年)。また、三島学園女子短期大学(現在の東北生活文化大学短期大学部)の非常勤講師(服飾美学)となる。

この年の5月4日に平泉中尊寺で日本民芸協会第9回全国協議会が行われた。その時の集合写真があるが、森口自身は写っていない。この協議会には柳宗悦夫妻のほか、濱田庄司、棟方志功など102名の参加者があったという。

また、6月24日[旧5月5日]のチャグチャグ馬コ、8月7-8日の仙台七夕を撮影した35mmカラーポジとモノクロネガ両方のフィルムがある。長男・光彦氏の撮影と考えられるが、これに森口自身が同行したかは不明。その他、8月13日の白山神社例祭(紫波郡矢巾村・矢次獅子踊の写真あり)、8月28日の岩手郷土芸能祭(岳神楽ほか写真あり)、12月4日の第2回紫波郡郷土芸能祭の写真がある。

■東磐井郡折壁村 小正月行事(昭和30年2月9日[旧1月17日]／現一関市)

2月9日は折壁村内で田茂木田植踊の門打ち(写真あり)を見学、その折りに撮影したと思われる写真。翌10日は東磐井郡大原町の水かけ祭(写真あり)を見学している。

関連資料：森口coll.フィルムなし



318 裏面情報：折壁 30I1-17。『日本の民俗 岩手』p.243に、「室根村下折壁では皮つきの円形形をへボ(俵種)、皮をむいたものをアボ(粟種)とよぶ。栗の木の小枝の先にはコメノキの削りかけの花をつけ、これは瓜の花だという。また、カキタレ(幣)を取り去った年縄を栗の木に張って、これを瓜の蔓とよんでいる。」とある。

■チャグチャグ馬コ(昭和30年6月24日[旧5月5日]／滝沢村・盛岡市)

旧5月5日撮影。半纏に染め抜いた文字や街並の看板から情報が読みとれる。チャグチャグ馬コは、この年から参加賞の授与が始まり、32年には新たな儀式の導入、33年には祭日を6月15日に固定化する動きをみせている。

なお、平成22年まで境内に絵馬の露店が出ていたというが、平成23年には姿を消していた。

関連資料：森口coll.No.9(35mmE/カガ) フィルムボックス(35mmカラーポジ)



319-320-321 いずれも紙焼きなし

■釜石の漁港と町並み（昭和30年11月15日／釜石市）

11月13日に大船渡市第1回市民芸術祭(菅生田植踊、赤澤鑑剣舞ほか写真あり)を見学、その足で釜石に立ち寄っている。
 関連資料：森口coll. フィルムアルバムNo. 6 (6×6cm/70)



322-332 いずれも書き込み情報がなくどの地域か判然としない。電柱に「鈴木理髪店」「駅前高金旅館」の文字、漁船にかかる大漁旗に「嘉栄丸 釜石 磯田…」の文字が見える。

昭和31年[1956]

昭和31年の3月16日に岩手大学学芸学部教授に就任、この年の3月末には岩手大学最寄りに建てた家の新築祝いを催している。この2年後の33年3月31日退官、翌日からは非常勤講師として昭和56年3月31日までの長きにわたり教壇に立った。この年の調査も前年と同様に芸能が主体で、以下の足跡(いずれも写真あり)が確認できる。このほか、10月12日には北上市の立花毘沙門堂で仏像奉物の調査を行っている。

- | | | |
|-----------------------|--------------------|---------------|
| 3. 31：赤石の田植踊(於 日詰の農家) | 5. 20・8. 7：梁川の高館剣舞 | 8. 11：飯岡のさんさ踊 |
| 8. 15：煤孫の貴徳院法印神楽 | 8. 21：附馬牛のしし踊 | 8. 22：宮野目の大念仏 |
| 8. 26：第11回岩手郷土芸能祭 | 11. 23：大迫郷土芸能祭 | |

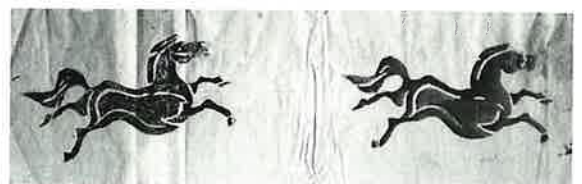
また、写真やノートの記録にないが、宿泊施設の領収書から下記のとおり出かけていることがわかる。

- | | | |
|----------------|---------------|---------------|
| 7. 31-8. 3：宮古市 | 11. 26-27：新潟県 | 11. 27-28：長野県 |
|----------------|---------------|---------------|

■遠野 刷物の馬（昭和31年7月23-24日[旧6月16-17日カ]／遠野市）

「旧六月十五日の薬馬」(『民間伝承』36-12)に、「昭和三十一年七月の二十三、二十四日の両日、わたしは遠野市の遠野町愛宕、土淵町土淵、小友町芝橋等を歩いて九枚採集してきたが、そのうち筆で書いたのは二枚で、他はみな簡素な版画である。」とある。遠野の同習俗は『民俗の四季』22話「薬の馬から紙の馬へ」でも取り上げている。この刷物はスクラップブックに貼付し保管されていた。

関連資料：刷物のみフィルム有り 森口coll. フィルムアルバムNo. 8 (35mm/70)



333 裏面情報：遠野市土淵町 刷物 前の馬は赤褐色 後の馬は黒 共に口にシトギ 35.5×12.5 31-7-24



向って左) 334 裏面情報：遠野市遠野町愛宕 墨刷 左上角に紙片 16×12.2 31-7-23

向って右) 335 裏面情報：謄写版刷物の裏面使用 刷物 黒 18.2×7.8



336-337 いずれも裏面情報なし。前掲の『民俗の四季』22話に掲載される写真。このときの撮影か。

■遠野にて（昭和31年8月21日カ／遠野市）

8月21日に附馬牛の寺でし踊りを見学しており（写真あり）、そのときの撮影であろうか。紙焼きの痛み具合とフィルムサイズ（6×4.5）からみて、それ以前の訪問時に撮影した可能性もある。

関連資料：森口coll. フィルムなし



338-339 いずれも裏面情報なし。向って左は盆の燈籠、右は頭に手拭いを巻いた女性。

昭和32年[1957]

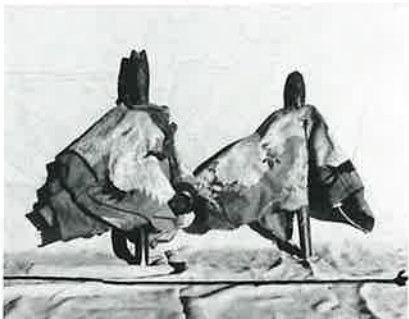
この年も調査の主体は芸能にあり、以下の足跡が確認できる。

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1. 3：晴山神楽（東晴山小学校） | 2. 9：銭掛剣舞（浅岸） |
| 7. 13：永井大念仏剣舞（個人宅） | 7. 18：成田神楽（O氏来訪） |
| 7. 23：道地雛子剣舞（藤根） | 7. 25：菅生田植踊（大船渡・S旅館） |
| 7. 26：吉浜の剣舞 | 8. 2：盆踊（盛岡市繫） |
| 8. 10：黒内田植踊（一方井公民館） | 8. 15：荒屋田植踊（江釣子村） |
| 8. 16：第5回気仙地方民芸会 | 8. 24：10余年ぶりに復活の上鹿妻剣舞（愛宕神社） |
| 8. 25：伊勢のおはらひのシン踊（紫波町） | 10. 19：大東町神楽公開 |
| 11. 3：立花の念仏剣舞と奴踊 | 11. 23：毛越寺延年 |
| 12. 14：紫野鹿踊（個人宅） | 12. 26：青笹しし踊（青笹小学校） |

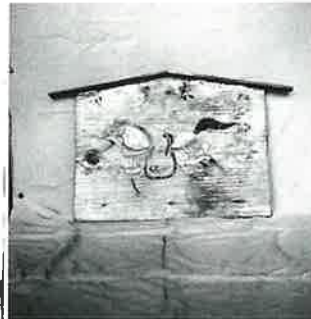
■土淵の民具（昭和32年12月26日／遠野市）

青笹のしし踊りを見学する（写真あり）とともに、民具調査を行っている。個人宅のオコナイサマについては、『民俗の四季』99話「馬頭の神」でとりあげている。

関連資料：森口coll. ノートNo. 193 フィルムアルバムNo. 16（6×6）



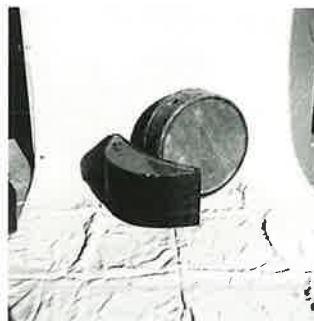
340-341 裏面情報：オコナイサマ（脱衣のもの）右 天冠をいただいた女面 左 馬面 馬鈴をつけている 遠野市土淵町土淵 C氏の家にあるもの オコナイサマは他家にあったが、C家に行きたいと知らせたので同家に移した由 32-12-26



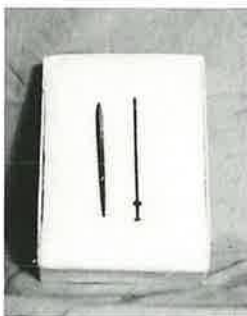
342 裏面情報：絵馬 遠野市土淵小学校蔵 32-12-26



343 裏面情報：絵馬 遠野市土淵小学校 蒐集室 32-12-26



向って左) 344 裏面情報: 箱枕 黒塗 両面に朱紋 遠野市土淵小学校蒐集室 32-12-26
中央) 345 裏面情報: ガンドウボウシ スゲ製 頭の付根にハクサ(昆布の細いもの)をつける 遠野市土淵小学校蒐集室 32-12-26
向って右) 346 裏面情報: ハンビ(酒入) 馬の荷鞍につけて野外の飲酒に用いる(朱塗)円形のものアミに入れてさげることもある。(黒塗 上面朱塗)月形ものはフロシキに包んで腰につけることもあり 遠野市土淵小学校蒐集室 32-12-26



上段向って左から
347 裏面情報: ガンドウボウシ内側
348 裏面情報: ガンドウボウシ内側
349 裏面情報: ガンドウボウシ
350 裏面情報: カツミノ内側 32-12-26

下段向って左から
351 裏面情報: カツミノ(これを着てアキタボウシをかぶる)スゲ製 遠野市土淵小学校蒐集室 32-12-26
352 裏面情報: サナブリの馬刺しに用いた針 遠野市土淵小学校蒐集室 32-12-26
※『民俗の四季』19話「サナブリの真意」に掲出される写真。

昭和33年[1958]

この年は、以下の調査記録を確認できる。

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 2. 18: 八戸のえんぶり | 2. 26: 黒内田植踊(個人宅) |
| 3. 2: 倉沢人形芝居(東和町役場) | 3. 4-8: 大船渡・釜石の小正月調査(県教委同行) |
| 3. 12: 水沢の火防祭 | 5. 6: 落合鹿踊(東和町落合熊野神社) |
| 6. 25: 毛越寺延年(平泉町) | 8. 6: 万燈祭(盛岡市桜山神社) |
| 8. 24: 第13回岩手郷土芸能祭 | 8. 31: 田代念仏剣舞 |
| 9. 1: 箱石のコウキリコ・川内鹿踊(好心寺ほか) | 9. 7: 舞川鹿踊・川西念仏剣舞(中尊寺施餓鬼会) |
| 9. 12: 民具調査(盛岡市太田・飯岡・梁川) | 9. 14-15: 山田の剣舞 |
| 11. 1: 民家調査(水沢町福原) | |

■大船渡の小正月と田植踊調査(昭和33年3月4-7日/大船渡市)

3月4日: 大船渡町の船大工宅、5日: 盛町の朝市と立根町の民家、6-7日: 三陸村吉浜の民家(再訪)、7-8日: 釜石市唐丹を訪ねている。県教委同行。立根と唐丹の訪問先はそれぞれ菅生田植踊、川目田植踊関係者宅である。

関連資料: 森口coll, フィルムアルバムNo. 12 (6×6E/KD)



353 裏面情報: 大船渡市盛町の朝市 33-3-5



354 裏面情報: 大船渡市盛町の朝市 小正月の飾物(本業は薬茶屋) 33-3-5



355 裏面情報: 大船渡市盛町の朝市 小正月の垂飾物(本業は薬茶屋) 33-3-5



下段向って左) 356 裏面情報:大船渡市盛町朝市 外套オヤジの前のものは小正月のせんべい 33-3-5

下段向って右)【参考】2004. 11. 29撮影。356と同じ地点。



357 裏面情報:大船渡市立根町岩脇 C氏の家 手前の小屋は水車 33-3-5



358 裏面情報:大船渡市立根町岩脇 C氏の家 戸袋 33-3-5



359 裏面情報:大船渡市立根町岩脇 C氏宅 小正月の団子さし 33-3-5 旧正月十五日



360 裏面情報:大船渡市立根町岩脇 C氏の家で 33-3-5

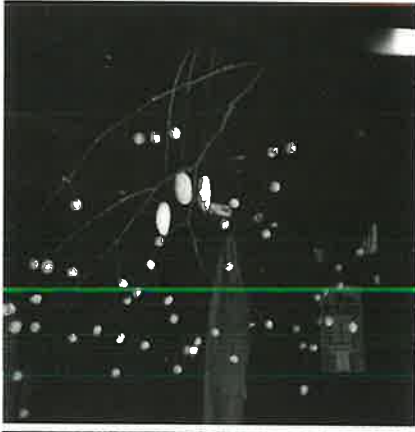


361 裏面情報:大船渡市立根町 小正月の屋根葺 33-3-5 旧正月十五日



362 裏面情報:大船渡市立根町 小正月の屋根葺(既) 軒裏に大正月にさした幣が残っている 33-3-5





368 裏面情報：大船渡市立根町の辻の石碑 小正月の屋根葺 石碑の後ろには古い年縄が捨ててある 33-3-5



前頁向って左) 363 裏面情報：栗ノ木を割った飼料桶 大船渡市立根町 K氏宅 33-3-5
中央) 364 裏面情報：大船渡市立根町 33-3-5
向って右) 365 裏面情報：大船渡市立根町 小正月クルミの木を割ったキンコ ツボミ 花 藁でつくった瓜 風で花が地上に落ち散っている 33-3-5 旧正月十五日

向って左) 366 裏面情報：大船渡市立根町 小正月の団子さし 水木に団子 栗のゴヨウ(若枝)に餅(本来は粟餅)をつけたのは栗穂と称す 33-3-5
向って右) 367 地ノ神さま(農神さま)北隣のK氏の家に属す 33-3-5



「四つの隅の呪法」(『民間伝承』34-1※『論集 民俗篇』再録)に、立根から「バスで二時間弱で海岸の三陸村吉浜に着く。旧正月十六日で、晴れわたった湾の風光を見おろす高台のK家で「ヤラグロ」を実演してもらって写真をとった。実際は十五日の宵のうちにやるものだが今は行なわない。」とある。K家での事例は『民俗の四季』79話「スネカ」、84話「やらぐる」、85話「ナマコヒキ」、110話「気仙大工の技巧」などに詳しい。

【参考】2004.11.29撮影



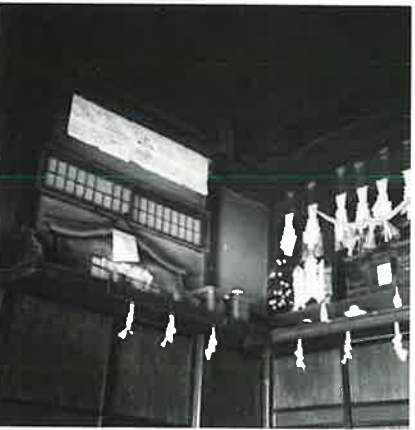
369 裏面情報：三陸村吉浜 K家 家を背にして湾を見る石垣を縁取る常緑灌木はマサカと呼ばれている 33-3-6



3/0 裏面情報：三陸村吉浜 K家 厩の屋根葺(小正月の) 33-3-6



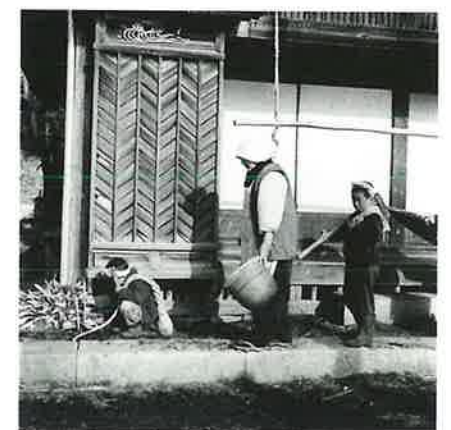
371 裏面情報：三陸村吉浜 K家 立木 33-3-6



372 裏面情報：三陸村吉浜 K家 オカミの神棚 この棚にミダマをあげる 右手に年神さまの札を記る 33-3-6



373 裏面情報：三陸村吉浜 K家 ヤラグロ 33-3-7



374 裏面情報：三陸村吉浜 K家 カヤの先にさした小魚の頭を家のカドにさす 33-3-7



375 裏面情報：三陸村吉浜 K家 ヤラグロのとき家のカドにさしたもの カヤの先に小魚の頭をさす 33-3-6



376 裏面情報：三陸村吉浜 K家 ナマコひき 33-3-7



377 裏面情報：三陸村吉浜 K家 ナリキセメ 33-3-7



378 裏面情報：スネカの面 33-3-6



379 裏面情報：スネカの面 33-3-6



380 裏面情報：吉浜スネカ 33-3-6



向って左) 381 裏面情報：大船渡市下平船大工 S家 オカミの正月飾 県教委社会教育課写 33-3-4
向って右) 382 裏面情報：気仙の肥田柿の串柿 種子なし 盛町にて タテ8寸 ヨコ1尺8寸 柿一つが横約1寸5分 タテ約1寸3分 串に萩の枝が使われたこと多し ※撮影年の記入がないが、この時のものか。

■唐丹町の小正月と田植踊調査（昭和33年3月7-8日／釜石市）

川目田植踊関係者宅で調査。この日は漁港に立ち寄り小正月風景を撮影している。

関連資料：森口coll. フィルムアルバムNo. 12, 13 (6×6E/柯)



383 裏面情報：釜石市唐丹町川目 田植踊世話人Sさんの家 33-3-7



384 裏面情報：釜石市唐丹町川目 S家 爐の横座の後ろの柱に小正月飾り 水木に団子 栗のゴヨウに粟餅(栗穂) シラハギの枝に小さな餅(豆玉) スルメをさげる 結び目に笹とコブノキ 33-3-7



385 裏面情報：釜石市唐丹町 33-3-8



386 裏面情報：釜石市唐丹町 網から魚を
はずす 33-3-8



387 裏面情報：釜石市唐丹町 網から魚を
はずす 33-3-8



388 裏面情報：釜石市唐丹町 漁船の小
正月飾り 33-3-8



389 裏面情報：釜石市唐丹町 漁船の
小正月飾り 33-3-8



390 裏面情報：釜石市唐丹町 33-3-8



391 裏面情報：釜石市唐丹町 漁船の松
飾り小正月飾り 33-3-8



392 裏面情報：釜石市唐丹町 漁船の小
正月飾り 33-3-8



393 裏面情報：釜石市唐丹町 漁船の小
正月飾り 33-3-8

■盛岡の万燈祭（昭和33年8月6日／盛岡市）

『民俗の四季』27話「万灯まつり」に、「一昨年の夏、三十三年ぶりで復活されたという盛岡の桜山神社の万灯祭りは八月五日から三日間行なわれるが、これは男女の子供たちが、武者絵をえがいて長い柄をつけたアンドンをてんでんにさげ持ち町ごとに組をつくってねり歩くもの」とある。

関連資料：森口coll. フィルムアルバムNo. 8 (35mmEノコ)



向って左) 394 裏面情報：盛岡市 万燈祭 公園入
口広場 太鼓の拍子に合せ、踊子、歌い踊り始める
33-8-6

向って右) 395 裏面情報：盛岡市 万燈祭 公園入
口広場 踊子をどりめぐる(万燈持ちのまわりを)
33-8-6

■盛岡市内 民家・民具調査（昭和33年9月12-13日／盛岡市）

調査の目的は不明。盛岡市南部と東部へ出向いている。

関連資料：森口coll. フィルムアルバムNo. 15 (6×6Eノコ) 398, 398欠



396 裏面情報：ヤセウマ 材は杉 都南村
上飯岡前野 N家 33-9-12



397 裏面情報：剣舞供養塔 大正十五年八
月五日 盛岡市太田上鹿妻の辻に立つ イ
ナリケンベアの組のもの 33-9-12



向って左) 398 盛岡市太田上鹿妻 N家 燻の箱カギ 33-9-12
向って右) 399 盛岡市太田上鹿妻 N家 箱カギをつるす仕掛 このような木
を縄で梁につり、その下部にカギを縄でつる。実際はすべて黒く焼けている
暮の廿七日に年取りの仕度を入るやがる、そのとき新燻で箱カギ
をつるす縄を拘う 但し、毎年縄を取りかへるわけではない 33-9-12



400 裏面情報：屋根の両端に煙出しのある曲家 盛岡市梁川町*** Y家 33-9-13 向って左が厩(西に延びている)



401 裏面情報：臼と杵 杵の材はヤマカ 臼はケヤキ 盛岡市梁川町** A家 33-9-13



402 裏面情報：オシラサマ 向って左から二番目のもの 高9寸2分 右端のもの 高8寸5分 このままで神棚に安置している 盛岡市梁川町** N家 33-9-13



403 裏面情報：セイロ 右手はニワの裏戸口 盛岡市梁川町** N家 33-9-13



404 裏面情報：裏(北側)に張出ている一室を持つ曲家。台所からはいる。柱間二つ、窓なし、物置のように使われている。盛岡市梁川町*** Y家 33-9-13

■福原小路の民家(昭和33年11月1日/現奥州市)

昭和24年5月に調査した福原小路の民家を再訪。「天井の八角時計」(『民芸手帖』37-5)「写真をとるために二度目を訪ねたところ、炉を入口からの視線と風とから隠すために新しくニワの棒杭を立て、柱との間に横木を打ちつけ、簀の子を張って、くねった柱と低い切炉とか構成する面白さを失ってしまった。」とある。

関連資料：森口coll. フィルムなし



405 裏面情報：水沢市福原小路 G家南面 凸出部の窓は硝子に改造され縁側の西端は板でふさがれた。33-11-1



406 裏面情報：水沢市福原小路 G家南面 道路は工事中 33-11-1



407 裏面情報：水沢市福原小路33-11-1



408 裏面情報：水沢市福原小路KW家ウマヤ南面 左方は小便所 少年が立って放尿している 母屋の東にあり 二階は袴腰形の屋根 33-11-1

昭和34年[1959]

この年は、以下の調査記録が確認できる。

- | | | |
|-------------------------|-----------------------|--------------------------|
| 2. 13: 旧正月七日行事など(室根村) | 3. 28: 岩手町郷土芸能大会 | 4. 1-2: 三月節句(高田町) |
| 4. 2: カマガミ, 曾慶神楽(大東町曾慶) | 4. 22: マイリノホトケ(北上市川岸) | 6. 21: 上和野のさんさ踊(雫石町) |
| 8. 30: 気仙の芸能(世田米小学校) | 9. 28: 岩手町郷土芸能発表会 | 9. 29: 飯岡の田植踊(北厨川小学校) |
| 10. 10: 旅館の神棚(東磐井郡長坂) | 10. 15: 川西念仏剣舞 | 11. 1-4: カバカワ, 黒森神楽(田老町) |

■室根の旧正月七日行事など(昭和34年2月14日/現一関市)

「室根山の田遊祭」(日本民俗学会報告34-10 ※『論集 民俗篇』再録)に「わたしは七草の前日に訪れたのであったが、「七草ごもり」の行事はもうおこなわれていないと聞いて期待を裏切られてしまった。とにかく話だけでも聞いておこう…」とある。このほか『民俗の四季』15話「田植のあとに」に詳細が語られている。この時に採集した室根神社田遊祭の一行札と牛玉宝印は、スクラップブックに貼付し保管していた。

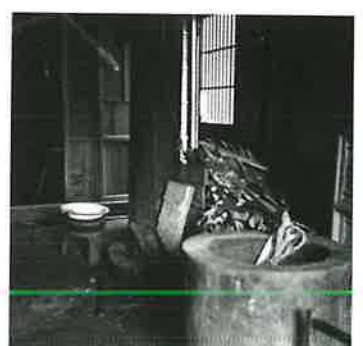
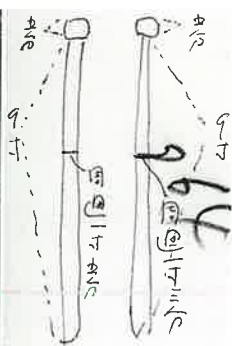
関連資料：森口coll. フィルムアルバムNo.3 (6×6E/70)



409 裏面情報：東磐井郡室根村下折壁 南流神社(観音堂)のオシラサマ オソープツ(キレ)を着てる姿 34-2-14



410 裏面情報：東磐井郡室根村下折壁 南流神社のオシラサマの軸部 桑材ならん、顔に何の表示もなし 34-2-14



411 裏面情報：東磐井郡室根村観音堂Y氏宅のニワのウシ柱 昔はすべて表面を平らにした円形の石を敷いて柱を立てた。杉、八角周廻3尺6寸 34-2-14(旧正月七日)



412 裏面情報：東磐井郡室根村下折壁 H家ナカマのお飾り 左端に神棚の一部見える 34-2-13



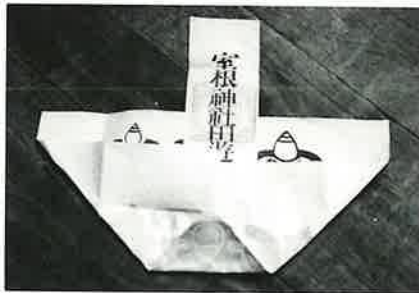
413 裏面情報：東磐井郡室根村下折壁 H家ナカマのお飾り 上部右に神棚あり(目に見えぬ) 34-2-13



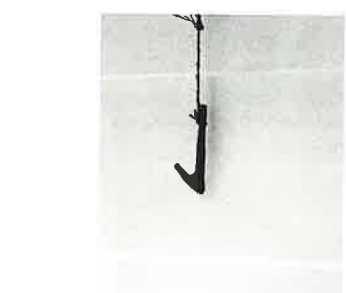
414 裏面情報：東磐井郡室根村下折壁 農家のハフと鳥トマリ ハフは格子(上部がうつむく)になっている 34-2-13



415 裏面情報：東磐井郡室根村下折壁 農家のハフと鳥トマリ ハフは格子(上部がうつむく)になっている 34-2-13



416-417 いずれも裏面情報なし。『民俗の四季』15話「田植のあとに」に、向って左「水口ぼん 東磐井郡室根村」、向って右「田遊祭守符(左)と牛王宝印」とある。



418 裏面情報なし。「室根山の田遊祭」に「お籠堂で作ったカンテア(鉤台)東磐井郡室根村」とある。後に自宅で撮影カ。

■三月節供の玩具と節句まち（昭和34年4月1-2日[旧2月24-25日]／陸前高田市）

旧2月25日に開かれていた節句まちと、露店で販売される玩具を取材している。森口が調査に入った昭和34年当時、この弓矢と的はS家のほか4軒で製作していたと記述されるが、間もなく姿を消した。『民俗の四季』93話「鬼を射る矢」、『東北の歳時習俗』p. 108、『日本の民俗 岩手』p. 252、「節句まち」（『民芸手帖』35-4 ※『論集 民俗篇』再録）に詳しい。

関連資料 * 森口coll.、フィルムなし



419 裏面情報：節句まち 陸前高田市高田町 34-4-2 旧二月廿五日



420 裏面情報：節句まち 陸前高田市高田町 34-4-2 ※『民俗の四季』に「弓矢を入れたバケツを路上において、のんびりと買手待っている少年もある」と記述される。



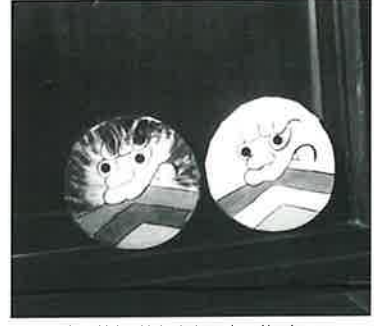
421 裏面情報なし



422 裏面情報：陸前高田市矢作町大島部 S家 34-4-1



423 裏面情報なし



424 裏面情報：節句まちで売れる的 向って右のは未完成 陸前高田市矢作町大島部 S家 34-4-1



向って左) 425 裏面情報：矢作町大島部 小正月の田植 神棚の下に縄を張ってさげる。34年
向って右) 426 裏面情報なし。後に自宅で撮影した高田の土人形。

■曾慶のカマガミ (昭和34年4月2日/現一関市)

高田からの帰路に立ち寄ってカマガミを調査、「笑顔のカマガミ」(『民芸手帖』39-6 ※『論集 民俗篇』再録)などで取り上げている。同日は、曾慶神楽の調査も行っている。

関連資料：森口coll. フィルムアルバムNo. 13, 16 (6×6E/カ)



向って左) 427 裏面情報：小正月の屋根葺三枚戸 カノコダテ 大東町曾慶*** S家 34-4-2
中央) 428 裏面情報：ニワのクド 左端のクドにはセンパンがかかっている 右端の味噌タキ釜のかかっているクドは見えない。その右後ろにウシ柱とカマガミ 大東町曾慶*** S家 34-4-2
向って右) 429 裏面情報：地覆 風呂と小便所を含む小屋の側面の汲取口に弧形材を用いてアーチ口となす この弧形材を地覆という 母屋の前にあり 大東町曾慶 F家 34-4-2



430-431 裏面情報：カマ別当(ヒバ製?)大東町曾慶** I家 34-4-2

432-433 裏面情報：カマガミ(ヒバ製)大東町曾慶** A家 34-4-2



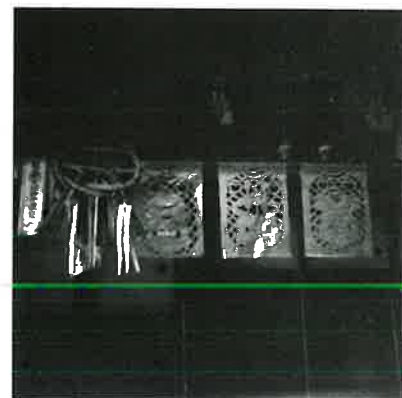
434-435 裏面情報：カマガミ(杉)大東町曾慶** S家 34-4-2

436 裏面情報：正月六日の「木の切り始め」に山の神にあげたシメ縄と幣串 大東町曾慶 34-4-2

437 裏面情報：魔除け 入口の上にシビの尾(裏を見せて)を打ちつけてある 大東町曾慶*** S家 34-4-2

■長坂の神棚（昭和34年10月10日／現一関市）

来訪日的不明。
関連資料：森口coll.、フィルムなし



438 裏面情報：東磐井長坂 K旅観 正月のゴヘイ（切紙）とオシメ オシメは市販 「ヘイは熊野神社の神主さる 熊野神社では今でも、この区域を「長坂カスミ」とよぶ 34-10-10

昭和35年[1960]

この年は、以下の調査記録が確認できる。

- | | | |
|-----------------------|-------------------------|-------------------------|
| 2. 12: 杓子づくりなど(沢内村) | 5. 5: 城内神楽(玉山小学校) | 5. 6: 晴山神楽巻物筆写(東和町) |
| 5. 15: 円満寺神楽(高村先生記念祭) | 7. 29: 菅窪の鹿踊ほか(田野畑村) | 8. 6-7: 瀬台野・福原神楽(水沢岩月屋) |
| 8. 20: 第5回気仙地方民芸会 | 11. 7-8: 日頃市の甲子剣舞(仙台にて) | 11. 26: 城内神楽(竹沢老来訪) |

■沢内の民家・杓子づくり（昭和35年2月12日[旧1月16日]／旧沢内村）

以下に挙げる写真以外の情報がなく、沢内を訪ねた目的は不明。撮影日が旧暦の正月16日に該当するため、小正月行事を見聞しに訪れたのではなかろうか。写真裏面に「正月は新暦」と書いたものがある。沢内村教育委員会『百年のあゆみ 年表で見る沢内の歴史』（昭和43年）によれば、村全体の新暦への移行は昭和33年からという。

昭和35年3月29日付沢内村教育委員会からの書簡がある。森口が送付したであろう「正月行事と他の月との照応」（『日本民俗学会報』11所収）の御礼とともに、照会があった「小正月のトシナの窓」「ススハキ棒」「ススハキ棒の柄」「箒とトシナ」「作兵エ野」についての回答を記している。さらに、「今年五月頃お越し下さるようお願い申します」と書かれている。

関連資料：森口coll.、フィルムNo. 11（6×6㎜/クロ） 沢内村教育委員会太田祖電氏書簡（昭和35年3月29日付）



439 裏面情報：沢内村新町 切家 東面の妻バス道路に面す 35-2-12 37-5-25に行ってみたら右手の樹木伐られて無し



440 裏面情報：沢内村新町 切家 暮(大抵廿八日頃)の煤掃の箒大小二本を屋敷内に立てる。正月は新暦。 35-2-12



441 裏面情報：フツケアドリのもの無し 35-2-12



442 裏面情報：沢内村貝沢の杓子の製造道具 向って右からチョウナ、メアガナ(前カンナ)、〇型、セナカガナ(背中カンナ)、柄カンナ、テツベガナ(てんべんかんなん)、コガタナ フチカンナとシャクシナタなし 35-2-12

■田野畑 葬送習俗 ※県教育庁社会教育課 佐藤昭一氏撮影（昭和35年7月29日／田野畑村）

『論集 民俗篇』p. 291-2に「田野畑村菅ノ窪では、伝承の剣ばいの身内の人の葬式に偶然出会った」とある。当口の様子は、『民俗の四季』63話「いろをかぶる」、『岩手の民俗資料』p. 156-7, 198-9、『論集 民俗篇』p. 291-2、『日本の民俗 岩手』p. 232に詳しい。

関連資料：森口coll.、フィルムアルバムNo. 10（35mm/クロ）



443 裏面情報：下閉伊郡田野畑村菅ノ窪 H家葬儀 天蓋の四隅にさがっているキレをヒシという 35-7-29



444 裏面情報：下閉伊郡田野畑村菅ノ窪 H家葬儀 出棺前に剣ばい組、七つものを踊る 35-7-29



445 裏面情報なし。



446-447 いずれも裏面情報なし。



448 裏面情報：下閉伊郡田野畑村菅ノ窪 H家葬儀 会衆に造花を一本づつ渡す 両婦人は左手にシガキをもつ 35-7-29



449 裏面情報：下閉伊郡田野畑村菅ノ窪 H家葬儀 行列 2 山坂の小径を踏みわけて墓地に向う 婦人が後ろの襟に垂らした白い布をイカガリとよぶ 35-7-29



450 裏面情報：下閉伊郡田野畑村菅ノ窪 H家葬儀 行列 3 剣舞も行列と共に行く 35-7-29



451 裏面情報：下閉伊郡田野畑村菅ノ窪 H家葬儀 林に囲まれた丘上の墓地の一隅に有り 盛土に青竹を立てる それを支える竹も立てる 行列の旗其他の半を使ったように思う 35-7-29

昭和36年[1961]

この年は、以下の調査記録が確認できる。

- 2. 28-3. 2: 津軽石の小正月, 剣舞(宮古市)
- 3. 14: 杓子づくりなど(雫石町柘沢)
- 4. 9: 岳・大償神楽(大迫町役場ほか)
- 5. 15: 出羽神社田植祭(水沢市)
- 6. 25: 高江柄念仏剣舞, 城内さんさ踊(大萱生)
- 7. 1: 附馬牛しし踊(遠野市)
- 8. 2: 馬留の民具, 剣舞ほか(胆沢町)
- 8. 10: 手代森念仏剣舞
- 8. 20: 幸田・円満寺神楽(花巻公民館)
- 11. 3: 大迫郷土芸能祭(大迫小学校)
- 3. 4: 神楽や剣舞など(一方井公民館)
- 3. 24: 無形文化財認定会(水沢公民館)
- 5. 6: 杓子づくりなど(雫石町柘沢)
- 5. 16: 市野々剣舞(胆沢町)
- 6. 29: 毛越寺延年(平泉町)
- 7. 4: 田代念仏剣舞(川井村)
- 8. 7-8: カバカワ, 黒森神楽など(田老町)
- 8. 13: 手代森念仏剣舞(岩手公園)
- 11. 2: 東山町しし踊大会(東山町役場)
- 12. 12-13: 福岡町の神楽

■津軽石の小正月 ※一部、県教育庁下閉伊事務所 沢田貞一氏撮影(昭和36年2月28日-3月2日/宮古市)

森口は若狭旅館に宿泊し、吉川保正とともに旧津軽石村の小正月行事を実見している。これについて、『論集 民俗篇』p. 224に「彫刻家の吉川保正君と津軽石の宿屋に泊ったことがあって、折から旧の小正月で食事に雑煮餅が出た。膳の右の隅にクルミを插った汁がついていた。吉川君はこの地方の出身だから、教えてくれたが、この汁は雑煮に少しずつたらし入れて入れるのだった…」と当時の調査のできごとを記している。最終日の3月2日は瑞雲寺で根井ノ沢剣舞の調査を実施している。

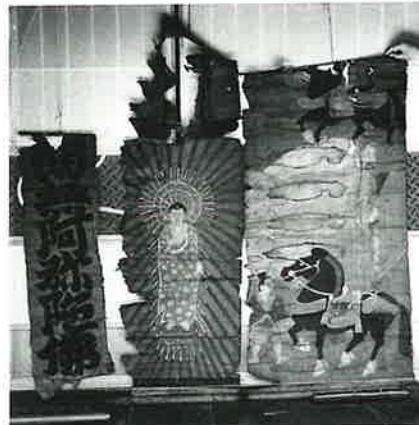
関連資料：森口coll. ノートNo. 187 フィルムアルバムNo. 8 (35mmネガ/コマ) No. 13 (6×6E/コマ)



452 裏面情報：旧津軽石村** O家 木像 三面大黒(実は三宝荒神) 36-3-2



453 裏面情報：旧津軽石村** O家 木像 鐘馗 高約1尺2寸 36-3-2



454 裏面情報：旧津軽石村赤前宇** H家 加ガカワ 阿弥陀如来立像 切箔 画面堅約2尺7寸5分 幅約1尺4寸5分 黒駒太子 画面堅約3尺9寸 幅2尺 36-3-1



455 裏面情報：旧津軽石村赤前宇** H家 加ガカワ 童形太子 画面堅約3尺4寸7分 幅1尺5寸2分 36-3-1



456 裏面情報：旧津軽石村大字赤前 S家 次の間にて
爐にさしてあるのはツツガア(松燈具)高二尺一寸二分
台七寸八分四方 36-2-28



457 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字** 辻の念仏供
養塔 高5尺 念仏供養塔 文政十一年戊子十月(連名)
今でも盆には婦人達が集ってこの碑の前で念仏を上
げる由。36-3-1



458 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字*** K家 へづく
り 水木に団子をつける 36-3-1



459 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字*** K家 へづく
り 水木に団子をつける 36-3-1 旧正月十五日



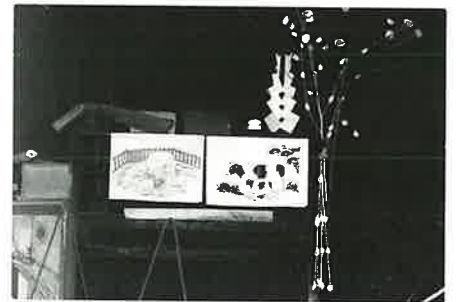
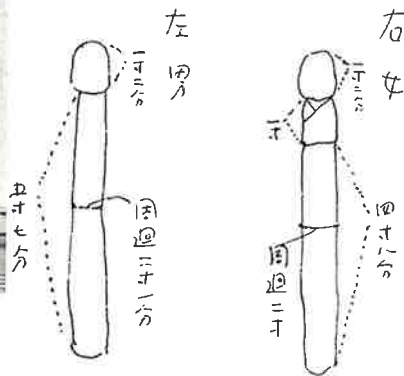
460 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字*** K家 向つて
右 男神(烏帽子をかぶる)向つて左 女神 36-3-1



461 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字*** H家 砂カミ
その箱と蓋 ふだんはこの箱におさめて神棚に安置する
36-3-1 左 女神 右 男神 実際には男神を右に飾る。



462 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字*** H家 柳カマ
桑 貫頭式 右 女 元和六年拾一月の墨銘あり 左 男
梵字を書く 実際には男を右に飾る 36-3-1 ※この
ほか、カバカワの写真もあり



463 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字** K家 厩の入口
棚にお着前様を飾る へと稲穂をお着前さまに供えてい
る かがりは牛の絵と豚の絵 つるしてあるのは鋸 36-3-
1 旧正月十五日



464 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字**(現宮古市赤
前) K家 左端にへと鯛(オビスマ)カガリの上に「網の
目」(左右両端に稲穂)カガリの右に山ノ神の図像 右の
棚にお年神様(御幣)とカガリ上にへと左端に半紙判のカ
ガリ(一對の鯛)正面のカガリ絵は夷大黒と一富士二鷹三
茄子 左右に出船入船 36-3-1 旧正月十五日



465 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字** K家 右の棚に
御幣(御年神様)カガリは左から「お年神」「三重ねの餅を
のせた三方と松竹梅」「きんちゃく」古いものの上に新
しいのを重ねて貼る 右にハセ(水木ダangoとシラキ)稲穂
と鯛 36-3-1 旧正月十五日

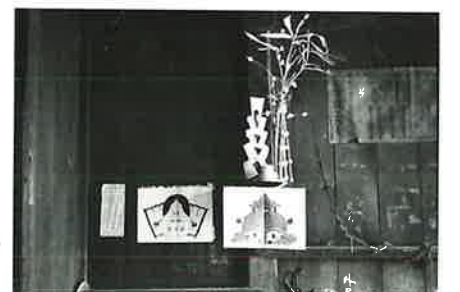


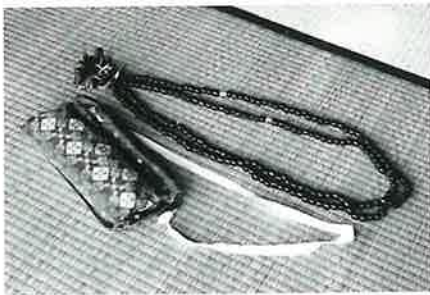
466 裏面情報：旧津軽石村大字赤前 S家 カガリトコ
の棚(神棚は常居にあり)に年徳神を祀る その下にカガリ(長
さ約6尺)カガリトコと常居との境の戸は中央は紙貼り
で、このタネの板戸をカガリと称す この家には仏壇なし S36-2-28



467 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字*** H家 神棚の
上 左端に大黒にあげたへと その後ろに山の神にあげた
松 中央三本の 御幣は天照皇大神、その前、左に夷、
右にお年神の御幣 横手に横木を渡してその上に多く
のへと(水木だんご)をならべ、下に稲穂を垂らす 稲穂
は正月十六日の晩、一株だけ鎌で切つて、縄(稲穂をさ
げている縄)にかける これを「刈りそめ」と称すへとの
水木団子には、鯛、臼、箕、俵、杵、ハバメ(はしばみ)
の形につくったものあり

468 裏面情報：宮古市津軽石新町 鍛冶職の
仕事場の小正月飾り





469 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字** Yさんの珠数とカガイ 珠数は紐の長さ2尺、カガイ(カガイ)の玉をつらね、二ヶ所に水晶の玉を交えた。先端に穴あき鏡と角・牙・瓜をつなぐカガイは錦の袋 36-3-1



470 裏面情報：旧津軽石村大字根井ノ沢字**** S家のお口びらき カガイの床ノ間の前につくった祭壇 机の上にカガイを入れておく箱 膳にもたせかけて包頭式カガミ(これをツミオウとよぶ) 36-3-2 旧正月十六日



471 裏面情報：旧津軽石村大字根井沢字**** S家のお口びらき イコ、オウガミを両手にささげて祭文を語る 36-3-2 旧正月十六日



472 裏面情報：旧津軽石村根井沢字**** S家 イコ Nさんのオウ遊び 千早を着る 右わきに法具を包んだ風呂敷 オウガミ包頭式 36-3-2 旧正月十六日



473 裏面情報：津軽石根井沢字**** S家 オウ遊びをする座敷の前の室に飾られた小正月のハレ 36-3-2 旧正月十六日



474 裏面情報：宮古市津軽石のカガリ 若狭旅館 墨でえがき、金泥を加 左端 お年神さま 右端 鯛と笹(鯛は赤、笹は黄・緑) その右 きんちやく(赤で彩る) 上の神棚の左右にハレ(水木に団子) 36-3-1 旧正月十五日



475 裏面情報：宮古市津軽石 若狭旅館の客室の床の間の隅に立てかけておかれたもの。団子をつけた水木に竹を添え、水木からさげた藁5本の先に団子をつけたもの。36-3-1 旧正月十五日



476 裏面情報：津軽石・堀内の民家 手前は黄金淵から流れてくる溪流 屋根は杉皮でふいて石をのせ、これを杉皮葺とよぶ。石まさの語では呼ばない。36-3-1



477 裏面情報：津軽石館ノ下 イコ Nの家 36-3-2



478 裏面情報：津軽石館ノ下 イコ Nの家 36-3-2



479 裏面情報：津軽石根井沢字**** イコ Nさんが、法具を包んだ白の風呂敷包を背負って、Sさんの家の上ってくる 36-3-2 旧正月十六日



向って左) 480 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字堀内 K家 お年神様を象徴する御幣 仏壇の上の神棚の横に別に棚を設けてこれを飾る 36-3-1
中央) 481 裏面情報：赤前 小堀内 念仏供養塔 ※沢田氏記述カ
向って右) 482 裏面情報：旧津軽石村大字赤前字小堀内 旧重茂街道の供養塔 船流供養 文久三亥年 船流三十三廻供養塔 正月二十九日 人名 36-3-1



483 裏面情報：津軽石町新町 N家 小正月の竹を飾る 大正月には松 三日月には杉を飾る 36-3-2



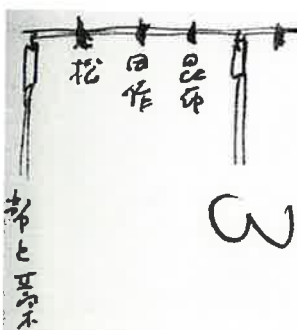
484 裏面情報：津軽石（現宮古市の内）街道筋の家小正月には入口の両側に竹を飾る 36-3-2 旧正月十六日



485 裏面情報：津軽石 根井沢 ヶバツとよばれる橋 薪をならべる。36-3-2



486 裏面情報：津軽石 根井沢 水神にあげた小正月の竹 36-3-2



向って左) 487 裏面情報：津軽石龍谷山瑞雲寺門前、路傍の水神碑 井戸を埋めたあとに立てたもの 明治四十三年九月十五日 水神塔 前に立てた松と幣は大正月に供へたもの 竹は小正月に供へたもの 36-3-2 旧正月十六日
向って右) 488 裏面情報：津軽石村大字赤前 K家 大正月に入口に注連飾を張る。幣と藁とをさげた間に松、田作、昆布をはさむ。すべて奇数。この家ではいづれも九つづつ。鳥籠にヒワ 36-3-1(旧正月十五日)

この時の調査内容は、『民俗の四季』25話「曲家のさまざま」・82話「海村のもちばな」・90話「おしらぼろき」・97話「原始灯火」・103話「三面大黒」、「小正月のお飾り」(『民芸手帖』50-1 ※『論集 民俗篇』再録)に詳しい。
なお、次に挙げる写真2枚は前掲の沢田氏が森口に提供したオカザリの露店風景である。



489 裏面情報：宮古市のオカザリ売り(旧正月用) 昭和三十六年二月 下関伊都教育事務所 沢田貞一氏写 横に長い絵の両端には必ず出船入船を描く



490 裏面情報：宮古市のオカザリ売り(旧正月用) 昭和三十六年二月 下関伊都教育事務所 沢田貞一氏写



【参考】2007.12.28撮影
現在も年末に「お飾り市」が立つ。

■柘沢 杓子づくり (昭和36年3月14日／雫石町)

「杓子づくり」(『民芸手帖』38-1 ※『論集 民俗篇』再録)に、沢内村員沢集落と雫石町柘沢集落での調査の様子を記している。「このころみに、沢内と柘沢とでとった写真によって道具と製作過程とを説明してみるが、意外な手数がかかることを知ってもらい、なんの変哲もない木杓子にも多少の愛情をもってもらいたいと思う」とある。

関連資料：森口coll. フィルムNo. 11, 15 (6×6E/KO)



491 裏面情報：雫石町柘沢 屋敷の南と西をヒバで囲む 写真は南面 36-3-14



492 裏面情報：雫石町柘沢 屋敷の南と西にヒバを植えている 写真は南面 左端は道路 36-3-14



493 裏面情報：雫石町柘沢 南面 36-3-14



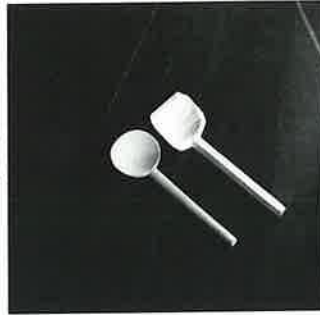
494 裏面情報：雫石町柘沢 閉め切った座敷の雨戸の前にホシ餅をつるす。春の田仕事に焼いて食べる。 36-3-14



495 裏面情報：雫石町柘沢 南東より見る 左 居住部分の屋根の節を切り上げて物置とす。左 格子窓から左はシモザシキとカミザシキ、物置への梯子はシモザシキにある。右は常居。左端手前に一部見えるのがシャクシつくる小屋 36-3-14



496 裏面情報：鶯宿温泉へ行く途中 堆肥を積んだソリを横倒しにしたままにしておく。36-3-14



497 裏面情報：未完成のしゃくし(柘沢)型を当てて円線をつけ、その内をチョウナでほったもの 完成したしゃくし(盛岡で市販) 36-3-14



498 裏面情報：雫石町柘沢 未完成のしゃくし(朴ノ木)裏、十日そのまま 36-3-14

■柘沢 杓子づくり (昭和36年5月6日／雫石町)

3月の調査のわずか2ヶ月後にも柘沢集落を訪ね、杓子作りに関する資料の撮影を行っている。
関連資料：森口coll.フィルムNo.11 (6×6E/カ)



向って左) 499 裏面情報：柘沢の曲家 東南面 36-5-6
中央) 500 裏面情報：柘沢 しゃくしを作る家 常居の前の縁側に杓子を乾す 36-5-6
向って右) 501 裏面情報：柘沢 しゃくしを作る家 出来上がった杓子を乾燥する 上には乾餅 36-5-6



向って左) 502 裏面情報：柘沢 しゃくしを作る道具と道具箱 36-5-6 向って右から(1)キワリ (2)メアガンナ (3)ナタ (4)コガタナ (5)フチカンナの裏 (6)テッペンカンナの裏 (7)セナカカンナの裏 (8)エガンナの裏
向って右) 503 裏面情報なし

■出羽神社の田植祭 (昭和36年5月15日／現奥州市)

当日の様子は『民俗の四季』5話「田植祭り」・6話「はらみ女の出るわけ」、「岩手の田植風俗」(『論集 民俗篇』)に詳しい。翌16日は胆沢町の市野々念仏剣舞の調査をしている。なお、調査時期は不明であるが、旧正月6日に出羽神社境内で行われる小槌祭にも立ち会っている。
関連資料：森口coll.フィルムNo.1 (6×6E/カ)



504 裏面情報：羽黒堂 出羽神社入口 田植祭当日 36-5-15



505 裏面情報：田の神社 田植祭の始まる前に社前で休んでいる婆さんたち 36-5-15



506 裏面情報：田の神社の前で神楽を舞う「みかぐら」 36-5-15



507 裏面情報：田植祭 田神社の前で神楽をあげている間待機している向って左から権現さま、駒、早乙女、猿田彦 早乙女の後ろにホケア持ちのホケアが見える 36-5-15



508 裏面情報：羽黒堂 出羽神社祭日 田植祭
行列 36-5-15



509 裏面情報：羽黒堂 出羽神社祭日における
田植祭 駒と早乙女 36-5-15



【参考】2010.6.13撮影
前掲「田植祭り」で紹介される文化4年6月15日銘の
「コマ」は現在も使われている。

■馬留の民具（昭和36年8月2日／現奥州市）

市野々念仏剣舞の庭元宅で目にしたケラを撮影している。

関連資料：森口coll. フィルムNo.15 (6×6E/KD)

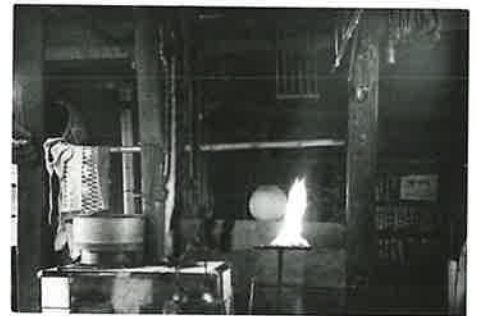
向って左) 510 裏面情報：胆沢村馬留 A家 スゲ製 風返しにはスゲのモトを 背にはスゲのウラを用いる。風返しの方は色が明るい。風返しはマダカワの縄で編む。36-8-2
向って右) 511 裏面情報：ケラ 裏 胆沢村馬留 A家 オロシエ辺で作ったものを買った由 スゲ製 背の裏をマダカワの縄で横に■■■かに編む。こうしなければツキアガッテ破れやすい。(上の方は持ち上って破れやすい)



■田老町の民家（昭和36年8月8日／現宮古市）

前日の7日は田老町の個人宅で黒森神楽とカバカワ(写真あり)、当日は摂待公民館で「七つもん」(写真あり)の調査を実施している。

関連資料：森口coll. フィルムなし



512 裏面情報：田老町*** S
氏宅にて マットウゲア（鉄製）36-8-8

昭和37年[1962]

この年、森口は日本民族学協会（宮本馨太郎理事）の昭和37年度総合研究「日本在来民具の民族学的研究」に参加、岩泉～沢内湯田～陸前高田～軽米～尻子内(二戸)～久慈野田～遠野～立花(北上)と民具調査を行っている。山屋田植踊は本田安次による映像記録に関係した用務であろうか。

- | | | |
|----------------------|---------------------|---------------------|
| 2. 19-20: 岩泉の小正月, 剣舞 | 2. 26: 水沢の火防祭 | 5. 25: 沢内・湯田の民家と神社 |
| 7. 25: 盛岡市上田の田中地蔵 | 8. 17: 陸前高田の猫淵さま・民具 | 8. 18: 田茂木田植踊(室根) |
| 8. 29-30: 軽米の絵馬など | 8. 30: 上福岡駅 | 9. 5-6: 尻子内の民具(二戸市) |
| 10. 2-4: 野田の民具 | 10. 5: 久慈の民具 | 11. 22-24: 遠野の民具 |
| 12. 1-2: 立花の民具(北上市) | 日時不明: 山屋田植踊(個人宅) | |

■岩泉の小正月（昭和37年2月19-20日[旧1月15-16日]／岩泉町）

19日は釜津田集落の小正月を実見、翌20日は岩泉の中心地に立地する雲岩寺を訪ねている。

関連資料：森口coll. フィルムNo.12 (6×6E/KD)



向って左) 513 裏面情報：岩泉 大川支所からの東南方眺望 手前の高地の下は大川に沿って釜津田の方へ行く街道 街道は右手の山の下を通る 37-2-19 旧正月十五日

中央) 514 裏面情報：岩泉 釜津田 下沢口 キマ 皮をむいた自然木のガッホリ かけ(肩縄)がついている 37-2-19

向って右) 515 岩泉 釜津田 団子をさすまでシノノを雪の上にして立ておく 37-2-19



向って左) 516 裏面情報:岩泉 釜津田
下沢口 団子をさす前にミズノの小枝の
先を折る 37-2-19
中央) 517 岩泉 釜津田 S家 仏間のシ
バダシゴ 37-2-19
向って右)518 岩泉 釜津田 S家 常居
のシバダシゴ せんべいの作のもの(鯛其
他)は伝統的ではない 37-2-19 旧正月
十五日



向って左) 519 裏面情報:岩泉 釜津田
下沢口 婦人会長の家シバダシゴ 十字
形のはハシマユもあり 長方形の
はシドリの葉 せんべいの鯛をつるし
たのは伝統的ではない 37-2-19 旧正月
十五日
中央)520 岩泉 釜津田 Mさん 後方
の床にあるのは米の団子 その上はシバ
ダシゴ 37-2-19
向って右)521 岩泉 釜津田 Mさん 黍
団子を作っている 右手のトーフの湯で
煮たものを粉をつけて握る 37-2-19
旧正月十五日



向って左) 522 裏面情報:岩泉 釜津田
カウス 黍を搗く 37-2-19
中央) 523 裏面情報:岩泉 釜津田 下
沢口 豆腐箱 長2尺2寸 幅8寸8分 高8
寸 落し蓋の下には白布に包んで豆腐
がかたまっている 家はカノだて 37-
2-19
向って右) 524 岩泉 釜津田 ヲガキ 上
方につるしたのはガシキ、ハけは十ヶ
物をかけるところはガノハ 37-2-19



向って左) 525 裏面情報:岩泉 雲岩寺
サイガウと踊供養碑 37-2-20 旧正月
十六日
中央)526 岩泉 雲岩寺 踊供養碑 念仏
剣舞の供養碑と向って右 天保二卯星
文月廿六日 ■■■■■文化十三年十二
月廿一日 向って左 明治三十五年旧七
月十六日 37-2-20
向って右) 527 岩泉 雲岩寺 小正月の
寺詣で賑はう 玄関先の両側には子供
相手の物売 37-2-20 旧正月十六日



向って左) 528 裏面情報:岩泉 雲岩寺
小正月の寺詣で賑はう 37-2-20 旧正
月十六日
中央) 529 岩泉 曹洞宗雲岩寺 寺詣
で賑はう 本堂で百万遍行はる玄関先
の子供相手の物売 37-2-20 旧正月十六
日
向って右) 530 岩泉 雲岩寺 小正月の
寺詣で賑はう 玄関先の物売 右手前
の男の子は串にさしたスルメを持つ 37-
2-20 旧正月十六日

■水沢の火防祭 (昭和37年2月26日[旧1月22日]／現奥州市)

森口の郷里・水沢の祭り。いずれも水沢市立町の旅館二階から撮影している。「かつぐ祭礼屋台」(『民芸手帖』47-5 ※『論集 民俗篇』再録)に、「昭和三十七年のノートを見ると、大町下組のカツギト(かつぐ人夫)は六十四人、頭六人、宰領一人、脇宰領二人、上組のカツギトは八十人、頭その他は下組と同じ。給料は上組では百人分として五万円、外に夜食と酒肴を出した。給料はともかくとして戦後は農村から若者を集めるのが困難になった」とある。531-538

関連資料：森口coll. フィルムNo. 12 (6×6㎝/枚)



■ 沢内・湯田の民家と神社 (昭和37年5月25日 / 現西和賀町)

昭和35年2月12日以来の訪問である。沢内と湯田の神社を中心に調査をしている。

関連資料：森口coll. フィルムNo. 11, 15 (6×6㎝/枚)



向って左) 539 裏面情報：和賀郡沢内村新町 切家 37-5-25
中央) 540 裏面情報：和賀郡沢内村新町 切家 37-5-25
向って右) 541 裏面情報：和賀郡沢内村新町 切家 37-5-25



542 裏面情報：和賀郡沢内村 むし歯の神様 オガラを束ねてあげる 37-5-25



543 裏面情報：和賀郡沢内村 金勢神社 37-5-25



向って左) 544 裏面情報：和賀郡沢内村 金勢神社 奉納物(原状のまま) 37-5-25
向って右) 545 裏面情報：和賀郡沢内村 金勢神社 奉納物(私が「ルーフ」を整えたもの) 女の下半身(木)の左にある小さな陽根はキレで作ったもの。中につめたのはヌカ? 凸形は木。右端の石は陰石か 37-5-25



向って左) 546 裏面情報：和賀郡沢内村 金勢神社 神体(右手一本欠損) 37-5-25
中央) 547 裏面情報：和賀郡大石駅前 金勢神社 淡島さま 高台共9寸2分 37-5-25
向って右) 548 裏面情報：和賀郡大石駅前 金勢神社 イカダの山の神 高台共1尺6寸2分



向って左) 549 裏面情報:和賀郡沢内村猿橋 巖島神社 37-5-25
 中央) 550 裏面情報:和賀郡沢内村猿橋 巖島神社(中島にあり) 37-5-25
 向って右) 551 裏面情報:和賀郡沢内村猿橋 巖島神社奉納の乳と鈴 37-5-25



向って左) 552 裏面情報:和賀郡沢内村猿橋 巖島神社御神体 37-5-25
 中央) 553 裏面情報:和賀郡沢内村猿橋 眞屋神社御神体 37-5-25
 向って右) 554 裏面情報:和賀郡湯田村左草 中門の下でゼンマイを乾し且つもむ。右手に小便所 37-5-25



555 裏面情報:和賀郡湯田村左草 オシラ神社の山の下の庚申塔(向って右側に)村内安全平守給閉奉給閉 奉齋猿田彦命之大祭供養塔(裏)昭和三十三年八月二十二日之建 37-5-25

556 裏面情報:和賀郡湯田村左草 オシラ神社(向って左) 山ノ神社(向って右) 稲荷を合祀 オシラ神を金色姫と書いている。

557 裏面情報:和賀郡湯田村左草 オシラ神社の右の山の神の祠堂奉納の乳堂内の神像安置の内陣の右の壁面につるす 37-5-25

558 裏面情報:和賀郡湯田村左草 オシラ神社の右の山の神の祠堂奉納の乳堂内の中央 天井からつるす 山の神は女神像の由 37-5-25



向って左) 559 裏面情報:和賀郡湯田村左草 オシラ神社 御神体 台高1寸6分 像高5寸 白の袍の下に赤の衣を着す。靴は赤。黒髪を後ろに長く垂らす。台は白ぬり。青海波を彫り白と青で彩る。ふちは赤。手に持っている台の上のものは欠けたらしい。 37-5-25

向って右) 560 裏面情報なし。『日本の民俗 岩手』巻頭に「東面をキリヤにした農家(和賀郡湯田地方)キリヤの下はマヤ 壁に杉皮 南(左手)にチュウモン」とある。

■上田の田中地蔵尊 (昭和37年7月25日/盛岡市)

岩手大学と森口の住居にほど近い四ツ家地区の田中地蔵尊縁日に撮影したもの。現在も町内会を主体に縁日のおつとめが行われている。当日は子供神輿が出て町内を練り歩きつつ、御札と菓子を配っている。
 関連資料: 森口coll. フィルムNo. 3 (6×6E/10)



向って左) 561 裏面情報:盛岡市上田 田中地蔵尊祭日 37-7-25
 向って右) 【参考】2008. 7. 23撮影

■矢作町の猫淵さま（昭和37年8月17日／陸前高田市）

17日に陸前高田市矢作町梅木の猫淵さま、翌18日に室根村の田茂木田植踊を取材している。前者は『民俗の四季』111話「ねこぶちさま」に詳しい。

関連資料：森口coll. フィルムNo. 15 (6×6E/カ)



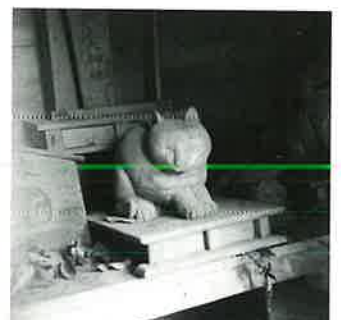
562 裏面情報：矢作町梅木 向って左 八幡宮 右 猫淵神社 37-8-17



563 裏面情報：矢作町梅木 猫淵神社 内部 絵馬の積み重なり 原状のまま 37-8-17



564 裏面情報：矢作町梅木 日月神社の棟札 37-8-17



565 裏面情報：矢作町梅木 猫淵神社本尊 木彫猫 37-8-17



向って左) 566 裏面情報：矢作町梅木 猫淵神社 木彫猫 37-8-17
中央) 567 裏面情報：猫淵神社絵馬 内部から取り出して堂の前にならべた 37-8-17
向って右) 568 裏面情報：矢作町梅木 ヤセウマ 爪はマッカ木を利用 37-8-17

■軽米町の民家や絵馬など（昭和37年8月29-30日／軽米町→二戸市）

昭和25年7月23日に軽米町を訪ね、徳楽寺へ奉納された蛸図絵馬などを撮影している。この年の訪問では、昭和25年に撮影した高砂筆筒等を再度写したが、光量がなく失敗したと述懐している。次頁上段のお堂については、『日本の民俗 岩手』p. 171に「烏神さま 県北の軽米町の林丘の中腹に草に埋もれて白山さんとよばれる小さなお堂がある。婦人病の者が願をかけるとき桐の木を削って作った、掌に乗るほどの小さな舟をあげる」と報告される。

関連資料：森口coll. ノートNo. 210 フィルムアルバムNo. 15 (6×6E/カ)



向って左) 569 裏面情報：軽米町徳楽寺 六地藏子供を失った家で小さな籠に小石を集めて上にさげる 37-8-29
中央) 570 裏面情報なし
向って右) 【参考】2005.9.6撮影 六地藏に籠は下がっていない。境内に水子地藏、子安地藏、子思地藏が新たに造立されている。



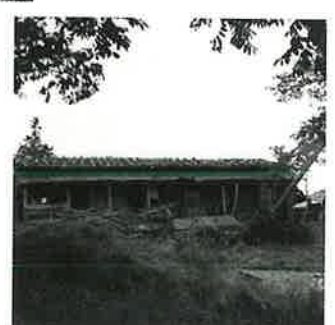
571 裏面情報：軽米町 シトメとかけ障子 37-8-29



572 裏面情報：軽米町 シトメと掛障子 37-8-29



573 裏面情報：軽米町 旧遊郭 松月楼 37-8-29



574 裏面情報：軽米町 八幡宮の近く 右端ウマヤ 37-8-29



575-576-577 いずれも裏面情報なし。3枚目は自宅で撮影したもの。



578 裏面情報：北福岡駅にて 37-8-30

■尻子内の民具（昭和37年9月5日-6日／二戸市尻子内）

写真裏面に情報記載なく、ノートNo. 210の内容と対応している。
関連資料：森口coll. ノートNo. 210 フィルムアルバムNo. 3, 13 (6×6E/70)



579 ノート情報：神棚



580 ノート情報：オシラサマの箱 杉 手製 合わせ蓋 全高1尺1寸5分 蓋の長さ1尺9寸1分 身の長さ1尺8寸2分 蓋内面の墨書「明治四十三年旧正月十六日拵之」



581 ノート情報：神棚にある燭台 手製 (左端)マンダ (中央)松 八角の台(一辺の長さ1寸)の上に八角の軸(高さ3寸)を立て、その頭にトタンの皿をつけ、釘を立てたもの。(右端)マンダ



582 ノート情報：オドッコ 御札 吞香 稻荷御守札、神宮司庁の朱印あるお札、十和田神社祈禱神璽とあるお札



583 ノート情報：オドッコ 市販 全高1尺(台を含めて) 台横尺1尺2寸 奥行6寸7分 中央の堂 間口1尺1寸 奥行4寸5分 軒下に年縄をめぐらす。中にはいっているもの一不動、大黒、稻荷、銭貨 向って左の堂の中のもの一お札 向って右の堂の中のもの一お守札のかたまり。古い御供物の餅キレ。(お守札)奉祭 蘇民将来子孫(木版刷)、下田村鎮座氣比神社 御守、悪病除御守、八幡大神宮



584 ノート情報：オドッコ 観音開きの扉あり 全高(台をのぞき)1尺1寸 間口5寸4分 奥行4寸2分 台横巾1尺1寸3分 奥行5寸3分 稻荷の人形をおく(土焼) 中に巻堀神社の御札や子安地藏堂の御札あり(子安地藏堂 遷宮師大宝山 別当与四良 裏に元治元巳酉正月廿三日)。子安観音の木版画像(竪8寸 巾2寸2分)もあり

◎ノート追記情報 他で常位とよばれている室は、ここでは座敷とよばれている。他での台所はニワの一部に設けられている板間で、物を置く。他での座敷はデイという。ザシキの裏側にもデイの裏側にもオクと呼ばれるヘヤがあつて寝室などに用いられている。ザシキには爐があつて煮たきする。この家はニワにも七輪を置いて煮焼きしていた。ザシキの奥の隅に神棚あり。ふちにさまざまな御札をはり垂らし、毎年新しいのを貼り重ねる。上には左端にオシラサマを入れた箱、つづいて三つのお堂(オドッコ)をならべ、手製の燭台などを置く。

◎ノート追記情報 子安さまの日 旧正月廿四日のひる、女たち(殊に身持ちの若いひと)がこの家に集つた。米を出し合つて会食し、またキレをオドッコの屋根にかけ、会合終ればキレをオドッコの中に仕舞つた。

◎ノート追記情報 TY家 奥座敷をデイという。台所の東側(裏側)はオク、デイの東側(裏側)もオク。

◎ノート追記情報 T5家 オシラサマは目の神さまで、四足獣をたべると目が悪くなるといつていた。また荒神さまともカイコの神さまともいう。S家にもオシラサマあり。

◎ノート追記情報 TS家の隅の戸外にみそ煮る釜あり。これにて稗を蒸す。イタカリ=カラムシ。



585 ノート情報：戸棚とその上のもので壁ぎわに神棚と直角に戸棚(1間)を据え、上に竹のツツラや小箱をのせている。



586 ノート情報：カゴシノ竹で編んだツツラ風のもの 市販 鳥越製で、福岡町の店で買ったもの(手前3つ)(奥)先代の頃からあったもの。みな黒く煤け、なかの書類も入れっ放しのまま古びている。



587 ノート情報：コロバコ(香炉箱の意ならん) 手製 下部つぼむき出しあり。サオコ(香を扱う竹のサジ) 全長4寸



588 ノート情報：木箱 松 手製。

◎ノート追記情報 毎年、盆の香をつくる。桂の葉を一、二日天日で乾しカラウスで搗いて粉にする。ひき出しに入れておく(サオコも共に)。サオコで掬い、灰の上に鍍形に盛り、線香で一端に火をつける。香は鍍形のまま燃えてゆく。香は近所の人に分けてやることもある。



向って左) 589 ノート情報: 竹籠 市販 高8寸 口径一長径7寸 短径5寸3分 中央と右) 590-591 ノート情報: 竹籠 ミザル(箕箒)副業として自家製 松木でいぶして黒くしたものをに入れて黒い線を出している。ミザル使用の一例 タキツケ用の樹皮(栗)のをせている。



592 ノート情報: タンス 市販 もとは朱塗か 新しいタンスはデイやオクに置き、先代からの古タンスはザシキの縁側の端に置き、ボロ入れに使っている。幅3尺7分 高3尺 深さ1尺5寸



593 ノート情報: ジョウバ ツマゴのツラを作るときの型



594 ノート情報: ツマゴ 自家製 長1尺 巾4寸



595 ノート情報: 竹の筒 キュウリの種子を入れて縁側につるしてあったが、蓋の内面に火口らしい紐キレが下がってゐたから、狩猟用の何かであったのではなからうか。全長30cm 内蓋の長さ2.5cm、直径7cm つるし紐は藤蔓。



596 ノート情報: モモヒキ 木綿 長さ77cm



597 ノート情報: 山稼ぎの支度 ヤマミジカ モモヒキ マエカケ 地下足袋 竹林にはいるときはモモヒキに限る。モンペでは引っかかる。手にもつのはシノギリ鎌(篠竹をきる) 柄はクルミ。



598 ノート情報: 膳 (1)足のないもの=オシキ ぶだん用 市販 杉 赤漆塗 9寸四方 ふちの高さ2分 全高8分 (2)四つ足のもの=オヤマゼン 暗れの日 用ゆ 市販 杉 赤漆塗 1尺四方 全高2寸3分 ふち高さ5分



599 ノート情報: テトリガマ 鋤物 市販 口径4寸5分 高約6寸5分 蓋を失う 現在の鉄瓶の以前のものならん



600 ノート情報: ハンジョウ(今はヒキバチという)ハットウなどつくるとき粉をねるのに用いる木鉢。ツキノキ製か 手製。径1尺3寸6分 厚さ3分 高さ約3寸6分



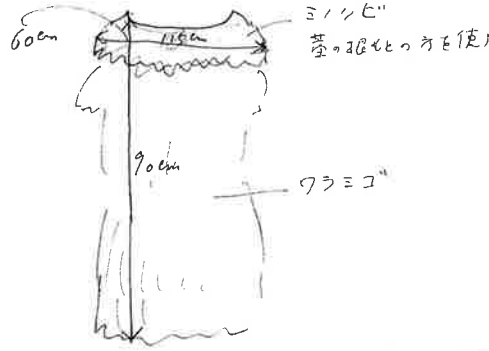
601 ノート情報: ハンジョウ(未完成)とメンボウ ツキノキか 手製 直径1尺6寸5分(内、厚さ5分)外底(未完成)の径1尺1寸 メンボウは長さ2尺8寸 直径9分



602 ノート情報: 亀コヤキとセンバイガタ(テンポカタ) 何か変ったものを調理するときのもので子供の遊び道具ではない。鉄製。亀コヤキ 小麦粉でやく。センバイガタはテンポカタとよぶ。小麦粉で厚く焼く。



603 ノート情報: ハットウをつくるときの用具 向って右 エザル 市販 煮上げたものを取り上げる(他方ではスイノウという) 竹で編む 中央 トバシ(ハットウバシの意か)ハシギで作る 長さ1尺4寸5分 煮たものをかきまわすのに用いる 向って左 エザル 市販 これに取り上げてタレ(汁)につっこむ(他地方ではソバザルという) 竹で編む



604 ノート情報:ミノとアミガサ ミノは村の人に頼んで作ってもらった。物を背負うとき、及び雨のふるとき着る。ミノクビ 藁の根もとの方を使う。アミガサ 笠はイグサ製 青森県名久井製 色線(紅 青 紫)を入れてある。



605-606-607 ノート情報:手拭のかぶり方

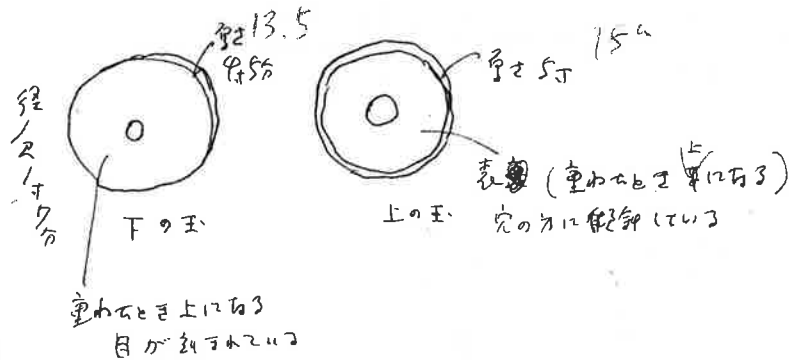
※「鉢巻と類かぶり」(『民芸手帖』40-5)によれば、向って左と中央は手拭いを前で結んでいる状態、右は後ろで結んだ状態。



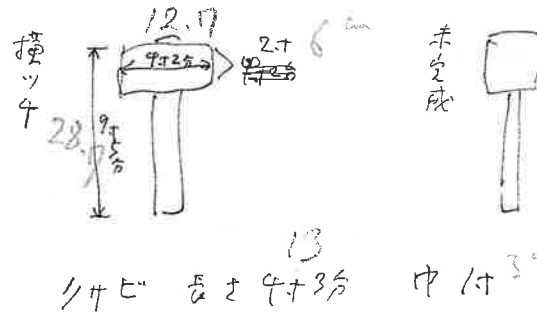
608-609 ノート情報:フカシコガ(こしき也) 注文して作ってもら 五升位はある直径8寸8分(下部は7寸5分) 高1尺1寸 フカシザルコ 竹 自家製 径6寸5分 高1寸 底の穴の上に置きキレをかぶせる。

610 ノート情報:ヒキウス 豆腐をつくるとき豆をひく。石市販。直径1尺2寸(内ふちの厚さ1寸) 全高1尺

611 ノート情報:ヒキウス 米、ソバ、ムギ、豆をひく。石 市販。直径1尺(内ふちの厚さ8分) 全長8寸。



612 ノート情報:ヤギリ(ひきうす)豆腐をひくときに用ゆ。刻んだ筋を「目」という(「目切りする」という)。



613 ノート情報:槌とクサビ 手製 ヤマガ



614 ノート情報:三本足 桐のマツカを利用した一種のキャタツ。自家製。高1尺7寸。上に踏台をつける。



615 ノート情報:コニヨボ 炉の隅におく木割台 ツキノキの切株。高1尺5分。薪割はチョナとよぶ。



616 ノート情報:箕 市販 ふちはコガン(コクワ)のつる。トウミの出現で箕不要となる。ツンジョ(落ちて土に交った米や豆や麦)を吹くのに用ゆる。



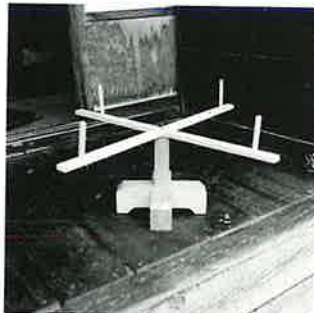
617 ノート情報:マドリ 材はアオダマ 向って左 全長1尺9寸 枝の長さ1尺3寸 向って右 全長1尺7寸5分 枝の長さ1尺2寸5



618 ノート情報:セイロ 松材 自家製? 長102cm 高28cm 奥行80cm 中央に取出し口あり、その巾15cm。板の厚さ3.3cm。四斗俵でモミ8俵位はある。豆6入れる。昔はヒエも入れた。



619 ノート情報:セイロの置いてある小屋。台所にはセイロを重ねたものがある。



620 ノート情報:糸まき 手製 腕の長さ2尺1寸6分 全高7寸2分 麻糸を巻くのに用いたが、今は毛糸を巻くのに使う。



621 ノート情報:ワラウチツツとワラウチイシ 手製 ツツの全長1尺2寸5分 柄の部分5寸 ツツの面の直径3寸3分



622 ノート情報:砥石と砥石台 水入れの缶に乗っているのはドンツキ石。ドンツキ石 くびれのところに綱をつける。



623 ノート情報:サオハカリ 市販 16 貫かかる



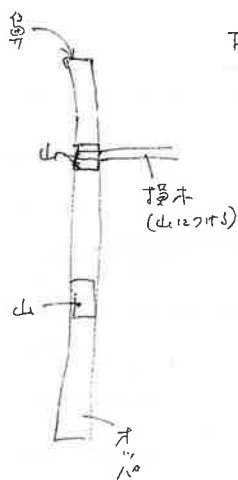
624 ノート情報:手モッコ 縄製 柄は杉(全長200cm) 縄あみの部分の長さ128cm



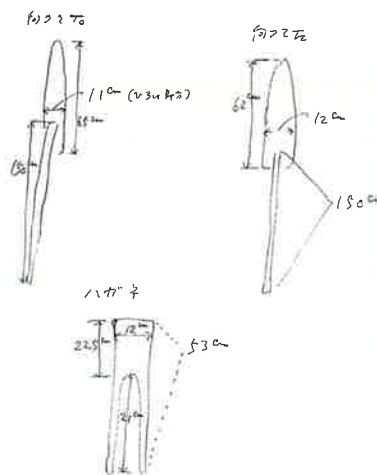
625 ノート情報:ジキタガ(肥料桶) 注文して作ってもら。高62cm 口径48cm かつぎ棒は桐 ヒシヤクは今は市販のブリキ製を用ゆ。



626 ノート情報:ナダのサヤ ツキノ木 自製 全長7寸 巾2寸5分 厚さ7分



627 ノート情報:ソリ 手製 全長135cm 上部の幅53cm(鼻) 下部の巾60cm ハツナは藤蔓と麻縄



628 ノート情報:スキ ウチボッコを耕すのに用いる。栗 ハガネ以外は自製。



629-630 ノート情報：スキ 未完成のスキ



631 ノート情報：カリハライカマ イタヤの柄は自家製 長3尺2寸



632 ノート情報：鎌の置き場所



向って左) 633 ノート情報：マンガ 田掻きだけに使う。9cmおきに歯9本あり。全高56cm、横巾63cm 市販
中央) 634 ノート情報：センコキ 行商人より買う。十年ほど前まで使った。脱穀機だとタネに傷がつくと称して、今もセンコキを使う家あり。高56cm 巾60cm 23本の歯あり。
向って右) 635 ノート情報：ハセ ニワの端に常置

副業 竹細工と養蚕



向って左) 636 ノート情報：シノサキカイ 鉄 静岡県で製造
中央) 637 ノート情報：ナタを用いてシノを削る シノサキカイでさいてからナタで削る
向って右) 638 ノート情報：町の店の者、ミザルを積んでもってゆく



向って左) 639 ノート情報：家の側面に積んだマサイタ(国有名は蚕箱 サンパコ)オコサマ飼養用の浅い箱 長さ3尺1寸 横巾1尺2寸5分。棚(梯子形のもの。マサイタをのせる)長6尺1寸5分 幅1尺9寸 段の間隔4寸 段の数10 左右の二つの棚を連絡する横木をトドコノホゲという。
向って右) 640 ノート情報：上のマサイタの下にある棒はマブシカタメ。ゴザはコモ。左上部マサイタの間にあるのはトトコアミ。マサイタの上にコモをのせ、その上にカイコを置く。その上に更にトトコアミをかける。桑やる。カイコがアミの上に乗って桑をたべる。糞や喰い余りがたまれば、そのまま他のマサイタに移す。糞や喰い余りはアミの目から下に落ちる。コモを乾す。マブシカタメの下にあるのはマブシ。



641 ノート情報：トトコアミ 目が6つとこまかいものもあり。トトコ成長するに従って目の荒いのを用ゆる。

642 ノート情報：マブシ 糞製

643-644 ノート情報：マワタカケル台 全長60cm

◎ノート追記情報 尻子内でオシラサマのある他の家はS家(TY家の裏手)。TS家ではオシラサマは目の神さまだといい、四足獣をたべると目が悪くなるといった。荒神さまともいい、またカイコの神ともいう。



向って左) 645 ノート情報:TS家の前から、白鳥川の向うの山を見る。畑が作られてある。
 向って右) 646 念仏供養碑 バス道路から尻子内の部落に上る径の傍にサトウ大根の畑あり(道より高い)。その中にこの石碑あり。後ろにヒバの古木立つ。枝を切り払われたので枯れてしまった田。中央のもの 念仏供養塔 念仏講中 嘉永四辛亥十月十六日 側面に連名を刻む 向って左のもの 念仏供養塔 文化四丁卯 三月廿八日 連名

■野田村の民具 1 (昭和37年10月2日- 3日/野田村米田)

いずれも裏面に記載なく、ノートNo. 210に詳細な記録をまとめている。

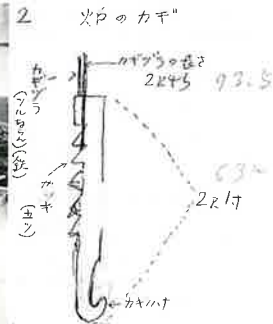
関連資料: 森口coll. ノートNo. 210 フィルムアルバムNo. 3 (6×6E/カ) No. 14 (6×6E/カ14枚)



647 ノート情報:家の正面 屋根はイシヤとよぶ。マサの上に石をのせる。



648 ノート情報: 炉のカギ



649 ノート情報:火棚 松のマッカ木をそのまま利用



650 ノート情報:マツキ 現在の使用目的 タキツケ、殊にトナガマのタキツケ、盆火



651 ノート情報:トナガマ 土製のカマの高さ約1尺8寸54cm ニワの隅にあり。豆腐用や味噌用の豆を煮る。鐵釜は軽米製 径2尺45 73cm 深約1尺 30cm



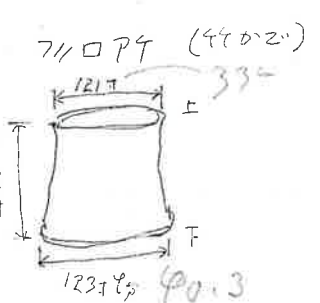
652 ノート情報:ハギリ タガ物 高1尺2寸 径2尺3寸3分。これに豆を入れてうるかしてからザルにあげハギリの上に渡した枝の上に石臼をのせその石臼で豆をひく。ひいたのをトナガマで煮る。



653 ノート情報:ハギリに枝を渡した図。円形にくぼめたところに石臼を置く。



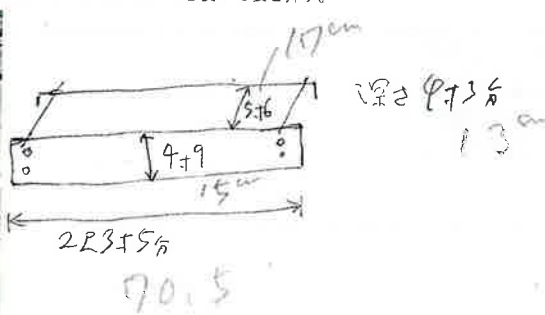
654 ノート情報:フクロアケ(竹カゴ)図のように仕掛けたフクロアケに麻袋を入れ、豆の煮汁を充たし、適当のときフクロアケを上にくくと袋だけ残る。その袋を押してしぼると汁が下のハギリに溜る。熱いのでメンボウを使って袋を押す。



655 ノート情報:フクロアケとメン棒 メン棒の長さ2尺2寸五分 67.5



656 ノート情報:ハギリの上にフクロアケを置いたところ メン棒も乗っている



657 ノート情報:豆腐をかためる箱 ハギリに溜った豆汁にニガリを加へる 五丁入れで、一丁の大きさは4寸4分 13.5、3寸8~4寸11.5-9 向って右端だけ横の長さが小さい。左からキザミをつけて行くうちに右端の一丁の長さが足りなくなったのであろう。



658 ノート情報：豆腐をかためる箱を分解したもの 向って右端は蓋だが手が一つ欠けてしまった。



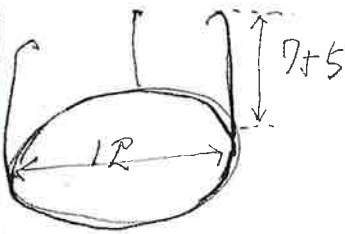
659 ノート情報：豆腐を箱のまま法事のある家に運ぶ



660-661 ノート情報：箱をおろして中を見る



662 ノート情報：五徳(市販品) 鉄製



663 ノート情報：五徳と鉄鍋 三升だきの鍋 径1尺27 38cm 今は湯をわかすときにだけ使う (もとは飯をたいた)



664 ノート情報：膳



向って左) 665 ノート情報：カマスをひろげて麦の種子を乾す 炉からとった灰で消■してから乾す
中央) 666 ノート情報：ムシロをひろげて粟(小粒の山栗)を乾す
向って右) 667 ノート情報：ハンダイ 内長径1尺35 内短径9寸4分 高9寸5分 竹のタガ 不幸のあった家へ、ダンゴを入れて贈る。ダンゴは中に小豆を入れたもので型でつくる。



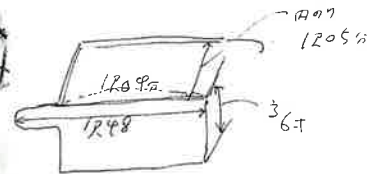
668 ノート情報：コシキ タガ物。径1尺1寸 全高1尺1寸9分 深さ7寸9分 底の孔は径約1寸



669 ノート情報：コシキの下底と穴をふさぐ簀



670 ノート情報：一斗マス 手製 上に乗っているのは一升マス



一斗マス 内径 9寸9分 高さ 2尺7寸



671 ノート情報：白 ヤマタテといふ木でつくったもの。全径1尺96 59cm 内径1尺76 54cm



672 ノート情報：テキギ アツサ製



673 ノート情報：丸形の手カゴ 竹編細工 市販 約十年前から用いられたツルの間の径9寸5分 高さ(足を含めて)6寸



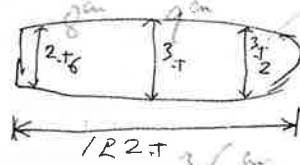
674 ノート情報：手カゴ(角形、竹編細工) 宮古のカゴ屋つくる。1尺四方高7寸



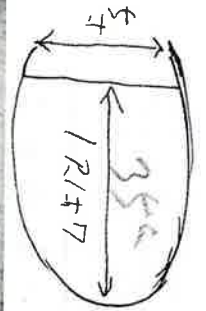
向って左) 675 ノート情報: 手カゴ(角形、竹編細工) 宮古のカゴ屋つくる。1尺四方高7寸
中央) 676 ノート情報: ザル 唐竹製 市販 内径1尺4寸 幅7分 深さ3寸5分 向って右) 677 ノート情報: 塩箱 台所用 手製 松材 長さ2尺1寸 幅1尺08分 高さ(中央で)6寸5分 内部中央を仕切る



杉製



平らな方が裏面



678 ノート情報: ツマゴをつくる時の型 杉製 平らな方が裏面

679 ノート情報: 篠竹製 市販 黒の筋が入れてある 深さ3寸4分



向って左) 680 ノート情報: 家の側面にマッカを打ちつけて梯子かけとす
中央) 681 ノート情報: 軒端の風ガエシを持ち送り風にあえてあるマッカ木(栗)。樋はタテアミで使った竹(漂流物らしい)。
向って右) 682 ノート情報: サゲモッコ 二本の竹に魚網を張る 竹の長さ6尺9寸 網の長さ4尺2寸 平らにひろげたときの網の幅2尺2寸



向って左) 683 ノート情報: ショイモッコ 高1尺8寸5分 周回6尺2寸 四本の木を火であぶって曲げてU字形とし、それを組み合せ縄をかける。背に当たるところには藁で編んだものをつける。頭のうしろに当たるところに板(高8寸5)をつけ、荷が頭に触れるのを防ぐ。これにワカメを一杯入れると十二、三貫となり、乾してかわかせば1貫となる。
中央) 684 ノート情報: タガラモッコ 葉をつむ 街道わきの家
向って右) 685 ノート情報: コエモッコ 縄の代りにイカツリ糸を用ふ コエモッコというが、入れて運んでいるのは未だ濡れてある食用の若生いの昆布(細めの昆布なり)重さ1貫5.6匁の昆布だが乾かすと二百匁程度になる。



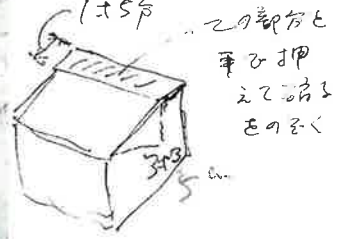
向って左) 686 ノート情報: 鱧(ペラとよぶ)の食べ残りを門口につるして乾燥させてある。単に保存食としてであって呪の意味なく由。漬の荒れたときなど煮つけにして食べる。
中央) 687 ノート情報: 鉢巻 漁に働くときはこのようにしめる。
向って右) 688 ノート情報: スキ 朴ノ木製 振って土を左に返したところ右に返すときは反対の握り方をする。



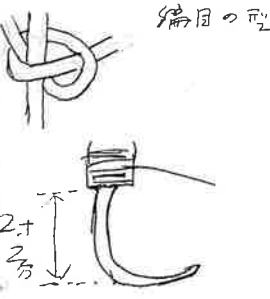
689 ノート情報：ワラジ 手製 岩の上を歩くことが多いので濱に出るときはワラジをはく 台所につるさされているワラジと草履



690 ノート情報：ガス燈 イカツリ用 硝子面はタテ7寸8分 横寸4寸2分



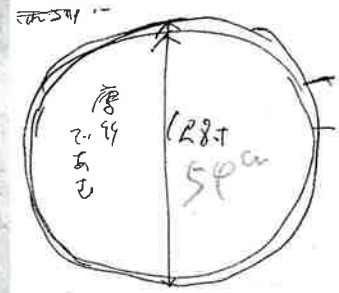
691 ノート情報：目がね 杉製の枠に硝子はめる 大工に頼んで作ってもらう。野田にこれを作るのを得意とする大工住む。一この部分を手で押えて硝子をのぞく



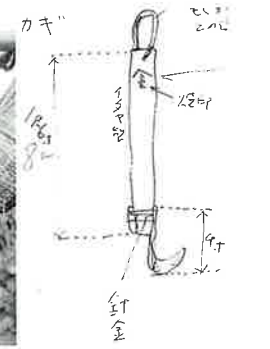
向って左) 692 ノート情報：ヤツカリと手カギ 自製(カギは市販) 麻糸で編む。前腰にさげて、とったカゼを入れる。深さ約1尺6寸口の周囲4尺2寸。手カギはカゼをとるのに用いる。柄の長さ8寸8分 綿糸(網の古いのを利用)
向って右) 693 ノート情報：カゼの実をのせて水をきる用具 ハラワタなどが下に落ちる元は手のひらでやった。針金にクレモナ糸を張って作る 径4寸3分



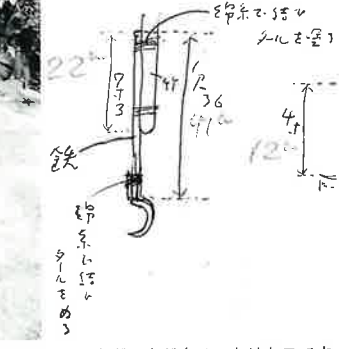
694-695 ノート情報：タモ イシダコがはいっている 自製 ふち針金 こまかい目の網 長径1尺4寸 短径1尺1寸5 高(深さ)1尺55 柄1尺8寸



696 ノート情報：ハエナワ 縄籠 唐竹で編む 竹の縁にスゲをかぶせて糸で押へる中にはいっている糸はケアタナワとよび、綿糸に防腐剤をぬる。元は柿洗をぬった。



697 ノート情報：手カギ アワビをとるとき獲物をひっかける。マニラ麻の紐 もぐったとき落とさないようにこのへんを手頭にかける



698 ノート情報：カゼをとる道具 目鏡でのぞいてカギでカゼをひっかけタモですくう。タモ 木綿糸で手製 落ちた獲物を拾う 長径5寸 短径3寸6分 深さ3寸5分



699-700 ノート情報：ショイカゴ 唐竹製 宮古の人が行商にきて下安家に泊ってゐて作る 口径1尺25 高1尺5 カバ皮を底に敷き、両側に少し巻き上げる。皮の長さ1尺7寸2分、これは短い方でもっと長いがある。水が溜ったとき、少し傾けて水を流す。アワビやコザカナ、なんでも入れるが、ワカメや昆布は入れない。



701 ノート情報：セイロ 粟を入れて乾してゐるが実はイワシの煮ぼしを作るときにセイロ也。底はスノコを取りつける。この箱に籾をならべ、こうした箱を五枚か七枚重ね、縄をかけ、水を張った大釜に入れて煮る。煮上ればそのまま取り上げて干す。こうすれば魚がくづれない。くづれないほどに固くなればムシロにならべて干す。

■野田村の民具2 (昭和37年10月3日/野田村米田の海濱で)

いずれも裏面に記載なく、ノートに詳細な記録を残している。
 関連資料：森口coll. ノートNo. 210 フィルムアルバムNo. 3 (6×6E/カ)



702 ノート情報：船小屋



703 ノート情報：船小屋と綿津神社(タコガミサマ)



704 ノート情報：綿津海神社



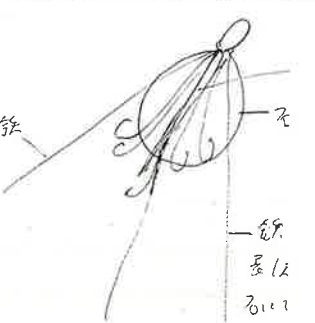
705 ノート情報：船べりのマッカ木



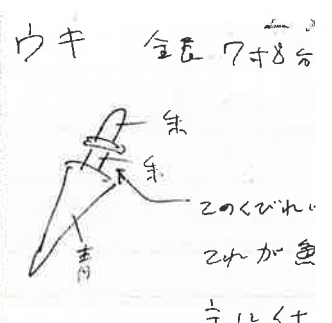
向って左) 706 ノート情報：船べりのマッカ木
 中央) 707 ノート情報：船べりのマッカ木
 マッカ木にかけられている漁具 アワビカギ ヤス タコカギ
 向って右) 708 ノート情報：漁具の竿を置いた漁船



向って左) 709 ノート情報：綿津海神社の前の池に沈められたタコツボ 海に沈める前に、こうして箱(みかん箱大)に重みをつける。底にも穴があげられている。
 向って右) 710 ノート情報：箱めがね 自製 全高(底共)1尺4寸 箱だけの底辺1尺5寸 1尺17 タコ、アワビ、ウニ、ホヤ等を見るとき用ゆ 底の硝子を保護するとき、台の上に乗せて仕舞う。穴は蓋でふさぐ。紐をかけて仕舞う。

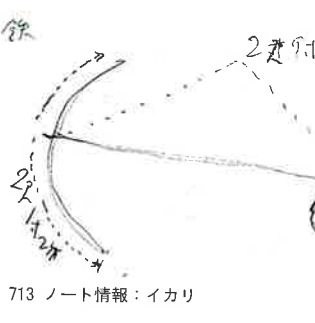


711 ノート情報：イサリヒキ 竹へらにサバなどをつけて、中央の一番長い針に結ぶ。長い綱をつけ、そろそろと引くと、タコが餌に食いつく。大きな岩のあるところではひっかかるので、砂底のところを用いることが多い。
 ←最も長い針(9寸6分)これに竹へらをゆわえる。

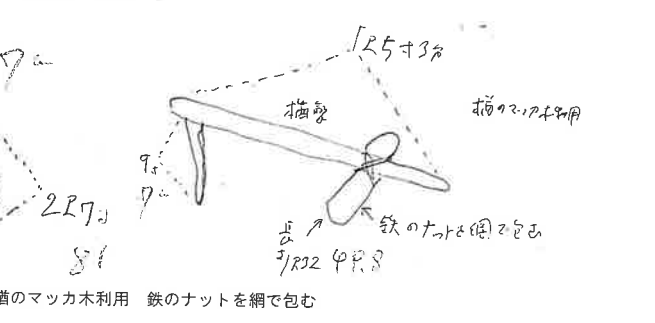


712 ノート情報：ウキ 全長7寸8分

←このくびれに水が当って水しぶきをあげ、これが魚を寄せる方便となる。主にイナダなどをとる。



713 ノート情報：イカリ



槽のマッカ木利用 鉄のナットを網で包む



714 ノート情報：ウキ
近年の発明

←糸まき
←ヘラ(朱ぬり、朴ノ木)
長さ6寸5分
五、六年前より使用



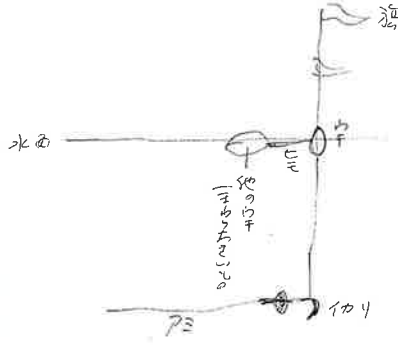
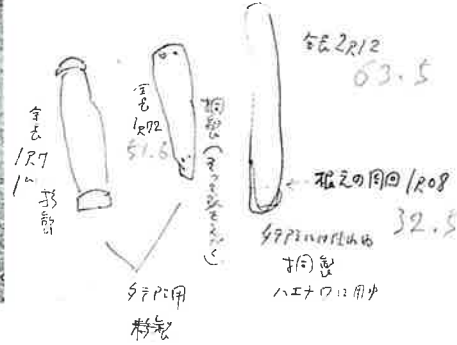
715 ノート情報：ボンデ 波間に立てて海中に網が沈んであることを知らせる標識。網が沈んであれば旗二つ。浮いてみれば旗一つかかける。この旗による標識を立てることを申合はせたのは最近也。小形漁船のための標識也。小袖では竿の先に杉葉などをつける。これは昔からのやり方也。



716 ノート情報：タテアミのウキ 杉製 全長3尺8寸5分



717 ノート情報：ウキ



718 ノート情報：ボンデ 全長9尺1寸 内ウキ(桐製)の長さ1尺05分。ハエナワのときは縄を張る。建網のときは沖の方に立てる。種市の漁夫の話では旗は風の方向を知らせるための用もなすとのこと。種市ではタコはハエナワでとる。餌はつけない。

■野田村の民具 3 (昭和37年10月4日/野田村泉沢)

いずれも裏面に記載なく、ノートに詳細な記録が残っている。
関連資料：森口coll. ノートNo. 210 フィルムアルバムNo. 14 (6×6E/70)



719 ノート情報：はねつるべ 重しはヒキウス



720 ノート情報：タキイバ(キジマのこと)薪をタキイという。タキイを積んだのがタキイバ。薪は冬の間伐採する。



721 ノート情報：曲家 K氏(屋号「川向い」)の家。廊部分のオウギヒラに煙出しがついてゐない。



722 ノート情報：戸袋と雨戸 雨戸は縁側よりも下まで届いてゐる



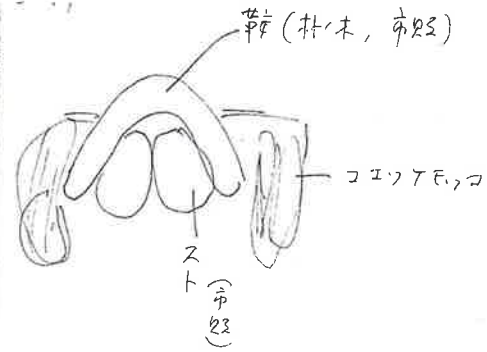
723-724-725 ノート情報：ウマヤ部分



726 ノート情報：稲刈 老若そのかぶりものを異にす



向って左) 727 ノート情報: マダノ木 M家の畑に立つ
向って右) 728 ノート情報: マダカワ 煮て繊維となし、ヘンナシ(ヘリナシの意)の糸とする。ヘンナシはゴザの裏打ちに用いたもので、表をイグサで編んだが、その編み糸に用いたのがマダの繊維。



729-730 ノート情報: 荷鞍のコエツケモッコ M家 網の底を縄でしばってコエを入れる。縄をほどいて、コエを下に落とす。自製。M氏が地についてゐるのはコエカギ。

■久慈久喜浜の風景 (昭和37年10月5日 / 現久慈市久喜浜)

いずれも裏面に記載なく、ノートに詳細な記録を残している。ノートの末尾に移動手段と経費が書かれている。

ノート情報: 久慈・野田間バス 60円 野田・下安家間 90円 (二人前) ハイヤー: 野田・米田間 (3回) 120円×3=360円 野田・下安家間 460円

関連資料: 森口coll. ノートNo. 210 フィルムアルバムNo. 3 (6×6cm/70)



向って左) 731 ノート情報: 煮干しを煮るカマ
中央) 732 ノート情報: 空のセイロを運ぶ
向って右) 733 ノート情報: ヨコダで鱈を運ぶ



向って左) 734 ノート情報: スト物入れにもなる
中央) 735 ノート情報: 煮干を編む
向って右) 736 ノート情報: 煮干を編む



向って左) 737 ノート情報: 煮干を編む
中央) 738 ノート情報: 岩と松
向って右) 739 ノート情報: 竜神様の祠

■久慈小袖の民具（昭和37年10月5日カ／現久慈市小袖）

いずれも裏面に記載なく、ノートに詳細な記録を残している。
 関連資料：森口coll. ノートNo. 210 フィルムアルバムNo. 3 (6×6F/カ)



向って左)
 740 ノート情報：イカリ 船をとるのに用ゆ
 櫓またはヤマガ

向って右)
 741 ノート情報：イカリ カギの部分は鉄

◎ノートNo. 210記述の追加情報

下安家にて
 マツ 家の炉の隅にあった。現在の使用目的は(1)タキツケ、殊にトナカマのタキツケ (2)盆火
 イシヤネ マサの上に石をのせる

泉沢にて

ダンツケ馬 盛岡まで往復一週間かかった。葛巻・沼宮内を通て盛岡へ。途中平庭高原で休む。馬糧を持参せず、途中の草を食わせる。盛岡で塩と米(正月用)を交換した。

日常食
 メノコメシ メノコ(昆布をさらして粉としたもの)と稗を交ぜたもの。
 ヒエケア 蕪をこまかく刻んで煮て、これに稗を入れたかゆ
 アウケア 上記のものに稗の代り粟を入れたかゆ これを食べると子供は小便を多く催すので朝か屋に食べさせる
 ヒエシマ 八束を立てかけて笠(稗一束)をかける 一しまでは8束と笠・合せて九束 一しまから玄稗が3升とれる。精白すれば1升になる。
 シダミ シダミを乾し、むき、釜のアク水に入れて煮る。アクをとりとりし、新しい水をさしきして三日位煮る。キナコをかけて食べる。キナコは塩味。
 キジマ キジマをタキイバという。「タキイ」を積んだものがタキイバである。薪をタキイという。冬の間伐採する。

野田村米田にて

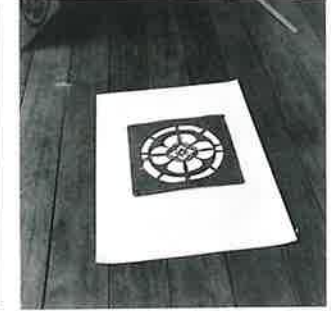
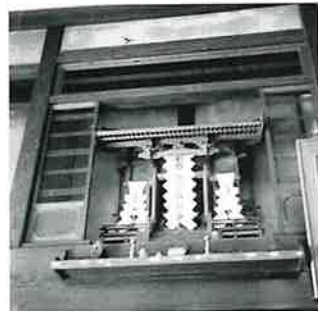
キド(栗材) 門柱のように屋敷の入口に一对立てる。元は家をあけると、穴に棒をさして左右に渡し牛馬の入ってくるのを防いだ。小袖や久喜浜では出産のときは一週間、この棒にムシロをかける。
 ソリの舵棒(栗材)

■一日市町と仲町の民具（昭和37年11月22-24日／遠野市）

11月22日から24日まで、遠野市一日市町、仲町（現まつだ松林堂）の民具調査を実施している。プリントのいずれも裏面に記載がなく、ノートに詳細な記録を残している。

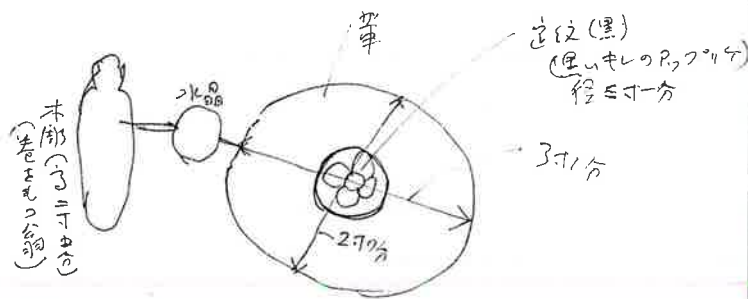
関連資料：森口coll. ノートNo. 208 フィルムアルバムNo. 1, 2 (6×6F/カ)

ノート情報：一日市町の南側の町家の裏を来内川が流れている。もとは南側の町家の庭には必ず「流れ井戸」があった。水脈は来内川とは関係ないという。掘り下げた一区画を石で積み、石壁の一部を半円の壁龕風にして水を湛え、前にセキをつくり、泉の水はあふれてセキを流れて、地下の溝に落ちた。駅の工事その近くに堀割がつくられて水脈を遮断し、且つ先年の台風の影響もあって水が乏しくなり、あふれるほど湧かないのでセキはカラセキになってしまった。流れ井戸をつぶしてしまった家が多く、僅く少数残っているものうち、1家は最もよく保存されている。悉く御影石でたみ、龕(北側)に向って左側(両側)に大きな石段が、セキと殆ど同じ長さにつけられ、更に龕と反対側(南側)の東割にも幅の狭い石段があって、セキのふちに降りられる。龕の径は3尺7寸=111cm 今年ボーリングして、コンクリートの円形のガワを埋めてみたが、水は龕の縁をあふれるほどは出ない。したがって、セキは涸れている。742-743-744



向って左) 745 ノート情報：庭の稲荷神社 間口3尺6寸 奥行4尺8寸 三本の幣束は十月末九日に更新。その右にオハライをする聖具あり。十月末九日の祭日には神官がきて拝み、また百姓たちもおまいりする。祠には果物、野菜、海のもの、油揚、卵、お酒などをあげる。
 向って右) 746 ノート情報：神棚のお宮 常居の長押の上にあり。年末に神官がきてお幣を切り、松の内にまた来て拝む。

向って左) 747 ノート情報：提灯箱 神棚の向って左の入り込みに三個乗せている。元は右の入り込み(今は何もない)にも乗せてあったと思われる。提灯(今はなし)は吊り提灯で、定紋をかき、祭日などに店につるした。箱は合わせ蓋、杉製、表面に悉く和紙を貼り、胡粉を白くぬり、正面に黒の定紋をあらわす。
 向って右) 748 定紋の型紙(もっこう)

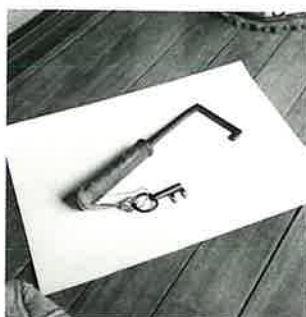


749 ノート情報：オマモリ入れ (ならん)

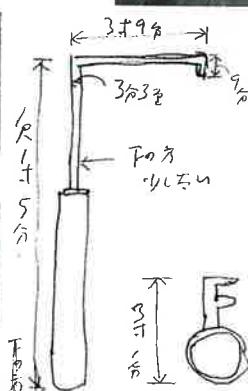
定紋(黒)(黒いキレのアップリケ)径三寸一分
革
水晶
木彫(高二寸五分)(巻をもつ翁)



750 ノート情報：煙草入 筒 絞皮風 (長さ6寸4分) 袋も同じ 金具銀(屋号紋) 根付は象牙(径1寸5分) 2寸7分 3寸5分



751 ノート情報：土蔵の鍵 土蔵の扉の落し枝をひき上げるもの 同上扉に外からかける錠の鍵



752 ノート情報：台ランプ 全高2尺6寸 ホヤの上辺を紅く染めている(裾ぼかし也) 台ランプ 左のもの 全高1尺8寸 ホヤは不透明の白ガラス 遠野町には大正三年に電灯があった



向って左) 753 ノート情報：戸棚 朴ノ木製 枠と戸は杉 漆塗 二段 下部に抽出し二つ 幅122cm 奥行45.5cm 上段高87cm 下段高87.5cm 抽出し高22cm 向って左下にあるのは今は米櫃に使われている旧銭箱
中央) 754 ノート情報：大根おろし 手製 台はマダの木を使うこと 歯は竹 金属は使っていないのでオロシガネの名には相当しない。
向って右) 755 漬物入れ(入れて運ぶ) 杉 朱塗 径24.2cm 深さ5.5cm 手の高さ16.5cm



756 ノート情報：手つき茶盆 朱塗 竹タガは黒漆塗 長径35.5cm 短径27.5cm 深さ4.5cm 手の高さ15cm



757 ノート情報：ヒツ 蓋付 鮮魚を入れるのに用いる 杉 朱塗(内部ももも朱塗) 長径48.5cm 短径32.5cm 深さ13cm 足高さ約4cm



758 ノート情報：ヒツ 蓋付 手あり 杉 朱塗 竹タガ黒漆塗 内部も朱 長径40cm 短径28.5cm 深さ10cm 足高約3cm 手高10cm



759 ノート情報：ひろぶた もと足があったが失われた 振舞ひのときなどお馳走をのせる台 黒地に漆絵で富士山の景がえがかれている 径55cm 深2.5cm ふち朱塗



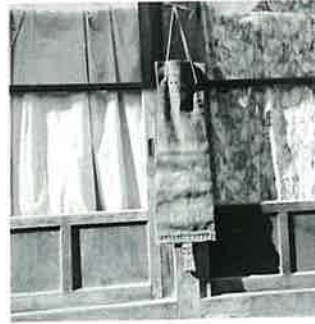
760 ノート情報：ゴカゴ 市販(生産地不明)(県外製品) 竹製 口径40cm 高14cm 底台の径27cm



761 ノート情報：ゴカゴ 市販 遠野製 シノ竹で編む(心は根曲り竹) 口径45cm 高27cm 足径32cm 足高5cm 十人以上の家族の家で用いるよい大きさ



762-763 ノート情報：ガンドウ 雪の日に着る一種の外装 クモと称する野草でつくる 注文品 作者は遠野に住み80才の人 白黒緑赤の糸を横に編み込んで色筋をあらはす 内側をひろげた幅(一番ひろいところ) 145cm 編目は14段 帽子42cm 28.5cm

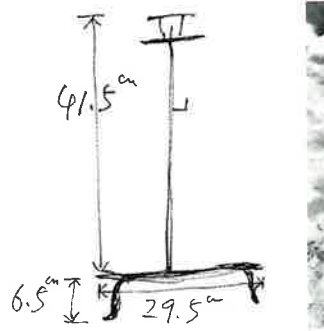
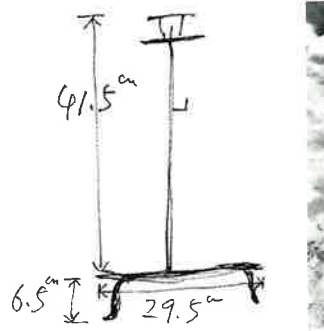


向って左) 764 ノート情報: 銭箱 今は米櫃(糶社'ツ)に用いられている 鍵をつけた痕なし 注文品 けやき 春慶塗 長70.05cm(内)蓋長さ24cm 厚さ1.5cm 幅42cm 高78cm
中央) 765 ノート情報: 銭箱
向って右) 766 ノート 情報: 銭入れ 鹿皮 ■■■ 裂か 全長87cm 幅上部49cm 中程25cm 下部28cm



向って左) 767 ノート情報: 三徳 白の皮内側は型押文様ある葡萄酒色の異国的なきれ 入れる所が三ヶ所 あり 当主の母方のお爺さんは幕末からの木綿屋で、よく江戸歩きをしたので、そのとき求めたものであろう。

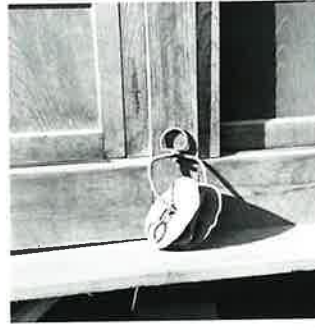
向って右) 768-769 ノート情報: 爛風入手製 爛風はランプのこと 杉製 ←この柄の上にランプの台をさして立てる ←この突起にランプの台をはめて動かないようにする 箱の裏に墨書あり 加茂久 蓋の裏の墨書 明治十二 卯七月 之符



770 ノート情報: 燭台 鉄製 さげ台(名称 使用目的不明)台の表面に物を置いた円い痕がついている。恐らく照明器具ならん 台は八角形 一角の長さ4.5cm 朱塗 手の長さ33cm 間隔16.5cm

771 ノート情報: 手あぶり 真鍮製 紐を結んだ形の手も真鍮 径は18cm 胴高9cm 手の高約6cm

772 ノート情報: 足あげ松 自製 踏台の面 長33cm 幅16.5cm 全高39.5cm 側面に墨書あり 文久元年 六月廿四日



向って左) 773 ノート情報: 駕籠 元は葦の中に仕舞ってあったが、今は葦の屋根の垂木につるしておく。向って左手からつき出ている樺(桐)はこの駕籠のかつき樺 葬式用の駕籠ではなかったらうか
中央) 774 ノート情報: クツゴ 注文品(遠野市内の70才位の人作った)藤製 口径26cm 高27cm

向って右) 775 ノート情報: 鳴輪 鉄製 三枚の鉄板を重ね、中央のものは四方のふちを折り曲げている。外側の板の径18cm



776 ノート情報: 鞍下
←紫に染めた麻で編む
←金皮で縁取る 裏は白麻で裏打ちしたアカネ木綿
←ふさ 長さ65cm 紫に染めた麻 このフサが馬の胴の両側に垂れる 嫁入り用

777 ノート情報: 馬の尻当 麻、黒地にアサギの紋(白のリンカクとる)町の紺屋で染めた。48cm 140cm

778-779 ノート情報: 網袋 箱(嫁入道具の)を入れて馬につける網袋 紺染めの麻で編む 全長148cm 箱を入れなくて平らにしたときの幅30cm 一つの袋に箱を一つ入れる 箱は桐製で黒漆塗。抽出しあり、化粧用品や身のまわりの品を入れる 嫁の乗った馬の鞍の両端に荷籠をつける。荷籠の前と後ろとに網袋をつける。箱がはいっているので網袋は水平になっている。朱の網でしばりつける。嫁は前の網袋につかまることができる。



780 ノート情報：網 馬の背にかける 紺染めの麻で編む 全長(ふさ除き)70cm 幅45cm ふさ長さ60cm 嫁入り用



781 ノート情報：網袋 前者と編み方が異なっている 全長130cm 平たくしたときの幅23cm



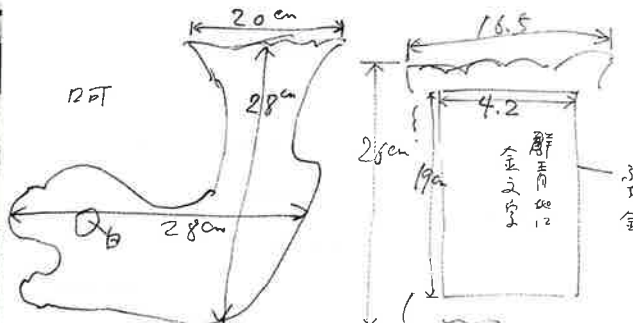
782 ノート情報：花籠 もと二つあって、八幡宮祭典のとき、二つをカツギ棒でかついで神輿のあとに従った。花籠には造花を飾った。明治時代で廃止された。



783 ノート情報：花籠の屋根 朴ノ木製 春慶塗 タルキは18本 二段につけてある。



784 ノート情報：花籠の屋根の棟を飾っていた鯨 阿吽につくる 朱に塗り、黒線で細部をあらわす。目は白。吽の方は青色、口や腹に朱。
額 花籠のどこにつけたのか不明 おそらく屋根にであろう 群青地に金文字 ふち金



785 ノート情報：花籠をかつぐ男がつけたマス(化粧まわし) 木綿(裏白) 黒地に白で文字をアップリケした 上の紐は白 幅55cm 高67cm(ふさ除き) ふさ長さ65cm? (麻は黄染め)



786 ノート情報：銭箱 今は台所に置いて米櫃に使用されている。杉材、塗料が施されている。長75cm 幅45.5cm 高45.2cm



787 ノート情報：かけずり箱 ケヤキ製 抽出し三段



788-789 ノート情報：机 筆返しを含めた甲板の長さ66.5cm 幅30.7cm 甲板から下までの高さ25.5cm 抽出しの高さ5cm 抽出しには引手二つ二ついているが、一つに作られている ケヤキの玉ぼく 透漆ぬり 右わきにあるのはコヒキダシ 杉(黒塗) 全面はケヤキに透漆。机の上にカケスズリ箱。後ろにヤダテ格子。死んだお爺さんはこのようにして机の前に坐っていた。



790-791 ノート情報：矢立格子 四つ折 上辺と障子枠の木辺とに穴が八つならんであけられている。五月節句には障子をはげし、この穴に矢を立てて飾る。



792 ノート情報：帳場格子 四つ折 蝶番でつなぐ 黒塗 格子の幅1.1cm 格子の間隔2.3cm 全高53.2cm 一つの幅35.3cm



793 ノート情報：大根おろし 歯は竹 台木製 ナマスすり 台は木、おろす口に金具の歯をつけた。口の表面は斜めにへこんでいる。大根を線にするとき用いる。長さ30.4cm 幅8.5cm



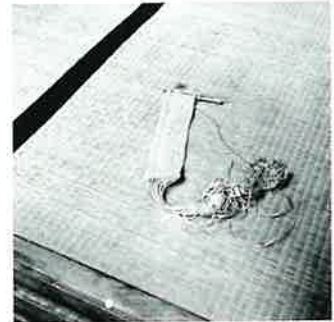
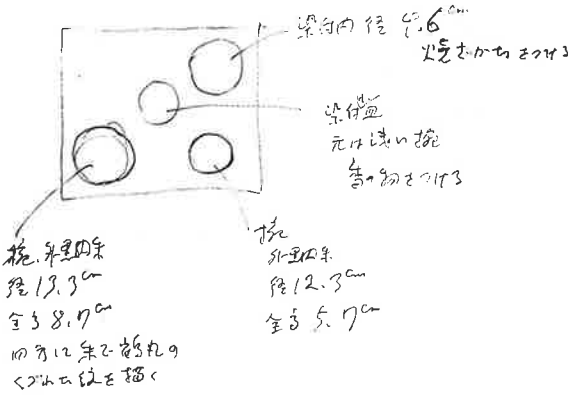
794 ノート情報：膳
 向って右端 33.7四方 深3.1 足高28cm ケヤキ 朱・赤塗
 中央下 30.6cm四方 深3.1 足高15cm 外黒内朱
 中央上 32.7四方 深3.6 全高10.5 外黒内朱 秋しまいのとき、働いた人にお馳走するとき使う。
 向って左端 30.6四方 深2.7 足高16.2cm 外黒内朱
 在の人きたとき、腰かけて食べさせるときの膳は扇形で、黒塗の粗末なもの。足はクルミ。クルミ膳といった。(クルミを割って、割ったところを■にした)



795 ノート情報：ひしゃげ ドブコクを入れる 外黒内朱 全高16.5cm (内、台の高さ3cm) 口径26cm 台の径12cm 口の長さ約9cm 口の幅、根元で6cm
 花見樽 青緑色 手の内側朱 タガの竹朱塗 ツル朱 蓋面についている穴(約1cm)から酒を注入。手の一つの外側(紋に向かって左)についている口からつぐ



796 ノート情報：神さま用の膳 客膳のときも同じ 膳は外黒内朱 33.2cm四方 深さ3.4cm 足高10.3cm 隅切り



797 ノート情報：紙より細工の未完成品



798 ノート情報：火鉢 大小 向って左 格子のガワ(木、黒ぬり)の中にアカガネの落しを装置 27.5cm四方 高足共15cm ひきだし一つ附く 30.7cm四方 高25cm 深3.5cm ケヤキ、透漆ぬり 中に径15.7cmの火入れ(金属)を装置



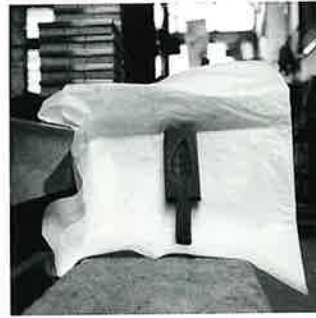
799 ノート情報：夏のタバコボン アケビ細工の容器に染付の火入れを装置 同じくアケビ細工の灰吹きを作りつけている。



800 ノート情報：筆入と判コ入 カバ皮を糸にして纏んだもの



801 ノート情報：外「コ」ン 木製 長30.3cm 幅19.8cm 高6.5cm 瀬戸の丸火鉢(高さ14.5cm)だが下に板を敷いて高くしている 径16.2cm)と灰吹(高さ17.2cm 竹、径6.2cm)を装置 働きにきている人に出す「外」コ」ン也 植木屋など来て働いているとき、お爺さんはこれを持って出て行き、一緒に休み、または働いているのを見ながら喫煙するとき使った。



向って左) 802 ノート情報：看板 ケヤキ 明治時代 松紋は金 文字に彫って黒く塗る 高4尺7寸 幅9寸8分 厚さ5分
 中央) 803 ノート情報：看板 ケヤキ 明治時代 最上部の「標商録登」は朱 文字彫って黒く塗る 高約4尺7寸 幅9寸8分 厚さ5分
 向って右) 804 ノート情報：「はちべいおこし形」この型に限り、裏にこう横に書いた和紙が貼られている。明治時代に使用。枳材 オコシの型は珍しい。

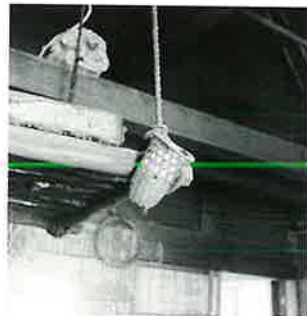
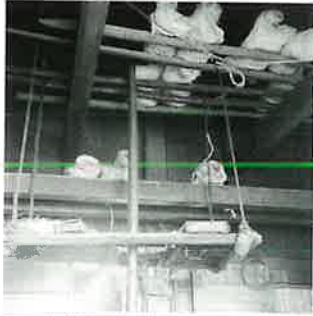


向って左) 805 ノート情報：種子菓子型の型など
 中央) 806 ノート情報：合はせ形 長さ1尺 幅1寸7分 厚5分 蓋の厚さ2分
 向って右) 807 銭箱 (大)長1尺4寸 幅8寸 高9寸2分 (小)長1尺2寸 幅6寸6分 高5寸5分 銭を入れる口は斜めにつけられている。

■立花の民具 ※郡司直衛氏撮影（昭和37年12月1-2日／北上市）

かねてから取材協力（S27こと八日など）をえているA家をたずね、農具や家財道具の調査を実施している。プリントのいずれも裏面に記載がなく、ノートに詳細な記録を残している。

関連資料：森口coll. ノートNo. 209 フィルムアルバムNo. 1, 2 (6×6cm/10)



向って左) 808 ノート情報：火棚(スか)になっている松材 炉の火の粉を押えるために設ける 下のヒビトの大き1m26 1m08 上の火棚の大き 長さ1m74 幅85cm 後方の棚には元は俵につめた米を乗せておき、炉の煙によって虫のつくのを防いだ。いまは柿を乗せ、炉辺の温度によって熟化を促進する。炉のカギのカギナワは、死者の出たときに取換えた。今は形式的になって、縄を拘って、それを手遊びの上のすたりに結ぶだけですませ、忘中終れば取り去る。
向って右) 809 ノート情報：ツケゲ(附け木)籠 竹製 手製 口径11.5cm 高17cm 火棚につるしてツケギを入れておいたが、今は紙くずがまっまっている。



向って左) 810 ノート情報：十能と炉かき 前のクドに用いる (十能)柄はスサノキ (炉かき)柄は楢
中央) 811 ノート情報：カバ箕 手製 ちりとり用 カバザクラの皮。ふちはゾーミカスサノキ。横巾(下部で)22cm (上部で)17cm 長さ27cm 深さ5.5cm
向って右) 812 ノート情報：ナガシの左手 水瓶 市販 口径53cm 高60cm



向って左) 813 ノート情報：ナガシの右手 戸棚は戸(二枚)の全幅93.5cm 高77.5cm スケド、戸棚等の建具は、煤でスパイテ油をひき、拭いて光沢を出した。
中央) 814 ノート情報：ナベタガキのそばの戸棚 台所と常居との境の、北割の柱をナベタガキとよび最も大きな柱である。この柱の幅を利用して柱と壁との間に戸棚を作りつけること多し。(略)ナベタガキはオンド(黄土)でスパイテ、よくふいて光らせたもの。これとナガシとは向い合っている。
向って右) 815 ノート情報：ハギリ 注文品 秋は大根を洗うのに用いる径67cm 高33cm

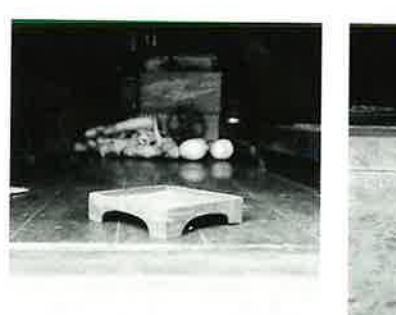


816 ノート情報：クモデ 手製 松 幹から枝が放射したものを利用(こうしたものは松に多し)一の手先から他の手先までの長さ55cm ハギリ(タガヤの上手なもの)の家にいたので自家用(径41.5cm高18cm)の上にクモデを仕掛け、といだ米を入れた一斗ザルをクモデの上に寄せ水をきる

817 ノート情報：水樽 市販 杉 径(表面) 24.5cm 全高30cm 手だけの高さ10cm 大きな口から水を入れ、小さな口から注ぐ。田植やタンボ仕事るとき、その場に水を持ってゆくのに用いる。これに入れておくと水はあたたまらない。一日おいてもぬるくならない。

818 ノート情報：クド 木尻の向って右にある。左の小さなものはフカシモノに使う クドの高さ35cm 釜口径36.5cm 頸高11cm 右の大きなもの 雑水釜(馬糞釜)かかる クド高40cm釜口径60cm 頸高17cm

819 ノート情報：キワリ台 木の幹を利用 木尻と戸との間に置く。正面の柱はセナカコスリ柱。戸はスケドとよび、中央のムソウ窓を覗いてムシマドという。乗っているのはキワリ(薪割)。キワリ台表面長径33cm 短径28cm 高30cm セナカコスリは幅22cm 面3cm



820 ノート情報：イタヤの曲物大館製とじた紐はカバザクラならん 弁当箱であったが、いまは種子などを入れておく



824 ノート情報：キスネビツ 注文品 ナベタガキと戸棚との常居面には、下方にキスネビツが据えられている。二段になっていて、上方の箱は米用、下の箱は米ビツの下まで延び、昔は粟を入れておいたが、いまは麦を入れる

821 ノート情報：ひつ 市販 朱塗 タガの竹は黒塗 長径51cm 短径34cm 高(蓋共)23.5cm 手は高12.5cm 幅9.5cm 食物を入れて運ぶ



825 ノート情報：仏壇の前の机 市販 中央の抽出しを失ふ 長さ95cm 奥行37.5cm 高(筆返しを含めて)30cm 仏壇と納戸の入口奥との境の柱はヨメゴ柱(栗材) ヨメゴ柱は幅28.5cm 面2.2cm ヨメゴ柱とナベタガキをつらねる梁をエビス大黒(松材)とよぶ。

822 ノート情報：膳 足のあるもの 日常使用のもの 白木 28.5cm四方 高6.5cm ふち高さ1.7cm



826 ノート情報：鉛売り箱 手製か注文品か知る者なし いまはかみそりやバリカンなど理容用品を入れている。両端に軸あり、紐でさげるようになっている。昔は正月に鉛を売り歩く慣習があった 長さ30cm 幅14.5cm 高14cm

823 ノート情報：ヘギ 足なし 台所で食べるときに用いる。赤と透漆塗 25cm四方 高1.5cm ふち高さ0.8cm 寿字は墨書



827 ノート情報：風箱 箱の内部に仕切りあり、中板をおく 蓋は面とり。(蓋の裏の墨書) 毛虱入箱(人名)／蜜箱／風箱 櫛箱 中之子箱とも云フ (中板の裏の墨書) 諸品入箱／中板



828 ノート情報：帖面箱 ひき出し二段 片びらき戸あり、表に引き手 42cm 28cm 高29.5



829 ノート情報：タンス 市販 朱漆 鉄金具 中央の二つの抽出しをあけるには、中央のタテボウ(かく呼ぶ)の上部の鍵をあけ、棒をはづしてからあける。幅1m06 高68 奥行62.5cm



830-831 ノート情報：頬かむり 室内では後ろに結び、戸外では顎下に結ぶ。こうすると頬があたかい。



向って左) 832 ノート情報：かけすずり箱 市販か注文品か 27cm 17cm 高17.5

向って右) 833-834 ノート情報：ふんごみ 今はだれもはかない 紺木綿 自製



835-836 ノート情報：サゴリツナ(探り網の意)手製 照明の不安定な時代、用便のとき、これを手で探って握る。



837 ノート情報：厩の中に祀られた不動さま 粗末なお堂のなかに梵字を縦書きにした白紙が貼ってある。赤ん坊を厩の不動さまに御語りさせる慣行はない由



838 ノート情報：薬を入れた籠 手製 用便に紙を使わなかったとき、これにワラを入れて、つるしておいた 口径40cm 高(口辺まで)37cm



839 ノート情報：ツチ 手製 薬を打つ 槌 コマヤの隅にワラウチ石を据え、その上で打つ イタヤ



840-841 ノート情報：ワラシゴキ 手製 但し鉄の爪は鍛冶屋に作ってもら 木部は主に楷を用ゆ



但し鉄の爪は鍛冶屋に作ってもら 木部は主に楷を用ゆ



842 ノート情報：縄たぐり 縄の長さ(何ヒロあるかを)計るのに用ゆ 1ヒロは5尺 スサの木を用ゆ スサの木は滑らかなので縄のすべりよし



843 ノート情報：コダシ 物入 自製 高28cm 横巾22cm 奥行18cm この家では正月の餅を入れ水につけてホシ餅をつくる



844 ノート情報：ネコケラ 手製



845 ノート情報：クツツマゴ 手製 靴のように立ち上り、上を結ばない



846 ノート情報：ヒラツマゴ アクド(足の後部)は露出している それでアクドカケを並用する



847 ノート情報：マオケ 注文品 廁に置き馬糞を入れる



848 ノート情報：マオケをかけるカギ木 鉋と鋸を使って自家製 37cm 20cm



849 ノート情報：マノチザル(マオケザルならん)注文品 竹製 馬の飼葉を計ってマオケに入れるのに用ゆる 口径65cm 高53cm



850 ノート情報：フネ 自家製 アマカゼという木の割りもの もとは鶏に水をやるのに使ったが今は豚の餌入 長径58cm 短径23cm 深さ9cm アマカゼは温気に強く雪の中でも燃える



851 ノート情報：エブリ 手製 柄は鋳台を利用



852-853 ノート情報：小便樽と小便桶 注文品 小便所の裏手に置く ヒシヤクのはいつている所が小便のため。



854 ノート情報：小便をつぐもの 注文品 注口は竹



854 ノート情報：小便をつぐもの 注文品 注口は竹



855 ノート情報：ショイモッコ 自製
ズサかゾーミの木をしに曲げ、これを
四本組み合せ縄をからむ 口径65cm
深さ57cm 肥除けは高21cm 幅25cm



859 ノート情報：砥石 水入れの桶 鎌
小桶 注文品 口径13.5cm 底の径18cm
高15cm 上のタガはとれている ツルを
つけている



863 ノート情報：ニホシバ

856 ノート情報：鎌の置き場所 鎌鋭ぐ
とき水を入れる小桶もつるされている



860 ノート情報：マドーリ 櫛 自製 全
高56cm マタの先のひらき8.5cm



864 ノート情報：洗った大根

857 ノート情報：麦の土入れ 麦の両側
の土をかいてかける 柄の長さ1m5 金
網の部分 長さ32cm 先の幅15cm 基の
幅15.5cm



861 ノート情報：鉦の鞘 自製 くりぬ
いて裏に板をはめたもの(杉材) ナタ
の柄長さ19cm



858 ノート情報：かけつち(カケツツと
訛る)自製 櫛やマガの木のコブを利用
稻杭(稲を干すときの棒)を打つときに
用ゆ。また屋根換えのとき足場の杭を
打つにも用ゆ。



862 ノート情報：コケシ 桐 今のおぢ
いさんが子供のために作ったもの 目
鼻は墨で書き、口に朱を用ゆ。足をつ
けた柄穴が見える

865 ノート情報：小正月粟穂木の粟穂 燃
料にするため裏の小屋際に積んである
本来はカジノキを用ゆ。カジノキはパチ
パチとよく燃えるので、四月二日のピ
シャモンさんでゴマをたくのに貰ひにき
たものであった。写真のものは杉。

◎ノート補足情報：立花 A家にて 元は木炭などは使わなかった。コタツには炉のオキを入れ、上にどっさりともミガラをかけた。あたと、まだいぶつていて、香ったものだ。老人は、炉の火の方が(ストーブなどよりも)あたたまるといっている。

主な参考・引用文献一覧

※『論集 民俗篇』再録の稿は(★)を付す。
※当館蔵書は(♥)を付す。

▼大迫町史編纂委員会編 1983.12『大迫町史 民俗資料編』(大迫町)
▼森口多里先生論集刊行委員会編 1986.3『森口多里論集 美術篇』(第一法規出版)
森口多里先生論集刊行委員会編 1986.3『森口多里論集 民俗篇』(第一法規出版)
▼門屋光昭『森口多里資料紹介』(『いわて文化財』97、社団法人岩手県文化財愛護協会)
▼北上市立博物館編 1990.7『森口多里 北上の民俗写真展』(北上市立博物館)
▼北上市立博物館編 1994.3『きたかみ民俗散歩 森口多里とともに』(北上市立博物館)
秋山真一 2007.3『近代知識人の西洋と日本』(同成社)
ふるさと岩手の芸能とくらし研究会 2007.6『昭和を歩いた岩手の巨人 森口多里』(『とりら』創刊号所収)
▼岩手県立博物館編 2009.3『岩手県立博物館収蔵資料目録第21集 民俗Ⅲ 森口コレクション』(岩手県文化振興事業団)
▼森口陽子 2009.9『きたかみ民俗散歩 森口多里とくらし』(『盛岡市先人記念館だより』43、盛岡市先人記念館)
▼岩手大学アートフォーラム編 2009.11『森口多里 その足跡を辿る ●企画展』図録(岩手大学アートフォーラム)
▼岩手大学アートフォーラム編 2009.12『森口多里新聞記事掲載集』(岩手大学アートフォーラム)
▼秋山真一 2010.3『目的芸術から民俗芸能へー森口多里における戦前から戦後』(『東北文学の世界』所収、盛岡大学文学部日本文学科)
郡司直衛 2010.7『雑記帳シリーズVI・第四・脂葉箱』(ギャラリーくらぼっこ)
▼田崎農巳 2010.9『一つの資料45』森口多里宛高村光太郎書簡 昭和二十三年四月十八日(『盛岡市先人記念館だより』45、盛岡市先人記念館)
小野公一 2011.12『森口多里と郡司直衛』(佐々木書店)
.....
森口多里 1923『郷土話』(『東方時論』8-1所収、東方時論社)
森口多里 1930『掃門長者伝説の浄瑠璃化』(『民俗芸術』3-8所収、民俗芸術の会)
▼森口多里 1932『正月行事の記憶』(『旅と伝説』5-1所収、三元社)
森口多里 1932『民俗美術工藝展覧會概評』(『民俗芸術』5-6所収、民俗芸術の会)
▼森口多里 1933『旅と郷土生活の縦断面』(『旅と伝説』6-9所収、三元社)
▼森口多里 1934『二十年前の湯ヶ原』(『旅と伝説』7-2所収、三元社)
▼森口多里 1935『維新前後の噂』(『旅と伝説』8-2所収、三元社)
▼森口多里 1936『驢耳王に関して』(『旅と伝説』10-1所収、三元社)
▼森口多里 1936『南部のホシ餅』(『旅と伝説』11-8所収、三元社)
▼森口多里 1937『陸中水沢町聞書』(『旅と伝説』12-3所収、三元社)
▼森口多里 1937『陸中水沢町聞書(二)』(『旅と伝説』12-4所収、三元社)
▼森口多里 1937『陸中水沢町聞書(三)』(『旅と伝説』12-5所収、三元社)
▼森口多里 1937『陸中水沢町聞書(四)』(『旅と伝説』12-6所収、三元社)
▼森口多里 1937『陸中水沢町聞書(五)』(『旅と伝説』12-7所収、三元社)
▼森口多里 1937『陸中水沢町聞書(六)』(『旅と伝説』12-8所収、三元社)
▼森口多里 1937『陸中水沢町聞書(七)』(『旅と伝説』12-9所収、三元社)
▼森口多里 1938『吾妻余波』から(一)。(『旅と伝説』13-2所収、三元社)
▼森口多里 1938『吾妻余波』から(二)。(『旅と伝説』13-3所収、三元社)
▼森口多里 1938『花折りの童謡其他』(『旅と伝説』13-11所収、三元社)
▼森口多里 1939『聞書補遺(陸中水沢町)』(『旅と伝説』14-2所収、三元社)
▼森口多里 1939『陸中駒形神社祭礼の山祭』(『旅と伝説』14-9所収、三元社)
▼森口多里 1939『東奥掃門長者物語(一)』(『旅と伝説』14-10所収、三元社)
▼森口多里 1939『東奥掃門長者物語(二)』(『旅と伝説』14-12所収、三元社)
▼森口多里 1940『東奥掃門長者物語(三)』(『旅と伝説』15-2所収、三元社)
森口多里 1942『黄金の馬』(三国書房) 1971『黄金の馬』(三弥井書店)
森口多里 1942『民俗と芸術』(二見書房)
森口多里 1942『報道写真の美』(『報道写真』2-7所収、写真協会)
森口多里 1943『少年時代の正月』(『知性』新年号所収、河出書房)
森口多里 1943『色彩論-天然色写真の時局性』(『写真文化』26-2所収、アルス)
森口多里 1943『郷俗拾遺-水沢町』(『旅と伝説』16-2所収、三元社)
森口多里 1943『風俗改善の標準』(『現代』24-4所収、大日本雄弁会講談社)
森口多里 1944『町の民俗』(三国書房) 1950『町の民俗』(ジープ社)
森口多里 1946『民俗芸術の再興』(『アトリエ』243所収、アルス出版社)
森口多里 1946.12『自然から生れた藝能』(中西悟堂編『自然と四季』1-7所収、日新書院)
▼森口多里 1948『ホニホの呪術』(『民間伝承』12-1所収、民間伝承の会)
▼森口多里 1948『小正月訪問記』(『民間伝承』12-3,4所収、民間伝承の会)
森口多里 1948『化鳥考』(『柳田国男先生古稀記念文集』3所収、民間伝承の会)
森口多里 1948『村の藝能大会』(『教育と社会』3-10、社会教育連合会)
▼森口多里 1949『粟穂木を足駄木に』(『民間伝承』13-4所収、民間伝承の会)
森口多里 1950『屋敷に祀る神』(『東北民俗研究』1所収、東北民俗学会)
森口多里 1950『屋敷に祀る神』(『東北民俗研究』2所収、東北民俗学会)
▼森口多里 1951『マイリノホトケ』(『民間伝承』15-10所収、民間伝承の会)
▼森口多里 1951『聖物の捨てどころ』(『民間伝承』15-12所収、民間伝承の会)
森口多里 1951『私の大夜着』(『染織美術』2-9、日本染織美術協会)
森口多里 1951『農村の雑菓子』(『美しい暮しの手帖』S26-2、暮しの手帖社)

森口多里 1951『飯をめぐる』(『美しい暮しの手帖』S26-12、暮しの手帖社)
▼森口多里 1952『江刺郡のマイリノホトケ』(『民間伝承』16-6所収、民間伝承の会)
▼森口多里 1952『マイリノホトケ補遺』(『民間伝承』16-7所収、民間伝承の会)
▼森口多里 1952『岩手のチュウモン』(『民間伝承』16-8所収、民間伝承の会)
森口多里 1953.3『岩手県民家のノートから』(『民俗建築』9所収、日本民俗建築学会)
▼森口多里 1954『村の怪盗』(『民間伝承』18-5,6,7所収、民間伝承の会)
森口多里 1955『農村婦人の労働衣-岩手民俗工芸のノートとして』(『盛岡短期大学研究報告』3所収、盛岡短期大学研究部)
森口多里 1955『北上山地の芸能と信仰』(和歌森太郎ほか編『日本文化風土記 東北篇』、河出書房)
柳田国男監修・民俗学研究所編 1955『日本民俗図録』(朝日新聞社) ※提供写真5点掲載
森口多里 1957『猿岩椿』(『女性と経験』2-1所収、女性民俗研究会)
森口多里 1958『家でまつる神々-岩手県』(『民俗』31所収、相模民俗学会)
▼森口多里 1958『地方別調査研究 岩手県』(『日本民俗学大系』11所収、平凡社)
森口多里 1959『酒宴の歌』(『女性と経験』3-1所収、女性民俗研究会)
★森口多里 1959『山根山の田遊祭』(『日本民俗学会会報』9所収、日本民俗学会)
▼★森口多里 1959『四つの隅の呪法』(『民間伝承』23-1所収、六人社)
森口多里 1959『岩手風土記』(雄山閣出版株式会社講座日本風俗史編集部編『講座日本風俗史』5所収、雄山閣出版)
森口多里 1959『福原小路の農家と民具』(竹内芳太郎編『民家 今和次郎先生古稀記念文集』、相模書房)
▼森口多里 1959『物故者紹介 橋正一』(『日本民俗学大系』5所収、平凡社)
★森口多里 1960『雪国のキモノ・ハキモノ』(『民芸手帖』60-2[21]所収、東京民芸協会)
森口多里 1960.4『いわての民家の屋根』(『民俗建築』28所収、日本民俗建築学会)
★森口多里 1960『北国のゴカゴ』(『民芸手帖』60-5[24]所収、東京民芸協会)
森口多里 1960『南部・馬産地の民芸』(『民芸手帖』60-6[25]所収、東京民芸協会)
★森口多里 1960『盆の花と燈籠』(『民芸手帖』60-7[26]所収、東京民芸協会)
▼★森口多里 1960『絵馬雑記』(『民間伝承』24-3所収、民間伝承の会)
★森口多里 1960『正月行事と他の月との関係』(『日本民俗学会会報』11所収、日本民俗学会)
森口多里 1960『岩手県の文化財』(『郷土の文化財』2所収、宝文館)
★森口多里 1961『農村の人形芝居』(『民芸手帖』61-1[32]所収、東京民芸協会)
森口多里 1961『いわてのエッコ』(『民芸手帖』61-5[36]所収、東京民芸協会)
森口多里 1961.8『岩手のうまや』(『民俗建築』35所収、日本民俗建築学会)
▼★森口多里 1961『旧六月十五日の藁馬』(『民間伝承』25-2所収、六人社)
★森口多里 1961『田植聞書(岩手県)』(『日本民俗学』18所収、日本民俗学会)
森口多里 1961『夏まつり(岩手)』(『まつり』2所収、まつり同好会)
森口多里 1961『岩手県の火祭』(『まつり通信』19所収、まつり同好会)
★森口多里 1961『夏の夜祭と食味』(『民芸手帖』61-7[38]所収、東京民芸協会)
森口多里 1961『ホヤについて』(『民芸手帖』61-9[40]所収、東京民芸協会)
★森口多里 1962『炉の鉤』(『民芸手帖』62-2[45]所収、東京民芸協会)
★森口多里 1962『天井の八角時計其の他』(『民芸手帖』62-5[48]所収、東京民芸協会)
森口多里 1962.9『いわての町家とところどころ』(『民俗建築』41所収、日本民俗建築学会)
森口多里 1962『郷土だより-岩手県の火祭』(『まつり』4所収、まつり同好会)
▼森口多里 1962『おさご橋の話』(『民芸手帖』62-9[52]所収、東京民芸協会)
▼岩手県教育委員会 1962『岩手の民俗芸能 山伏神楽篇』(岩手県教育委員会) ※執筆担当
森口多里 1963『岩手地方の木器』(『物質文化』2所収、物質文化研究会)
森口多里 1963『田遊神事と田植踊』(『まつり』5所収、まつり同好会)
森口多里 1963『岩手県』(『日本祭礼風土記』3所収、慶友社)
★森口多里 1963『杓子づくり』(『民芸手帖』63-3[58]所収、東京民芸協会)
▼森口多里 1963『岩手町の民俗芸能』(岩手町教育委員会)
▼森口多里 1963『民俗の四季』(熊谷印刷出版部) 1980『訂正増補民俗の四季』(歴史図書社)
森口多里 1963『そば切り以前』(さらしな会)
森口多里 1964『岩手の山伏神楽』(『まつり』8所収、まつり同好会)
▼森口多里 1964『ワッソン氏とキノコ特集2-ノグチキノコとコロバコ』(『民間伝承』28-1所収、民間伝承の会)
★森口多里 1964『笑顔のカマガミ』(『民芸手帖』64-6[73]所収、東京民芸協会)
★森口多里 1964『かまがみ隠退』(『民芸手帖』64-12[79]所収、東京民芸協会)
森口多里 1965『鉢巻と頬かぶり』(『民芸手帖』65-5[84]所収、東京民芸協会)
岩手県教育委員会 1965『岩手の民俗芸能 念仏踊篇』(岩手県教育委員会) ※執筆担当
★森口多里 1966『明治末期の婚礼風景』(『民芸手帖』66-1[92]所収、東京民芸協会)
森口多里 1966『各地だより-岩手県』(『まつり』11所収、まつり同好会)
森口多里 1966『毛越寺の延年舞』(岩手県教育委員会)
岩手県教育委員会 1966『岩手の民俗資料-昭和38年民俗資料緊急調査報告-』 ※

執筆担当
森口多里 1967「旧南部落領の盆踊」（『民俗芸能』30所収、民俗芸能学会）
森口多里 1967「生きている民具」（『民芸手帖』67-9[112]所収、東京民芸協会）
森口多里 1968「御糸良神社のオシラサマについて」（『東北民俗』3所収、東北民俗の会）
★森口多里 1968「岩手の屋根看板」（『民芸手帖』68-7[122]所収、東京民芸協会）
★森口多里 1968「自然材の包装」（『民芸手帖』68-11[126]所収、東京民芸協会）
森口多里 1969「毛越寺摩多羅祭と延年祭」（『民俗芸能』38所収、民俗芸能学会）
森口多里 1969「地方別調査研究の現況－岩手県」（『日本民俗学』65所収、日本民俗学会）
★森口多里 1969「民俗の中の花巻人形」（『民芸手帖』69-4[131]所収、東京民芸協会）
▼岩手県教育委員会 1969『岩手の民俗芸能 獅子（鹿）踊篇 上巻』（岩手県教育委員会） ※執筆担当
★森口多里 1970「岩手のオミキノクチ」（『民芸手帖』70-1[140]所収、東京民芸協会）
▼岩手県教育委員会 1970『岩手の民俗芸能 獅子（鹿）踊篇 下巻』（岩手県教育委員会） ※執筆担当
▼森口多里 1971『岩手県民俗芸能誌』（錦正社）
★森口多里 1972「かつぐ祭礼屋台」（『民芸手帖』72-5[168]所収、東京民芸協会）
▼★森口多里 1973「仏像と民俗」（『いわて文化財』15所収、社団法人岩手県文化財愛護協会）
田中喜多美・森口多里・吉川保正 1973『御所ダム水没緊急地区文化財調査報告書』（盛岡市教育委員会） ※執筆担当
森口多里 1973「もう八十歳」（『民間伝承』37-1所収、六人社）
森口多里 1974「岩手の田植踊」（『民俗芸能』54所収、民俗芸能学会）
★森口多里 1975「岩手民俗ノート 小正月の装飾」（『民芸手帖』75-1[200]所収、東京民芸協会）
▼森口多里 1975「岩手県の歳時習俗」（『東北の歳時習俗』、明玄書房）
▼★森口多里 1975「謎の石碑」（『いわて文化財』26所収、社団法人岩手県文化財愛護協会）
森口多里 1975「熊野神社祭典の泣き相撲」（『まつり通信』177、まつり同好会）
▼森口多里 1975「花巻人形の民俗（特別寄稿）」（熊谷章一・吉田義昭『花巻人形』所収、郷土文化研究会）
森口多里 1976「神楽舞の構成」（『まつり通信』186所収、まつり同好会）
森口多里 1976「真澄見聞の民俗の廃滅と残存」（『菅江真澄全集6』月報8所収、未来社）
森口多里 1976「岩手県民俗芸能拾遺」（『藝能論叢』、錦正社）
★森口多里 1976「吾野の小正月飾り」（『民芸手帖』76-1[212]所収、東京民芸協会）
★森口多里 1976「マッカ木の民具」（『民芸手帖』76-8[219]所収、東京民芸協会）
★森口多里 1976「岩手の編笠・樺笈・はばき」（『民芸手帖』76-11[222]所収、東京民芸協会）
▼森口多里 1976『日本の民俗 岩手』（第一法規）
▼森口多里 1977「いかだ山の神について」（『いわて文化財』41所収、社団法人岩手県文化財愛護協会）
▼森口多里 1978「ふたたび『いかだ山の神』について」（『いわて文化財』44所収、社団法人岩手県文化財愛護協会）
▼森口多里 1978「山の神問答大団円」（『いわて文化財』48所収、社団法人岩手県文化財愛護協会）
▼水沢市史編纂委員会編 1978『水沢市史』6（水沢市刊行会） ※総論p.1-69執筆
★森口多里 1979「第28回全国民俗芸能大会特集号 選野郷の青笹獅子踊」（『民俗芸能』59所収、民俗芸能学会）
森口多里 1979「仙北への道」（『歴史民俗誌みちのく』所収、みしま書房）
★森口多里 1980「大乘神楽の『榊』と『鐘巻』」（『芸能』22-8、芸能発行所）
森口多里 1980「黒森神楽と陸中の修験芸能」（五来重編『山岳宗教史研究叢書』14所収、名著出版）
★森口多里 1982「みちのくの山祭り」と山車」（田中義廣編『まつりと芸能の研究』1、まつり同好会）
▼森口多里 1982『盛岡市文化財シリーズ第7集 盛岡の民俗芸能』（盛岡市教育委員会）
森口多里 1983「岩手の厩と俗信」（『北海道・東北地方の住い習俗』、明玄書房）
森口多里 1983「庚申の影像」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「寒村の神々」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「西和賀の神々」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「月の出の神秘」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「大原の水かけ祭り」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「末前の人形立て」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「神前の冒険」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「お鳩取りの神事」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論

集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「妙見山黒石寺蘇民祭調査」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「佐々木喜善の見た蘇民祭」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「毛越寺の蘇民祭」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「音ききの行事」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「音たての行事」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「羽田の小槌祭」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「お座割り・嫁渡しの式・ウチ板の式」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「登米町の婚儀」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「婚儀のヴァライティ」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「むこいり・みづめぶるまい」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「苞の魚・にらみざかな」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「サイノカミ・デーベラ」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「タルコナゲ・ツトコナゲ」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「初夜の習俗」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「ソウメンと梅干」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「手打ちソバと箸」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「わき役の二いろ」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「そば売り婆さん」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「重箱のトリコロール」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1983「葬儀」（森口多里先生論集刊行委員会編『森口多里論集 民俗篇』所収新稿、第一法規）
森口多里 1984「岩手県の火の民俗」（『北海道・東北地方の火の民俗』、明玄書房）
.....
須藤功・宮本常一・宮田登編 2003『早川孝太郎全集第十二巻 雑纂・絵と写真』（未来社）
須藤功 2004『写真でつづる宮本常一』（未来社）
朝岡康二 2004「デジタル画像の利用の試み－伝承的な仕事と身体活動をめぐって－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』117所収、国立歴史民俗博物館）
人類文化研究のための非文字資料の体系化第3班編 2007.3『神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料4 手段としての写真－「澁澤写真」の追跡調査を中心に－』（神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議）
小川直之編 2009.3『画像資料と民俗研究』（國學院大學1106研究室）
福田アジオ 2009.3「画像資料と民俗学」（『年報 非文字資料研究』5所収、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター）

おわりに

近ごろ、書店の「人文科学」「民俗学」のコーナーをのぞくと、宮本常一(1907-1981)の写真集の多さに驚かされます。编者それぞれの視点で、宮本が遺した膨大な数の写真を選択分類し一冊にまとめたものです。

その宮本常一と同時代を生き、「岩手」というフィールドを歩き記録を残した森口多里。その遺品である当館の森口コレクションもまた広く公開され、将来的に資料として「懐かしさ」を感じずる以上の可能性や更なる価値が見出されていくことを願ってやみません。

近年、「森口多里」を再評価しようとする取り組みが各地で行われています。

その契機となったのは秋山真一さんの高著『近代知識人の西洋と日本 森口多里の世界』(同成社、2007.3)と、いわての芸能とくらし研究会の貴誌『とりら』(2007.6)であったと記憶しています。

その後は、盛岡市先人記念館テーマ展『盛岡の民俗芸能と先人たち』(2009.7.24-9.27)、岩手県立図書館企画展『森口多里とその時代』(2009.9.25-10.19)で大きく取り上げられました。

さらに、岩手大学アートフォーラムの事業として展覧会『森口多里 その足跡を辿る』が企画され、森口とゆかりのある三都市～盛岡市・岩手大学附属図書館アザリアギャラリー(2009.11.7-14)、北上市・市民交流プラザ(2009.11.19-22)、奥州市・水沢公民館(2010.11.3-7)を巡回しました。

そのすべての展覧会において出品紹介いただいたことで、当館の森口コレクションの閲覧・活用希望等も年々増えてきています。

それゆえに、本報告書は「活用」を前提とした目録としての機能もあわせもつよう、撮影時の「露出」や微々たるアングルの差異をのぞき、すべての写真を掲出するよう心掛けました。本書に掲載できなかった昭和38年から昭和51年までの撮影分と撮影場所・年代等不詳のカット、昭和23年から同37年までの民俗芸能(民俗芸能の記録撮影を主体とする祭礼を含む)分については、整理が済み次第報告していく予定です。

なお、プライバシーについてはできる限り配慮したうえで掲載しましたが、なにかお気づきの点がございましたら、ご連絡いただければ幸いです。

最後に、森口多里コレクションの整理作業にあたっては、ご子息の光彦さんとご息女の陽子さんから多大なるご協力をいただいてまいりましたが、去る2010年6月に光彦さんが逝去されました。ここに、生前のご厚情に深く感謝申し上げます。また、本書作成にあたっては、多くの方々からご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。(川向)

岩手県立博物館調査研究報告書第28冊

森口多里が遺した昭和の記憶 1

～館蔵森口多里写真コレクションから～

平成24年3月29日発行

編集 岩手県立博物館

〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34番地

TEL 019-661-2831

FAX 019-665-1214

刊行 公益財団法人岩手県文化振興事業団

〒020-0023 盛岡市内丸13-1

TEL 019-654-2235

印刷 川嶋印刷株式会社